

【書式A】

施設名 4館共通

処理番号 1410ABCD

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究							
【年度計画】								
科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金等外部資金を活用した調査研究								
担当部課	東京国立博物館学芸研究部 京都国立博物館学芸部 奈良国立博物館学芸部 九州国立博物館学芸部			事業責任者	部長 田沢裕賀 部長 栗原祐司 部長 内藤栄 部長 小泉恵英			
【実績・成果】								
外部資金を活用した調査研究を下記件数実施した。								
(東京国立博物館)								
・科学研究費補助金：9件								
・学術研究助成基金：16件								
・科学研究費補助金と学術研究助成基金の両方：0件								
(京都国立博物館)								
・科学研究費補助金：1件								
・学術研究助成基金：5件								
・科学研究費補助金と学術研究助成基金の両方：0件								
(奈良国立博物館)								
・科学研究費補助金：2件								
・学術研究助成基金：4件								
・科学研究費補助金と学術研究助成基金の両方：0件								
(九州国立博物館)								
・科学研究費補助金：3件								
・学術研究助成基金：3件								
・科学研究費補助金と学術研究助成基金の両方：0件								
【補足事項】								
【定量的評価】項目								
	元年度実績	目標値	評価	経年変化	27	28	29	30
東京国立博物館	25件	-	-		26	22	22	18
京都国立博物館	6件	-	-		3	7	11	8
奈良国立博物館	6件	-	-		3	3	5	6
九州国立博物館	6件	-	-		10	8	8	7
【年度計画に対する総合評価】 評価：B				【判定根拠、課題と対応】 外部資金を活用した文化財に関する調査研究を行った。調査研究の実施においては、各博物館での文化財の収集・保管・展示、教育普及活動等事業と一体的に取り組む、30年度同様順調に成果を挙げている。				
【中期計画記載事項】 文化財に関する調査研究を実施し、その保存と活用を推進することにより、次代への継承及び我が国の文化の向上に寄与する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B				【判定根拠、課題と対応】 文化財に関する調査研究実施に際し、外部資金を獲得し活用することで、文化財の保存と活用の推進の一助とした。2年度以降も外部資金活用による調査研究の活性化を図る。				

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア a. 特別調査「法隆寺献納宝物」(第41次)		
【事業概要】 当館では、昭和54年より、法隆寺献納宝物の調査を館内及び館外の専門研究者とともに共同で行ってきた。本事業は全ての研究者に対して、画像や概要など研究のための情報を提供することを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 河野一隆
【主な成果】 (1) 調査概要 ・30年度に引き続き、「文王呂尚・商山四皓図屏風」の調査を実施した(9月5日～6日外部調査員・東野治之、松原茂、相澤正彦、北澤菜月、11月5日赤外線撮影、2年1月8日赤外線撮影・蛍光X線撮影、2年1月10日蛍光X線撮影)。 ・通年にわたって法隆寺献納宝物の染織品調査及び法隆寺宝物館保管の上代裂について調査を行い、法隆寺宝物館で保管する上代裂のうち、「袍残欠」について、本格修理を行っている。 ・元年度は新規調査対象作品として「龍首水瓶」を予定(2年3月23日)していたが、新型コロナウイルスの影響のため、研究会開催を延期した。 (2) 調査の成果 ・報告書：『法隆寺献納宝物特別調査概報40 文王呂尚・商山四皓図屏風2』を刊行した。			
 蛍光X線による彩色材料調査			
【備考】 (1) 「商山四皓・文王呂尚図屏風」調査日数 5日 報告書：『法隆寺献納宝物特別調査概報40 文王呂尚・商山四皓図屏風2』(2年3月30日発行) (2) 染織品の修理 1件			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	法隆寺献納宝物の各種作品に関して、継続的な調査と修理を実施することができた。また、「文王呂尚・商山四皓図屏風」については、計画どおり概報を刊行でき、本調査による新知見を掲載できた。「龍首水瓶」については研究会開催をやむなく延期したが、年度明けの早い段階で開催予定である。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	法隆寺献納宝物の絵画、書跡、染織の各種作品を様々な観点から調査し、得られた新たな知見を概報刊行等により継続的に公表するなど、中期計画に沿った取組を順調に進めている。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア b.特別調査「書跡」第17回		
【事業概要】 本事業は平成17年度から始まり、当館収蔵品及び寄託品にかかる書跡・典籍、古文書について、古写経、和様の書、古文書など対象テーマを設定し、1年に1回ないし2回、当機構内の関係職員を招聘し、実施しているものである。このうち古写経の調査は、当館収蔵品について一区切りついたことから、28年度から3か年、奈良国立博物館で実施した。元年度は京都国立博物館の収蔵品を対象に実施し、比較検討を行いながら調査研究を行った。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	書跡・歴史室長(保存修復課長) 富坂賢
【主な成果】 (1) 調査概要 古写経は名称、制作年代、形状、寸法、奥書等、出典、料紙などの調査を行う。今回は52件80点の古写経を対象に調査を行った。 (2) 調査の成果(元年度調査の内容) 奈良時代の古写経を3件、平安時代の古写経を34件、鎌倉時代の古写経を6件、南北朝から江戸時代の古写経を9件、調査を行った。2年度も京都国立博物館での調査を継続することを予定しており、当館の収蔵品との関連を明らかにし、研究を進めて、展示・公開の向上に寄与するものである。			
			
特別調査の様子		調査対象資料の内 「大品経 卷第二十八断簡」等	
【備考】 調査件数：古写経 52件 80点 調査日数：10月25日 26日の2日間 調査人員：延べ30人(当館、京都国立博物館、九州国立博物館、奈良文化財研究所、文化庁文化財第一課) 調書作成：80件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	実施時期が奈良国立博物館での正倉院展間近となり、奈良博からの参加はかなわなかったが、文化庁からの参加を得、30年度と同規模で実施することができた。今回対象とした「松本コレクション」(松本文三郎旧蔵)は重要な資料を含んでいながら、体系的な調査ができずにいたもので、当機構、文化庁の専門家が集まり総合的な検討ができた意義は大きい。調査成果は、当機構所蔵文化財横断検索システム(ColBase)に反映させ、今後の研究の推進及び展示・公開に寄与するところが大きい。2年度は同コレクションのうち宋版一切経などを調査する予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、計画通りに作品調査を実施することにより、研究を推進し、展示・公開の向上に寄与するという所期の目標に向けて順調に推移している。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア c.特別調査「工芸」第11回		
【事業概要】 当館における列品のうち、金工・陶磁・漆工・染織・刀剣・甲冑等工芸分野の特別調査である。当機構の国立博物館3館及び文化庁・東京文化財研究所の工芸担当者が集まり、同じ専門分野の研究者が同時に作品調査を行う。複数の専門家の目で同時に同じ作品を調査することにより、精度の高い成果が得られる。また各機関の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有できる。今後の研究の進展や、展示内容の向上に結びつけることを目的とする。なお、2年度は陶磁・染織の調査を行うこととなった。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	工芸室長 小山弓弦葉
【主な成果】 (1) 染織 (10月16日、17日、18日 3日間) 於 当館 当館には、大倉集古館が所蔵する能装束・能道具が217件寄託されている。その多くは江戸時代中期から後期の製作で、一部、安土桃山時代から江戸時代初期のものも含まれている。備前藩池田家がかつて所蔵していた大名家の能装束として資料的価値の高いこれらの資料の悉皆調査を27年度より5か年行うこととした。2回目にあたる元年度については、2日間で子方10領、側次2領、掛絡7領、計19領を調査した。本調査により、備前藩池田家の能装束の形態が明らかとなり、大名家における能の実態について知見を得た。参加者は、大倉集古館学芸員・佐々木智子氏、九州国立博物館文化財課長・原田あゆみ氏、同館アソシエートフェロー・桑原有寿子氏、当館工芸室長・小山弓弦葉、同研究員・三田寛之、同非常勤職員・長谷川聖子、同列品管理課登録室・田邊留美子 以上7名。 (2) 陶磁 (2年1月15日 終日) 於 京都国立博物館 京都国立博物館にて、近代の陶磁器を中心に調査を行なった。調査件数は計14件。 京都国立博物館所蔵の近代陶磁器は、竹内吟秋作「色絵金襴手龍虎図大瓶」、竹内吟秋作「色絵金襴手龍虎文瓶」など、本来は一对でありながらシカゴ・コロンブス世界博覧会 (1893 (明治26年)) 出品後に当館と分けて収蔵されているものがいくつか存在する。今回の調査ではこうした作品を中心に近代陶磁器についての理解を深め、今後の展示活用のあり方について検討・協議を行なった。主な作品として、上記の作品のほか、浅井一豪作「色絵金襴手山水文瓶」、「色絵金彩鳳凰吉祥文鉢」、旭焼「釉下彩葡萄文皿」「釉下鹿島踊文皿」など。参加者は、京都国立博物館・降矢哲夫研究員、当館・今井敦博物館情報課長、三笠景子主任研究員、横山梓研究員の4名。			
【備考】			



画像① 染織調査風景



画像② 陶磁調査風景



画像① 染織調査風景



画像② 陶磁調査風景

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	各機関の陶磁・染織の専門分野の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有し、議論を深めることができた。今後の研究推進及び展示公開に寄与するところが大きい。また分野ごとに分かれて作品調査を実施するため効率性も高く、相当数の作品を調査することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当機構の国立博物館が所蔵する各種工芸作品を様々な観点から調査した。また、平成27年度に寄託を受けた大倉集古館所蔵の能装束調査を通して、大名家における能装束の実態についてさまざまな知見を得た。それらの調査成果を工芸史研究ならびに当館の展示に反映させるべく、中期計画の「有形文化財の保存と活用を促進するため、所蔵品・寄託品の基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査を実施することができた。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア d.特別調査「彫刻」第9回		
【事業概要】 社寺等所蔵の仏像、神像、肖像彫刻等を調査し研究報告論文活動に結び付けあるいは寄託増加特別展等の企画につなげて示質向上を図る。元年度は、館蔵品のなかから、中国彫刻及びキリシタン資料に対して、客員研究員他の外部有識者を招いて共同調査を実施した。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課長 浅見龍介
【主な成果】 (1)調査の概要 ・5月28日～29日「早崎梗吉関係資料、関野貞関係資料の調査」 石松日奈子（客員研究員） ：館蔵中国彫刻の来歴に関わる資料の調査（於茨城県天心記念五浦美術館） ・8月4日～5日「館蔵中国彫刻の研究（銘文の翻刻・釈読）」 石松日奈子（客員研究員）、佐藤智水（龍谷大学名誉教授）他、参加人数8人 ：館蔵中国彫刻における在銘の重要作例である TC-375 菩薩立像（天保3年・552）、TC-376 観音菩薩立像（開皇5年・585）についての、銘文の翻刻・釈読 ・2年1月23日～24日「館蔵キリシタン関係遺品の調査研究」 浅野ひとみ（長崎純心大学人文学部教授）他、参加人数6人 ：館蔵キリシタン関係資料のうち、踏絵やロザリオなどを対象とする調査 (2)調査の成果 ・館蔵品のうち、中国彫刻とキリシタン資料は、重要なコレクションのひとつだが、外部の有識者と共同調査を行うことで、銘文の翻刻や作品の位置づけといった、基礎研究においてさまざまな新見が得られた。 ・成果は、逐次作品解説等において報告を行う。既刊の学術論文は以下のとおり。 石松日奈子「《研究ノート》当館蔵 司従永孫等三尊像」『Museum』682、当館、元年10月			
			
8月5日の中国彫刻の調査		2年1月24日のキリシタン資料の調査	
【備考】 調査回数：3回 調査作品数：15件			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中国彫刻やキリシタン資料は、新たな収蔵が困難な分野だが、当館にはすでに優れたコレクションがあり、基本情報の公開が待たれている。客員研究員や外部の有識者と共同調査によって、銘文の翻刻や、作品の製作年代や製作地を明らかにするといった、基礎研究において、新たな知見が得られた。これにより、おおむね所期の目的は達成できた。今後は共同調査を継続することで、中国彫刻やキリシタン資料について研究を進め、逐次その成果を展示や刊行物等によって紹介したい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究の成果を、展覧事業・教育普及活動等に反映するという中期計画に沿った調査研究や研究成果の報告ができた。引き続き調査を進め、逐次その成果を展覧会や出版物のなかで広く一般に発信していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究			
プロジェクト名称	ア e. 特別調査「絵画」第4回			
【事業概要】 館蔵の絵画列品のうち、儒教に関連する主題、内容を持つ作品について、機構内外の複数の研究者で調査し、それぞれの専門の視点から意見を述べ合うことで、今後の研究、展示に活かす。				
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長 沖松健次郎	
【主な成果】 (1) 調査の概要 ・水野裕史氏（筑波大学）の科研プロジェクトと共同で館蔵の儒教関係絵画についての特別調査を実施した。 ・国立4館から専門研究者16名が参加した。 (2) 調査の成果 ・30年度でたまかに館蔵の儒教関係絵画にどのようなものがあるのかを把握したことを踏まえ、それらを1. 端的に孔子あるいは儒者を主題とした釈奠にかかわる作例、2. 宮中儀礼にかかわる作例、3. 中世の儒教的主题の作例というように3つに分類を行った。 ・絵画作例だけでなく、歴史資料分野の作例も含めて検討を行った。 ・儒教美術をテーマとする研究者と共同開催したことによって、宮中周辺での儀式を描いたと推測できた作例や、神式の道具立てになっていることが分かった作例、またそのことにより時代の上限が割り出せたことなど、列品に対する知見が深まった。				
【備考】 ・調査 10月29日・30日 1回 38件			特別調査（絵画）の様子	



特別調査（絵画）の様子

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・当館所蔵の儒教関係絵画をテーマごとに類別して把握しやすくなったことは大きな成果である。 ・儒教絵画の主題となっている内容について制作年代や環境などを考えるための手掛かりとなる知見を得られたこと。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	所蔵の絵画列品について、機構内4館の絵画担当者や外部識者に来ていただき、特定の分野や主題を集中的に調査することで、普段のなかでは得られない多角度からの意見や知見を得られ、今後の基礎情報の整備や展示活用面でとても有意義であった。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 関東地域の社寺所蔵文化財に関する調査研究		
【事業概要】 当館では、29 年度より関東地域の社寺に伝存する文化財の皆悉調査を実施している。元年度は 30 年度に引き続き東京都目黒区に所在する祐天寺の所蔵文化財の調査を行った。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 河野一隆
【主な成果】 (1) 調査の概要 ・4 月 15・16 日に、当館で、祐天寺所蔵の持国天像、増長天像の 2 軀の X 線 CT 調査を行った。 ・5 月 14 日に祐天寺で絵画（屏風、掛軸等）の調査を行った。 この調査では、調査に広いスペースを要する作品を中心に肉眼観察、調書作成、写真撮影等を行った。 (2) 調査の成果 ・X 線 CT 調査では、外部からの肉眼観察では分からない御像の内部構造を確認し、今後の修理等に活用できるデータを取得できた。 ・絵画調査では、所蔵作品のうち「當麻曼荼羅」は江戸時代の作例で、非常に貴重なものと位置付けられることが分かった。 ・祐天寺研究所を通じて工芸品、書簡等のリストを入手し、今後の皆悉調査にむけて計画を策定中である。 ・30 年度に本調査が終了した東京都港区天真寺については、調査の成果を集約し仮製本ができるような編集を行った。			
		 X 線 CT 調査（当館）	
		 絵画調査風景（祐天寺）	
【備考】 調査日数：4 日間（2 年分を含む） 調査点数：彫刻 2 件（X 線 CT 調査）、絵画 5 件（観察、写真撮影） 延べ参加人数：10 名			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	関東地域の社寺所蔵文化財に関する調査を、30 年度に引き続いて行った。元年度は X 線 CT やファイバースコープなどの分析機器を使った文化財科学調査を行うことができた。また、通常は調査することの難しい大型の絵画作品についても祐天寺様のご協力をいただきつつ、進めることができた。30 年度に終了した天真寺についても成果を纏めることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、文化財の基礎的調査を関東地域の社寺に広げて行っている。祐天寺調査の 2 年目にあたる元年度は、分析機器を使って肉眼観察だけではなく、文化財科学調査にまで幅を広げることができた。本調査研究で最初に取り組んだ天真寺についても成果を纏めることができた。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 油彩画の材料・技法に関する共同調査 ((4)-①-1))		
【事業概要】 本研究は東京藝術大学との共同研究で20年度から開始し、続行している。当館所蔵の油彩画の中から、明治期を中心とした作品を調査対象としている。東京藝術大学大学院油画保存修復研究室は、これまで大学所蔵の明治期油彩画について、調査研究を続け、多数の成果を公表している。本共同調査の目的は、高精細デジタルカメラを使用した顕微鏡写真、普通光写真、赤外線写真、紫外線蛍光写真、透過デジタルX線写真、蛍光X線分析などの科学的調査を通し、当館所蔵の油彩画に使用された材料と技術に関するデータ構築を行い、これまで東京藝術大学が集積したデータと比較を可能にすることである。それによって、今後、我が国の初期油彩画の技法的解明、あるいは歴史的解明が一層進展するものと考ええる。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長 沖松健次郎
【主な成果】 (1) ①A-11305 高橋源吉筆「興津富士」、②A-11307 高橋源吉筆「鎌倉大仏」、③A-11308 高橋源吉筆「森」④A-11306 高橋源吉筆「海景」、⑤A-732 筆者不詳「遠望富岳図」、⑥A-11314 二世五姓田芳柳筆「大河内子爵囲碁」、⑦A-9556 高橋源吉筆「乃木婦人画像」、⑧A-11261 フォンタネージ筆「風景」、⑨A-11294 川上冬崖筆「母像」の状態調査、普通光、側光、紫外線、赤外線写真撮影、蛍光エックス線分析等を行った。 (2) 高橋源吉、フォンタネージ作品ともに以前にも調査を行ったが、今回の調査では光学調査を踏まえて、目視による調査を行い、作品の技法・材料的な観点からの詳細な考察を行った。また、川上冬崖をはじめとする新規作品については、紙を支持体とする珍しい油彩画についての網羅的な研究の一環として、調査を開始した。			
			
		調査風景	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	油彩画の光学調査は東京藝術大学でそのデータの蓄積が行われており、それに続く質と量をもつ当館の油彩画資料の基礎データ蓄積は、今後の油彩画研究において重要な情報をもたらすことになる。この作業を通じて、本共同研究では確実にデータを蓄積しており、成果公開に向けて着実に研究推進が進められている。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	これまで行った調査の蓄積によって、基本的なデータの蓄積を十分に進めることができた。これらの成果を『MUSEUM』などの研究誌への掲載によって広く公表し、初期油彩画の技法的あるいは歴史的解明を通じて、有形文化財の保存と活用を一層推進していく。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	エ 仏教美術等の光学的手法による共同研究		
【事業概要】 非常に高度な技術と優れた美的感覚によって製作された平安時代を中心とした仏教絵画の美しさの構造をより深く理解するため、光の当て方も工夫した高精細撮影と、X線、赤外線などによる各種光学調査を実施する。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長 沖松健次郎
【主な成果】  重要文化財 准胝仏母像の背景から、彩色として使用していることを強く推測できる形で銀が検出された。 その後に行った検討会で、高精細画像を拡大して確認したところ、測定箇所は補絹が入り組み、細かい図様が近接している。それらの影響を確実に避け、より正確を期すために、2年度に追加調査を行うことにした。			
【備考】 調査3回、作品2点			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30年度までに普賢菩薩像と孔雀明王像の背景から検出されていた銀の使用が、偶然ではなく、彩色として使用されていたことを補強する結果を得られた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	5年計画の3年目となる今回は、予定していた館蔵の平安12世紀仏画の最後の調査である。元年度までの成果として、12世紀の仏画の光輝表現についての重要な視点となる背景の彩色における銀の使用を提示できたことは大きい。2年度には、元年度に行った2件の作品について、より正確を期すための追加調査と検討会を行い、以後の調査計画について準備を行う。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	オ 美術工芸品に用いられた画絹及び染織品の組成にかかる共同研究		
【事業概要】 制作年代がわかる基準作となる作例が比較的多い絵画作品に用いられた絹製品である画絹を中心にして、経・緯の糸の太さや本数の比率、断面形状などを計測し、時代や国、地域による傾向の有無、特徴を抽出する。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長 沖松健次郎
【主な成果】 (1) 研究の概要 ・調査3回(5月21日、5月30日、2年2月26日) ・調査作品数21点 (2) 研究の成果 ・前半2回は特別展「国宝 東寺―空海と仏像曼荼羅」に出品された作品調査を実施した。 ・同じ9世紀であるが唐代作とされるものとそれをもとに日本で制作されたものが組みになっている真言七祖像、9世紀の作例である西院曼荼羅、大治2年(1127年)制作の十二天像、11世紀の作例である山水屏風といった平安時代の各時期を代表する重要作例のデータをとれたことが、特筆される成果として挙げられる。 ・上記に加え、当館所蔵の平安仏画のうち未実施だった国宝 千手観音像(A-10560)、重文 准胝観音像(A-11796)、重文 准胝仏母像(A-12449)、また中世の作例として重文 玄奘三蔵像(A-10600)、春日宮曼荼羅図(A-11088)も調査した。			
 春日宮曼荼羅図 (A-11088) 調査風景			
【備考】 調査3回、打ち合わせ1回 作品16点			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特別展出品作品と所蔵品を調査したデータと合わせて検討すると、時代や国による単位間隔あたりの経糸本数、断面形状の傾向の違いがかなり明確化された。今後は各時代の作例を追加し、製作技法の詳細分析を実施する予定であり、基礎研究の基盤構築にむけて、大きな見通しを得ることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	5年計画の1年目に当たり、事業目的に対応したデータを当初計画に先んじて、成果としてあげることができた。残る4年間で現状とっている時代とその前後の時代の作例数を増やすことで、対象となる文化財の調査研究に応じた保存・活用をはかることが見込まれる。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	カ 東洋民族資料に関する調査研究		
【事業概要】 当館が所蔵する約 3500 件の東洋民族列品を対象として調査研究を行い、展示を充実させる。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室長 猪熊兼樹
【主な成果】 (1) 調査概要 韓国の国立古宮博物館、景福宮、昌徳宮、国立中央博物館、鐘閣、六矣廬遺跡（ソウル）・慶基殿（全州）にて朝鮮王朝の宮廷工芸の用途・分類に関する調査、国立民俗博物館、宗廟、東廟、東大門、漢陽都城博物館、北村マウル、南山谷韓屋マウル（ソウル）・全州韓屋村（全州）・船橋荘、烏竹軒（江陵）にて韓国の伝統生活文化に関する調査を行った。 (2) 調査の結果得られた知見 ・当館が所蔵する東洋民族列品のうち、特に朝鮮王朝の宮廷の調度・服飾の分類や展示活用に資する知見を得た。 ・当館が所蔵する東洋民族列品のうち、特に韓国の伝統的な生活習俗のなかで用いる工芸品の分類や展示活用に資する知見を得た。 (3) 調査研究の成果 ・ソウルには朝鮮王朝の宮廷の宮殿・調度・服飾を公開・展示する施設がある。ソウル・全州・江陵には韓国の伝統的な家屋・調度・服飾などを公開・展示する施設がある。これらの施設を訪問・調査し、当館が所蔵する東洋民族列品のうち特に朝鮮王朝の宮廷工芸や韓国の民俗資料に関する有意義な知見を得ることができた。その成果は令和元年度の特集陳列「朝鮮王朝の宮廷文化」の展示に反映した。また今後の東洋館の平常展における展示の参考とする。			
			
全州 慶基堂		江陵 烏竹軒	
【備考】 館外調査：韓国（ソウル、全州、江陵）6月7日～6月11日 韓国（ソウル）2年2月12日～2月16日 特集陳列：当館 平成館企画展示室 2年2月4日～2月26日 ※2年3月15日までの予定が、新型コロナウイルスの感染予防に伴う臨時休館のために会期の途中で終了。			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・30年度のインドネシアの調査に引き続き、元年度は韓国の宮廷・博物館・史跡などの調査を行うことで、東洋民族列品のうち朝鮮半島関係資料に関する基礎的な情報を充実させた。 ・当館が所蔵する東洋民族列品のうち、特に朝鮮王朝の宮廷工芸の分類や展示活用に資する知見を得た。 ・当館が所蔵する東洋民族列品のうち、特に韓国の伝統的な生活習俗のなかで用いる工芸品の分類や展示活用に資する知見を得た。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・当館が所蔵する東洋民族列品については、中国資料・韓国資料・東南アジア資料・南洋資料・台湾先住民族資料などから構成されている。これらの資料は、東洋館の平常展示および特集陳列などにおいて展示活用が期待されるため、その分類整理を進めている。 ・従来、ほとんど展示活用されていなかった東洋民族列品については、東洋館リニューアル以降、東洋館の平常展示「アジアの民族文化」や特集陳列などで展示活用されており、展示内容が着実に充実してきている。 ・2年度以降は、韓国の宮廷工芸・伝統文化に関する調査を継続するとともに、平常展示「アジアの民族文化」における台湾先住民族資料の資料の調査にも取り組みたい。 ・28年度以降、当館の東洋民族資料にちなんだアジア各地の調査を継続しており、着実に資料の分類整理と展示活用が進んでいるので、引き続き、この調査を行っていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特集「天皇と宮中儀礼」に関する調査研究		
【事業概要】 本特集は、平成から令和への御譲位、御即位により注目の集まる天皇と宮中儀礼を、「即位礼と大嘗祭」「悠紀主基屏風」「御所を飾る絵画」「年中行事」「行幸と御遊」の5つのテーマによって紹介するものである。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部特別展室主任研究員 土屋貴裕
【主な成果】 (1) 調査の概要 ・平成館企画展示室にて特集を開催し、会期は前期、後期に分け、本テーマに沿う列品 35 件を展示し、展示作品の見どころを紹介したリーフレット（カラー、全 8 ページ）を作成できた。また、通常の解説では分かりにくいさまざまな宮中儀礼を解説パネルとして作成し、理解の促進をはかった。 ・悠紀主基屏風は江戸時代に実際に使われ、後桜町天皇の大嘗祭の折に調進された明和元年度のものは現存最古の作例として、きわめて貴重な作品である。当館列品としての公開も初めてで文化財の活用面でも大きな意義を持つ。			
			
平成館企画展示室での展示風景		「天皇と宮中儀礼」リーフレット	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	元年は上皇陛下のご退位に続き、天皇陛下の即位という歴史的な年となり、こうした機会に普段は接することのない天皇と宮中儀礼をテーマとしたことは非常に意義のあるものである。本特集出品作の中には、即位礼や大嘗祭で用いられる高御座、御帳台、また実際の儀式が行われた悠紀殿、主基殿を描いた作品もあり、展示作品から確認する機会が提供できた。会期後半の高御座の一般観覧とあわせ、作品への理解が深められた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本特集にあたり、通常では陳列されない作品の調査を行い、その成果を踏まえて精選したことで、展示作品のレベルの向上、より分かりやすい展示という方針に沿うものである。有形文化財の保存活用に新たな光を当てるものとして、新たな形を提示することができた。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特集「やちむん―沖縄のやきもの」に関する調査研究		
【事業概要】 当館所蔵の琉球資料のうち、壺屋焼と推定される一群に関して、外部研究者を招聘して調査研究を行う。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部特別展室主任研究員 三笠景子
【主な成果】 (1) 調査の概要 まず、壺屋焼研究の専門家である那覇市歴史博物館の倉成多郎氏を招聘し（7月16日）で専門的見地から指導を受けた。 (2) 調査の成果 ・明治17年(1884)及び18年(1885)に沖縄県から購入したとされる当館所蔵の陶磁器（約30件）に関する位置付けについて、具体的な教示を得た。その成果は、本館14室で開催していた特集「やちむん―沖縄のやきもの」（6月25日～9月16日）に反映した。 ・2年2月14日には琉球陶器の造形や装飾の展開において影響関係があると推測される薩摩焼の研究者である鹿児島県立歴史資料センター黎明館の深港恭子氏を招聘し、所蔵品の調査、意見交換を行った。 ・2年2月14日には国内で琉球陶器コレクションを収蔵する佐賀県立九州陶磁文化館の山本文子氏、石洞美術館の林克彦氏を招聘し、当館所蔵品との比較検討によって、意見交換を行った。			
			
【備考】 調査点数 琉球陶器 25 件、薩摩焼 15 件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館所蔵品について最新研究に基づいた意見や具体的な教示を得られたことはきわめて大きな成果であった。引き続き、外部研究者の意見をうかがいつつ、有形文化財の保存と活用について調査研究と展示を両立させていきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査研究が不十分で活用が図られていない列品について、外部有識者、研究者の指導を仰ぎ、保存と活用をはかっていくことは非常に有意義である。対象資料のように戦災等の原因で歴史的背景を失ったものについてこのような方法はたいへん効果的である。今後も継続して未活用だった列品の展示公開につなげたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特集「伝説の面打たち」に関する調査研究		
【事業概要】 当館が所蔵する能面のうち、能面の名手とされる作者の作であるという伝承もしくは銘のある作品について調査研究し、特集展示、図録でその成果を公表する。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課長 浅見龍介
【主な成果】 (1) 調査の概要 ・当館所蔵の「伝説の面打」の名が記された作品のうち、調査と撮影、X線CT撮影を行った。 調査回数は7回、調査作品数は32件である。 ・調査研究の成果を特集展示（2年1月24日～2月24日）と図録にまとめ、刊行した。 (2) 調査の成果 ・面打(作者)の名手とされながらその実態がわからない「伝説の面打(作者)」の真作はほとんどないにもかかわらず、当館が所蔵する能面には、「伝説の面打」の名が記された作品が多くある。これは面打本人の署名ではなく後世の面打による鑑定銘だと考えられている。その鑑定の根拠を検討することが、伝説の面打の作風を知る手掛かりになると想定し、いくつかの手掛かりを見出すことができた。 ・X線CT撮影では、詳細な構造が確認できた。これにより、既存の能面をわざわざ別の能面に作り替えた「改作」の痕跡などの貴重な情報を得ることができた。 改作については従来論じらることの少なかったことであり、能面の研究に新たな示唆を与えることができた。 ・調査結果をもとにまとめた図録も作成し、成果を特集展示で公表した。月例講演会「能面の造形と魅力」（2年1月11日）も行った。			
【備考】			



図録「伝説の面打たち」



図録「伝説の面打たち」

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	能面の作者である面打に関する調査研究は、芸能史の専門家によってなされているものの、美術史的研究は極めて少ない。本研究は美術史研究の基礎ともなる作家研究として重要であるため、鑑定銘を持つ作品から伝承作者の実像に迫ろうとする点で独創的である。本研究をもとに今後調査を継続し、作家研究としても、また能面の受容に関する研究としても発展することが予想され、広い分野の研究への寄与が見込まれる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館は良質な仮面を多数所蔵しているが、制作年代や作者に関する情報の精査は不十分であった。中期計画にある「収蔵品・寄託品をはじめとする文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究」に沿って調査をすすめ、所蔵品の情報の正確な発信という観点でも前進することができた。本研究の成果は、『東京国立博物館図版目録 仮面篇』の増補改訂版刊行の作業の一環としても位置付けられる。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1411Aコ

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特集「法隆寺と聖徳太子―法隆寺研究の近代」に関する調査研究		
【事業概要】 法隆寺の創建に密接にかかわった聖徳太子と法隆寺の宝物を、当館に所蔵される明治期の模写・模造を取り上げながら紹介する。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長 沖松健次郎
【主な成果】 法隆寺に伝わる宝物の模写・模造に焦点を当て、普段あまり展示されない収蔵品の積極的な活用をした。同時期に本館特別5及び4室で開催される特別展「法隆寺金堂壁画と百済観音」をあわせて鑑賞していただくことにより、日本における文化財の保存と活用の歴史に対する理解をよりいっそう深めることが期待される。			
			
展示室風景			
【備考】 2年3月24日～5月10日 本館14室 出品件数13件 (但し、コロナウィルス感染症対策での閉館中のため、3月末時点ではパネル、題箋等は未掲示。)			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特別展と同時期に開催することにより、明治期における文化財の保存と活用に関する活動の歴史をより立体的に来館者に感じてもらえるであろう展示に繋がる調査研究とすることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	通常の展示体系の中では、単独では展示しづらい文化財の活用と、収蔵品と特別展で出品している文化財を相互補完的に展示することで、来館者の展示品に対するより深い理解への手助けとなる調査研究を実施することができた。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特集「平家納経模本の世界―益田本と大倉本―」に関する調査研究		
【事業概要】 元年度に行った特集「平家納経模本の世界―益田本と大倉本―」（本館 15 室、10 月 22 日 ～ 12 月 8 日）を充実した展示にするための調査研究。「平家納経」は、広島・厳島神社が所蔵する国宝で、平安時代・末期に平清盛が奉納した全 33 巻の装飾経である。大正～昭和時代に田中親美が制作した「平家納経」の模本主に二組（益田家・大倉家旧蔵）を比較しながら、その見方・美しさをできるだけわかりやすく適切に展示・解説することを目標として、展示作品や関連資料の調査によって、展示手法、展示構成の検討を行う。また、特集にあわせて図録を発行するため、その調査研究も同時に進める。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	東京国立博物館百五十年史編纂室長 恵美千鶴子
【主な成果】 (1)作品、関連資料調査 5 月 13 日：厳島神社にて「平家納経」（原本）を調査した。 7 月 29 日：厳島神社が所蔵する「平家納経（模本）」を調査した。 8 月 22 日：京都・仁和寺が所蔵する関連資料を調査した。 9 月 18 日：個人蔵の関連資料を調査した。 10 月 16 日：個人蔵の関連資料を調査した。 (2)関連資料の収集（8 月 13 日ほか） 出品作品や関連作品の画像や関連する資料のデータを収集した。 (3)成果とその公開 関連する研究成果を、「明治宮殿の室内装飾に関する一考察」として論文で発表し、学会にて口頭発表した（6 月 30 日）。また、研究成果を掲載する同タイトルの図録を制作した（10 月 15 日）。 			
「平家納経模本の世界―益田本と大倉本―」図録			
【備考】 (1) 作品、関連資料調査 調査件数：15 件、画像撮影点数：150 点 (2) 関連資料の収集 収集資料の件数：42 件 (3) 成果とその公開 公開件数：論文 1 件、口頭発表 1 件、図録 1 件			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	「平家納経」は経巻でありながら見返しなどに描かれた絵画や金銀箔を使った装飾があるため、その見方が難しいと考えられている。その作品を、模本と使ってわかりやすく的確に紹介することは重要である。そのための準備となる調査研究は、着実に進めることができた。出品作品のみならず、関連する作品や資料まで幅広く調査したことは、多角的な研究を進めることができたといえる。また、特集展示を以前からの研究の蓄積を踏まえ、その成果を論文で発表できた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展示を行う以前から準備段階の調査研究を大いに進展することができた。着実に調査を行うことで、関連資料の発掘もでき、研究をより深化させられ、研究成果を論文・口頭発表することもできた。今後もこの同じ方向性で研究を深化させ、中期計画が定める有形文化財の保存と活用、教育活動への寄与を引き続き推進していく。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特集「近世日本と外国文化」に関する調査研究		
【事業概要】 当館では、館蔵品のキリシタン遺物を紹介する特集展示をこれまでに定期的に開催している。30年に「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界文化遺産に登録されて以降、キリシタン遺物に対する社会一般の関心が再び高まっており、この機をとらえて今後の展示活用に資するため、当館所蔵の関連作品を含めた調査研究と、展示を実施した。 元年度は、所蔵品の状態確認、新規撮影、調査を行い、その成果報告として展示（11月19日～12月25日、本館特別2室）、リーフレット作成配布、講演会を実施した。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室主任研究員 鷲頭桂
【主な成果】 (1) 調査の概要 ・特集「近世日本と外国文化」（11月19日～12月25日）を開催した。 ・月例講演会「江戸時代の美術に見る東西交流」を11月30日に開催し、参加者数193人であった。 (2) 調査の成果 ・近年、国内外研究者から注目されるメキシコ製の羽根モザイク画を収めた南蛮漆器「桔梗蝶楓鹿蒔絵螺鈿聖龕」（H-4473）を紹介した。重要文化財「エラスムス像」（栃木・龍光院）や重要文化財「ブラウ世界図」（A-9360）など展示機会の少ない名品も公開し、好評を得た。 ・リーフレットを作成し、5,000部を刊行するとともに、ウェブサイトで無料ダウンロードPDFを提供した。 ・従来展示が困難であった「西洋鍼路図」（A-9350）などの保管、展示方法の見直しを計画、実施した。			
			
展示風景		基礎情報を収集するための新規撮影	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館が所蔵するキリシタン遺物及び近世の東西交流に関する資料の調査及び展示が実施できた。またその成果を、配布物や講演会の形で、国内外に広く一般に公開することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	所蔵品について外部識者の知見を得ることができ、調査研究の内容を展覧事業、教育普及活動に反映することができた。元年度の調査を通して新たに確認できた作品情報について、引き続き調査研究を進め、逐次その成果を展覧会や出版物等を通して、広く一般に発信していく計画である。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特集「朝鮮王朝の宮廷文化」に関する調査研究		
【事業概要】 当館が所蔵する列品のうち、朝鮮王朝の宮廷関係資料を対象とする調査研究を行い、展示を充実させる。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室長 猪熊兼樹
【主な成果】 (1) 調査概要 ・当館が所蔵する東洋工芸及び東洋民族の列品のうち、朝鮮王朝の宮廷あるいは両班階層に関係があると推察される資料の調査を行った。 (2) 調査の結果得られた知見 ・当館が所蔵する列品のうち、朝鮮王朝の宮廷あるいは両班階層が用いたと推察される調度・服飾・建築部材・絵画及び文献資料の分類・用途や展示活用に資する知見を得た。 (3) 調査研究の成果 ・当館には朝鮮王朝の宮廷あるいは両班階層が用いたと推察される資料が収蔵されている。これらを調査し、当館が所蔵する東洋工芸及び東洋民族の列品に関する有意義な知見を得ることができた。その成果は元年度の特集陳列「朝鮮王朝の宮廷文化」の展示に反映するつもりである。また、今後の東洋工芸及び東洋民族資料の展示の参考とする。			
			
宮廷儀式図屏風（当館蔵）		特集陳列の展示室風景	
【備考】 特集陳列：東京国立博物館 平成館企画展示室 2年2月4日～2月26日 ※2年3月15日までの予定が、新型コロナウイルスの感染予防に伴う臨時休館のために会期の途中で終了。			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	- 当館が所蔵する東洋工芸及び東洋民族の列品のうち、朝鮮王朝の宮廷あるいは両班階層に関係があると推察される資料に関する基礎的な情報を充実させた。 - 当館が所蔵する東洋工芸及び東洋民族の列品のうち、朝鮮王朝の宮廷あるいは両班階層が用いたと推察される調度・服飾・建築部材・絵画及び文献資料の分類・用途や展示活用に資する知見を得た。 - 特集陳列「朝鮮王朝の宮廷文化」の展示に伴い、図録の刊行を行い、一般市民に対する普及に努めた。 2年度以降も当館所蔵品をはじめとする東洋工芸及び東洋民族の資料の調査に取り組みたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	- 当館が所蔵する朝鮮王朝の宮廷関係資料は、東洋陶磁・東洋漆工・東洋染織・東洋金工・東洋考古・東洋民族などの分野から構成されているが、それぞれの関係性が不透明な状況にある。従って、平常展示や特集展示などの機会を通じて、それら朝鮮王朝の宮廷関係資料の分類整理を進めて、有機的な関連付けを行う必要がある。 - 当館が所蔵する朝鮮王朝の宮廷関係資料は、従来、有機的に関連付けて展示活用される機会が少なかった。この度、特集陳列「朝鮮王朝の宮廷文化」の展示を行ったのを契機とし、当館が所蔵する朝鮮王朝の宮廷関係資料に関する調査・展示を充実させていく。 2年度以降も引き続き、これまでの調査研究を通じて得た知見に基づき、更なる調査研究を重ねて東洋工芸及び東洋民族の列品を活用した平常展示や特集を工夫していく。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特集「東京国立博物館コレクションの保存と修理」に関する調査研究		
【事業概要】 当館が手掛ける文化財保存と修理の役割、成果をわかりやすく広く一般に紹介するため、近年本格修理（解体を含む根本的な修理）を終えた作品を、修理過程とそこで得られた情報とともに展示公開し、理解を促進する。			
【担当部課】	学芸研究部保存修復課	【プロジェクト責任者】	保存修復課長（書跡・歴史室長） 富坂賢
【主な成果】 (1) 調査概要 元年度は、近年本格修理を行なうことにより取り扱いや保存上の安全性が向上した作品、及び鑑賞性が改善されて展示活用が可能となった作品を対象として、一般の鑑賞者が博物館における保存修復への理解を深めることにつながるような作品の選定、処置内容の解説方法について調査と検討を行った。 (2) 調査の結果得られた知見 対象としたのは、本格修理作品のうち、9月30日までに修理が完了した作品で、修理後十分な期間を置いて状態が安定したことが確認できた作品とした。 このうち、「愛染明王像」（列品番号：A-10574）では、解体で旧裏打ち紙を除去したところ、裏面に施されていた補絹に人物像などの図像が確認され、図像の繋がりから、別の絵の一部が補絹に用いられていたことが明らかになった。また、「単鳳環頭大刀」（列品番号：J-8035）では、X線撮影による画像分析をもとに、鍔の層を除去する処置を実施し、層の下に隠れていた銀象嵌を表出して、文様を明らかにすることができた。このように作品に使用された材料の分析や、旧修理の検証、科学調査をもとにした修理処置の選択は、今後引き続きより良い修理を行ううえで大変重要な知見の蓄積となった。 (3) 調査研究の成果 調査の結果をふまえて、特集展示「東京国立博物館コレクションの保存と修理」の準備を実施した。「十二間星兜鉢」（列品番号：F-16027）や「五彩人物文長方合子」（列品番号：TG-2075）など9件は、著しい錆化や旧修理の劣化により安全に展示することが困難であったり、鑑賞にそぐわない作品であった。なかでも「十二間星兜鉢」（列品番号：F-16027）は、修理によってアクリル樹脂を含侵し、保存箱を兼ねた展示具を新調したことにより安定した展示が可能になった一例である。 展示では、修理を終えた作品とともに、修理過程や修理に用いた材料について画像を多用して解説したパネルとともに展示することを計画した。その際、外国人鑑賞者にも伝わりやすい訳となるよう、平易な言葉でわかりやすい文章になるよう工夫し、多くの関心を得ることに留意した。なお、展示期間中、一般向けにバックヤードツアーを予定していたが、新型コロナウイルスの影響により元年度は中止となった。また関連のギャラリートークについても、4月中に3回開催の予定であったが、中止となった。			
【備考】 展示：特集「東京国立博物館コレクションの保存と修理」平成館企画展示室 2年3月24日～4月26日、展示作品件数9件 教育普及事業：①バックヤードツアー 2年3月27日 →いずれも新型コロナウイルスの影響により中止			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	保存修復課ではより専門的な内容を含む詳細の報告を別途『東京国立博物館文化財修理報告』を刊行しており、一般向けの平易な展示として特集「東京国立博物館コレクションの保存と修理」を毎年、年度末に行っている（元年度で20回目）。 修理を終え展示が可能になる作品はその都度変わるため、それにあわせた展示の工夫が例年の課題である。元年度は本格修理だけでなく対症修理とその保存方法、CT装置の役割などについても紹介予定であった。修理だけでなく、その前後も紹介することで博物館の文化財保存のありかたについて、来館者の方々への理解促進につなげることができる。2年度に向け、さらに博物館内での保存修復事業の重要性を一般の人々へ分かりやすく伝えるための視点も意識し、修理技術者とともに修理時の資料情報や材料の収集を継続する。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	装こう修理のフェローを1名獲得し、外部技術者と協力して修理対応を継続した。また立体作品を手掛ける技術者を常勤職員として採用できたことで修理に関する館内の様々な要望に応えることができた。こうした人材をもって、本特集で紹介できる案件の分野が広がり、様々な文化財保存の専門技術者が事業に関わることで、修理の進捗のみならず情報も年々深化している。保存修復課の活動と成果が本特集によって臨場感を持って来館者に伝わり、文化財保存に関する興味関心と理解の向上へつながるよう、毎年新しい視点で鑑賞できるテーマを設け事業を展開する。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 近畿地区社寺文化財の調査研究 (4)-①-1)		
【事業概要】 京都国立博物館では長年にわたり、京都を中心とした近畿地区の社寺に伝存する文化財の悉皆調査行ってきた。28年度からは、4年計画で科学研究費補助金による助成を受け「河内地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究」というテーマのもと、大阪・河内地域に存在する社寺の文化財を中心に調査を併せて行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	連携協力室長 浅湫毅
【主な成果】 (1)河内地域の社寺調査 ・元年度は4年計画の最終年度にあたり、河内長野市に所在する観心寺において第4、第5回目の悉皆調査、八尾市に所在する教興寺、河南町に所在する高貴寺において彫刻作品の調査を行った。 観心寺悉皆調査 6月17日～21日 教興寺彫刻調査 11月12日 高貴寺彫刻調査 2年1月23日～24日 観心寺悉皆調査 2年2月19日～21日 (2)過去の社寺調査成果の公表等 ・28～30年度に行った金剛寺における社寺調査の成果を、科学研究費補助金〔基盤研究(A)〕報告書『河内地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究<金剛寺編>』として公表した。 ・30～元年度に行った観心寺における社寺調査の成果を、科学研究費補助金〔基盤研究(A)〕報告書『河内地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究<観心寺編>』として公表した。 ・過去に行った京都市内の社寺調査のうち、建仁寺塔頭及び永観堂禅林寺に関して、報告書刊行に向け、これまでに作成した調査の分類・整理を継続して行った。			
【備考】 科学研究費補助金基盤研究(A)「河内地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究」の4年計画の最終年度 (1) ・調査回数4回 ・本調査の成果を報告書として公表した。 (2) ・『科学研究費補助金報告書 金剛寺編』2年1月31日刊行 ・『科学研究費補助金報告書 観心寺編』2年3月31日刊行 なお、教興寺の調査成果は共同調査者である大阪大学・八尾市より2年度に報告書を刊行予定である。			



観心寺調査風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	元年度は、河内長野市の観心寺において蔵に収められている文化財及び諸堂に安置されている仏像の調査・撮影を行った。今回の調査で、観心寺が所蔵する文化財については、一部を除いておおその文化財に関し調査を行うことができた。また、観心寺、金剛寺においては報告書刊行に向けての調査作成及び写真撮影も一部を除いて終えることができた。また、これらの情報をデジタルデータとして入力し、資料の整理を行った。以上の成果は2冊の報告書として刊行した。以上のことから、年度計画の所期の目標を達成したものと判断される。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究の一環として、河内地域の仏教文化と歴史に関して科学研究費助成事業に申請し、それに基づく調査研究を実施した。本事業は4年計画であり、各年度とも1ヶ所以上の寺院を当該地域から選択し（28～30年度は金剛寺、30～元年度は観心寺）、全研究員参加による悉皆調査を行った。元年度は当初の予定に加え、教興寺、高貴寺の2カ寺において彫刻を中心に調査を行うことができた。また、これらの調査成果を2冊の報告書というかたちでまとめることができた。 過去に行った調査寺院の補足調査に関しては、河内地域の調査に重点を置いていたため十分には行うことができなかったものの、大徳寺の塔頭・龍光院の調査に向け、寺院との調整を行った。また、調査の整理等に関しては継続して行い、データベースへの入力も順調に進んでいる。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 訓点資料としての典籍に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 漢文を訓読するために施された、「訓点」と呼ばれる読みを表すための記号は、時代や地域によりかなりの多様性があり、その大半は経典・漢籍・和書などの典籍にみられる。これらに付された訓点により、とくに古代・中世の日本人がどのように本文を読み下していたか、という日本語の有り様が判明する。当館では、「守屋コレクション」に代表される、国内外の良質な古典籍を数多く収蔵することから、それらを中心とする調査研究を行うことにより、得ることのできた成果を展示や講演、及び刊行など、博物館における関連事業へと還元する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室長（兼列品管理室長）羽田聡
【主な成果】 (1) 典籍の研究には、その特質に応じた専門の学識者が不可欠であるため、当館美術室研究員の上杉智英（仏教学）のほか、調査スタッフに大阪大谷大学教授の宇都宮啓吾氏（日本語学）を客員研究員として迎え、計6回の調査を実施した。 (2) 調査作品は、重要文化財「大唐西域記巻第一」や重要文化財「内典随函音疏巻第三百七」（以上、館蔵品）、重要文化財「扶桑略記巻第二残巻（真福寺本）」（文化庁長期貸与品）など20件に及び、今後の研究にも資するよう、全巻撮影を行った。 (3) 上記調査における特筆すべき事項として、当館がインド哲学・仏教学者の松本文三郎（1869～1944）より購入した仏教典籍群である「松本コレクション」は、これまで館外の学識者を交えた調査が行われていなかったが、その本格的な調査に着手したことがあげられ、成果の一部は平成知新館名品ギャラリー（平常展）の展示として公開した。 (4) 成果の公開としての刊行は、28年度に当館が購入した国宝「漢書楊雄伝第五十七」の解題付き原寸大カラー書籍が出版されたことで、広く一般が利用できるようになり、「松本コレクション」中の悉曇（梵字）関係の作品は、当館紀要に資料紹介を掲載することが決定している。			
			
「松本コレクションの名品」展示風景		刊行した『京都国立博物館所蔵 国宝 漢書楊雄伝第五十七』	
【備考】 ・調査回数及び件数 6回・20件 ・撮影コマ数 約180カット ・成果の公開（展示） 平成知新館名品ギャラリー「松本コレクションの名品」（2年2月11日～2月26日） ・成果の公開（配布物） 博物館ディクショナリー「仏教学者のコレクション 松本文三郎の旧蔵品」（2年2月4日） 連携協力室 上杉智英 ・成果の公開（刊行図書） 京都国立博物館編『京都国立博物館所蔵 国宝 漢書楊雄伝第五十七』（勉誠出版、11月） ・成果の公開（刊行論文） 宇都宮啓吾「京都国立博物館松本文三郎文庫の明覚・悉曇資料について」（『学叢』42、2年5月刊行予定）			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	【備考】 欄に記載した調査回数は、2月から3月にかけての春期大学休暇中の調査を新型コロナウイルスの影響により中止したため、30年度と比較すると減じているが、ほかの項目は同等かそれ以上の成果をあげているので、所期の目標は達成していると判断した。なお、成果の公開としての展示「松本コレクションの名品」は本来、会期を3月15日まで予定していたが、同ウィルスの影響により2月26日以降は全館休館となったことを付記しておく。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。年度計画における実績値は、世界的な事情により減じた項目もあるが、過去数年にわたり、ほぼ同等、かつ継続的に実施できているため、所期の目標は達成していると判断した。新型コロナウイルスの推移は、なお予断を許さない状況にあり、各方面への影響が懸念されるが、2年度以降も無理のない範囲で本プロジェクトを推進していく。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 旧家伝来の工芸品に関する調査研究((4)-①-1))		
【事業概要】 関西圏を中心に旧家伝来工芸品の調査を実施することにより、地域の暮らしの在り様を物質的に探るとともに、調査を作品の管理・保存のみならず、寄贈・寄託・貸与に結び付け、博物館の収蔵品と展示の充実を図る。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸室長 山川 暁
【主な成果】			
(1) 調査			
・ 関西圏を中心に、江戸時代から続く旧家の工芸品の調査を行い、調書を作成すると同時に記録写真の撮影を行った。			
・ 5月・11月 京都市内旧家にて染織・人形調査、写真撮影を行い、そのうちの5点を受贈した。			
・ 5月・7月に野崎家塩業資料館にて同館学芸員とともに漆工調査、写真撮影を行い、所蔵状況を確認するとともに、保存や展示活用についての助言を行った。			
・ 5月・2月・3月 神戸市内個人宅にて陶磁・ガラス・石造物調査、写真撮影を行い、所蔵状況を確認し、今後の作品寄託等について検討を行った。			
・ 10月・11月 佐藤記念秋水美術館にて陶磁調査、写真撮影を行い、所蔵状況を確認するとともに、保存や展示活用についての助言を行った。			
・ 1月 神戸市内個人宅にて陶磁・ガラス・石造物調査、写真撮影を行い、所蔵状況を確認し、今後の作品寄贈等について検討を行った。			
(2) 成果内容			
・ 旧家伝来品の調査を行い、今後の保存管理に助言を行った。			
・ 個人コレクションの調査の結果、作品の寄贈を受けた。			
・ 寄贈された作品を、特集展示「子づくし」にて展示した。			
			
人形調査風景			
【備考】			
(1) 染織・人形調査 回数2回(調書6件、画像撮影29カット)。漆工調査 回数4回(調書38件、画像撮影415カット)。陶磁調査 回数6回(調査件数283件、調書63件、画像撮影1,492カット)。			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	関西圏において戦災の被害が少なかった地域の旧家には、江戸時代から受け継がれる高級工芸品が現在も伝えられている。しかしながら、近年の生活様式の急激な変化により、多くの邸宅や蔵が建て替えられる時期を迎えており、博物館には数多くの調査依頼が寄せられている。本プロジェクトは、それらの調査の要請に応え、旧家の暮らしの物質的な基礎データを蓄積し、研究を進めることである。これまでも日常業務として継続してきた業務ではあるが、プロジェクト化することにより、旧家のかつての生業の聞き取り調査も含め、歴史民俗的な観点からも、美術品をめぐる文化の全体像を把握しようとする問題意識が生まれている。また、本プロジェクトによって、寄贈・寄託という形で収蔵品の充実が進められており、時宜にかなった本プロジェクトには今後も継続する意義があると考えられる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本プロジェクトは、中期計画における、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究の一角を担っている。中期計画の4年目として、着実に調査実績を重ね、基礎データの蓄積を行っている。また、調査の結果当館に作品が収蔵されることで、収蔵品の充実がはかれるとともに、展覧会において陳列することが可能になり、研究成果を広く一般にも発信している。2年度以降も、本プロジェクトを継続して進め、さらなる成果の結実に結び付けていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧会事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	エ 京都周辺の考古遺物に関する調査研究 ((4) -①- 1)		
【事業概要】 京都国立博物館の収蔵品のうち考古遺物を学術的に調査研究しその成果を論文や展示という形で発表還元することを目標とする。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 宮川禎一
【主な成果】 考古室が管理保管する当館蔵・寄託の考古遺物のうち数件を保存科学室でX線CTや蛍光X線分析装置にかけ古代遺物の素材やかつての修理の様子を明らかにした。その調査で新たな知見が得られた。 その1例を挙げると、館蔵の後漢代の呉王伍子胥画像鏡（挿図）を調査のために蛍光X線分析装置にかけたところ通常の青銅器ではありえない鉄やバリウムの反応が見られたケースである。続けてX線CT装置で透過観察した結果、完形とみられていたこの銅鏡が実は残存率98%程度の破損鏡を高度な手法で修復していたことが判明した。以上のことから青銅器の収集に当たっては事前の科学的分析検討が不可欠であることが明らかとなった。 また借用遺物についても借用先の博物館・教育委員会との共同研究として4点の遺物を科学分析（X線CT装置）してその知見を高めた。 元年度から開始した考古遺物の相互貸借事業の前提として当館蔵の西宮山古墳の遺物を改めて整理し、貸出し可能な作品の選定とともに、貸出しには不向きな遺物を抽出してその一部を修理にかけて将来の貸出しに備えることができる準備を行っている。さらにこの相互貸借事情では兵庫県たつの市や鳥取県立博物館に当館蔵の考古遺物を実際に貸出して地元出土品に関する市民への開発活動に寄与している。 相互貸借事業の内訳は、当館からたつの市へ西宮山古墳出土品48点を貸出した。たつの市からは埴輪等5点を借用し展示した。当館から兵庫県立考古博物館へ須恵器1点を貸出した。兵庫県立考古博物館からは土師器など7点を借用し展示した。当館から鳥取県立博物館へ鳥取県内出土の銅鐸など13点を貸出した。鳥取県立博物館からは土師器など7点を借用し展示した。			
【備考】  呉王伍子胥画像鏡のX線写真			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館蔵考古遺物の調査に保存科学室の協力によって科学的測定技術の応用が新たに進んできた。 特に青銅遺物や土器類の蛍光X線分析装置による材質判定やX線CTによる内部構造調査が進展してきた。 従来の表面観察にとどまらない考古遺物の修理方針や展示に際する注意点が徐々に蓄積する基礎ができた。 相互貸借事業の前提としての当館蔵考古資料の保存状況を調査して修理方針を立てその一部を実際に修理に出した。 館蔵品の里帰り展示において地元では好評であり、新聞紙上（神戸新聞・朝日新聞）でも取り上げられて遺物遺跡への理解がより高まった。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	考古遺物の展示公開が館内の平常展示（夏・冬）2回行った。相互貸借事業において81件の作品を兵庫県と鳥取県の3か所で展示公開した。また随時当館蔵考古遺物の展覧会への貸し出しを行い、各地域での考古遺物への理解促進を着実にやっている。さらに相互貸借事業は2年度以降も着実に実施される予定である。

業務実績書

中期計画の項目		(4)有形文化財の収集・保管・展覧会事業・教育普及活動に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究	
プロジェクト名称		特集展示「雛まつりと人形」に関する調査研究	
【事業概要】 京都において製作・享受された各種の人形について、収蔵品の調書作成および画像撮影などの基礎調査を継続的に実施するとともに、各所蔵先における調査も実施し、寄託や寄贈という形で収蔵品の充実をはかる。その成果を加味しながら、恒例展示「雛まつりと人形」に反映させ、伝統的な節供文化の継承に寄与する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長（兼工芸室長） 山川 暁
【主な成果】 (1)個人所蔵先の訪問調査を実施し、寄贈の可否について検討した。また、京都旧家に伝来する節供人形コレクションの基礎調査を継続して実施した。 (2)上記の成果を加味し、恒例の特集展示「雛まつりと人形」を開催し、雛飾りの歴史や各種京人形についてまとめた無料配布リーフレットを作成した。			
			
節供人形コレクション基礎調査風景		個人所蔵先訪問調査風景	
【備考】 (2) 特集展示「雛まつりと人形」2年2月15日～3月22日、展示作品47件 特集展示リーフレット「京人形を楽しむための鑑賞ガイド」5000部			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	国際化が進む中で日本固有の生活文化が希薄になっていく中、雛まつりとして知られる節供行事の継承もまた、困難な局面を迎えている。日本の人形文化の多様性は国際的にも例がなく、そこには日本人固有の心性が託されているはずであり、博物館における人形の展示は、その継承への気づきともなる可能性を有している。恒例の展示を待ち望む来館者も多く、少しずつ作品を替えながら特集展示を継続的に実施するために、元年度も収蔵品及び新たな作品の調査を実施した。また、京都周辺には江戸時代の雛飾りを所蔵する旧家も少なくなく、世代交代を迎える中で処分を検討する事例が跡を絶たない。当館に寄せられる相談に応じ、聞き取り調査や実地調査を行うことにより、当館への寄贈やより適切な収蔵先の紹介へとつなげていく予定である。2年度以降も、継続して同様の調査研究を行っていききたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究の一環として、特集展示「雛まつりと人形」に関する調査研究を実施。高級工芸品の製作地でもあり消費地でもあった京都の特色を、調査研究を通じて得られた知見を活かしつつ、人形を通して紹介する展示につなげていく。国内だけでなく諸外国からの観光客が増加する中、日本の豊かな生活文化の一端を示す雛まつりの展示をするための調査研究をこれからも継続的に実施していく。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 復元模写制作に伴う仏教絵画の調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 仏教絵画の制作当初の姿を復元的に描く模写制作に際し、現状では変色や剥落によって肉眼の観察のみでは判別できなくなっている料絹・料紙や顔料などの素材について、事前に高精細デジタルカメラや蛍光エックス線分析器等を用いた光学的調査を入念に実施し、そこで得られたデータを模写制作に活用・公開する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長 谷口耕生
【主な成果】 (1) 東京藝術大学の大学院生が行う信貴山縁起絵巻模写制作のため、高精細デジタル画像の撮影及び同絵巻山崎長者巻の原本熟覧調査を 2 度実施した (5 月 30 日・9 月 12 日)。同模写制作に当たっては、東京文化財研究所と当館の共同研究報告書『朝護孫子寺蔵 国宝 信貴山縁起絵巻 調査研究報告書－光学調査編－』の成果に基づき使用する顔料の検討を重ねた。 (2) 広島市立大学芸術学部が進める当館蔵絹本着色両頭愛染曼荼羅復元模写制作に基礎資料を提供するため、高精細デジタルカメラ等の光学機器を用いた原本の顔料調査及び熟覧調査を実施した (9 月 4 日)。 (3) 愛知県立芸術大学が進める聖衆来迎寺蔵絹本着色楊柳観音像復元模写制作の基礎資料を提供するために高精細デジタルカメラ等の光学機器を用いた顔料調査を実施し、制作が進められた復元模写と原本との詳細な彩色の比較検討を行った (9 月 18 日)。			
			
		愛知県立芸術大学による聖衆来迎寺蔵絹本着色楊柳観音像模写制作	
【備考】 調査回数：4 回 (5 月 30 日・9 月 12 日：東京藝術大学調査、9 月 4 日：広島市立大学調査、9 月 18 日：愛知県立芸術大学調査) 調査作品数：3 件(信貴山縁起絵巻山崎長者巻 1 巻、当館蔵両頭愛染曼荼羅 1 幅、聖衆来迎寺蔵楊柳観音像 1 幅)			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	東京藝術大学・広島市立大学・愛知県立芸術大学による復元模写制作のため、当館が撮影した高精細カラー画像・近赤外線画像を提供するとともに、各大学と共同で各種の光学的調査を実施し、そこで得られた成果に基づいて制作当初の顔料を復元的に考察した。こうした文化財の現状模写や復元模写は、未来に継承すべき文化財の現状を顔料や基底材の質感と共に詳細に記録するとともに、現在は経年の劣化などによって失われた文化財の制作当初の姿を明らかにすることで、文化財が持つ比類なき価値を広く共有することが可能となるものである。こうした模写制作に当館が実施する最新の光学機器を用いた調査成果を反映することにより、模写の精度を飛躍的に向上することが可能となる。さらにこうした取り組みを2年度以降も継続し、模写制作を通じて得られる顔料・基底材等の知見を蓄積していくことで、絵画作品を中心とする文化財の素材研究に大きく寄与することが期待できるだろう。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	信貴山縁起絵巻、両頭愛染曼荼羅、聖衆来迎寺蔵楊柳観音像という当館を代表する館蔵品・寄託品について復元模写を制作するにあたり、東京藝術大学、広島市立大学、愛知県立芸術大学とともに精度の高い光学的調査・熟覧を実施し、その成果に基づいて研究会等を重ねながら彩色等の復元的考察を加え、着実に復元模写制作に寄与することができた。2年度以降も、芸術系大学による復元模写制作に積極的に寄与できるよう、引き続きこれまでと同様の光学的調査をはじめ各種の調査研究を実施することで、中期計画の達成を目指す。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 古代の写経と聖教に関する基礎的研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 我が国には、寺院を中心に古代の写経や聖教が数多く伝来している。それは、人文科学全般にとって重要な研究資料であるが、たとえば文学作品や歴史書、古文書などに比較すると、仏教学以外の分野での資料としての利用が低調である。本研究は、当館の主要な蔵品である古代の写経と聖教を基軸に、文化財学的な立場から資料を調査し、多分野での利用に堪える基本情報の提示を目指すものである。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長 野尻忠
【主な成果】 (1) 写経の調査 ・館蔵の『大毘盧遮那成仏神変加持経』巻第四を、国文学の専門家と共同調査した。(4月18日) ・園城寺より寄託の「大蔵経」のうち『解脱道論』巻第五・十二を、美術史学及び日本中世史学の専門家と共同調査し、同書の筆跡が、『慕帰絵』巻第九の筆者である実乗院恒信の筆跡と同一であると確認された。(9月5日) ・青蓮寺(奈良県宇陀市)に赴き、所蔵の『称讃浄土仏撰受経』を3種調査し、うち2種は8世紀の書写、もう1種は13世紀頃の書写であることが判明した。(4月25日) ・奈良大学で開催の研究会及び文化財材質調査会に出席し、写経に使用された金色の蛍光X線分析を実施した(4月26日)。12世紀以降の金字経の多くに、純金ではなく真鍮が使用されているという傾向が、より鮮明になった。 ・以上のほか、静嘉堂文庫美術館(9月20日)、センチュリーミュージアム(12月21日)に赴き、8世紀の写経を中心に、筆跡のほか表紙や軸木の状態などを調査した。 (2) 聖教の調査 ・泉涌寺より寄託の「泉涌寺勧縁疏」を、国語学及び美術史学の専門家並びに文化財修理技術者等と共同調査し、蠟牋を中心とした料紙の状態を確認するとともに、製作経緯や伝来過程にかかわる知見を得た。(11月29日) ・東大寺経巻聖教調査に職員2人が参加した。(6月13日、9月3日) ・仁和寺聖教調査(文化庁主宰)に職員2人が参加した。(7月29日・31日) ・東京大学史料編纂所に赴いて石清水伝来聖教、大宮家伝来聖教等を調査し、新規寄託の候補となっている写本の内容が当時のもととして相応しいことが確認された。(5月27日) (3) 紙素材文化財一般の調査 ・上海博物館(中国)で開催の「鑑真和上と唐招提寺東山魁夷作品」展に関連し、唐招提寺に赴いて「一切経」を調査し(7月11日・30日)、出陳予定の版経の製作地と年代を特定した。 ・購入候補となっている「南都寺社古文書・古記録等」「三社託宣」について、原本の詳細調査を数度にわたって実施し(5月22日・23日・24日・30日・31日、6月4日)、それぞれの製作年代を特定または推定することができた。 (4) 研究成果の開示 ・上記の調査や、30年度までに蓄積された研究成果の一部は、平常展の展示解説に反映させたほか、特別展「国宝の殿堂 藤田美術館展」をはじめとする展覧会の図録や、会場パネル等で公表した。			
【備考】 ・野尻忠「華嚴経巻第七十(紫紙金字)(口絵解説)」『正倉院文書研究』16号(11月1日)等2件の論文、同「奈良時代の写経の奥深い世界」(白鶴美術館秋季展関連講演会)(10月13日)等2件の口頭報告で、研究成果を発表。			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	元年度も着実に調査と研究を実施できている。唐招提寺一切経のように、国の指定文化財として既知の経典について基礎的なデータを(一部ではあるが)提示できたほか、青蓮寺所蔵の『称讃浄土仏撰受経』のように、ほとんど世に知られていない8世紀の重要な写経を見出すこともできている。必要に応じて、各分野の専門家の意見を聞く機会が得られていることも、研究の発展のために有効である。研究成果の公表件数も堅調である。一方で、金字経の研究のように、30年度までに着手しながら、今なお手探り状態の事案もある。2年度は、基礎的調査は機会あるごとに実施しながらも、中期計画期間のとりまとめにむけて、重点項目を定めていく必要がある。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に掲げる収蔵品等の基礎的かつ総合的な調査と研究、及びその成果を展覧事業に反映することは、着実に実施できている。写経や聖教を専門とする研究機関は国内に数少なく、当館が率先して調査を進め、その情報を学界に提供していく責務があるが、展覧事業では一定の発信を実現しているものの、論文や報告書の形での公表は今後より一層、積極的に推進していく必要がある。2年度以降は基礎的調査を研究へと発展させ、発信にも力を入れていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 仏教工芸・上代工芸の総合的調査 ((4)-①-1))		
【事業概要】 仏教工芸及び日本上代工芸の総合的な調査・研究を行い、成果を公表する。対象は館蔵品、寄託品、一時預かり品をはじめ、展覧会等に際して借用した作品、他の機関・社寺等が所蔵する作品に及ぶ。また、展覧会の出品候補となる作品や、当館の所在する奈良周辺の文化財など、各所の文化財についても積極的に調査を実施し、基礎情報の蓄積に励む。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸考古室長 清水健
【主な成果】 (1) 展覧会に関する調査 ・特別展「国宝の殿堂 藤田美術館展」にて展示した文化財につき、外部有識者も交えた調査を実施した(6月17日)。 ・特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」に係る事前調査を行った(10月28日)。 (2) 外部資金による調査 ・科学研究費 基盤研究(C)「染織技法による仏像の研究」(研究代表者・内藤栄)による調査を、中国国内で4回実施した(6月、7月～8月、8月、12月)。また、国内でも1回実施した(2年1月)。 ・科学研究費 基盤研究(B)「海洋交易路による仏教流伝形態の研究」(研究代表者・松長有慶)による文化財調査に研究分担者の内藤栄の代理として吉澤悟が参加し、オランダ国内にて調査を行った(9月)。 (3) 共同研究 ・共同研究「聖衆来迎寺所蔵重要文化財鋳銅三具足の製作技法に関する研究」(奈良国立博物館と福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館との共同研究)に係るX線CT撮影、蛍光X線分析、三次元計測を含む調査及び検討を行った(9月5日、6日)。 (4) 経常調査、その他の調査 ・米国クリーブランド美術館にて展覧会のクレーエとして滞在中に館蔵品を調査した(5月)。 ・修理寄託中の文化財につき、X線CT撮影を含む調査や写真撮影を含む調査を行った(5月23日、6月13日)。 ・寄贈の打診のあった文化財の調査を、東京の所有者宅にて行った(8月31日)。 ・寄託品の蛍光X線分析調査を行った(2年3月4日)。 ・館蔵品のX線CT撮影を行った(2年3月30日)。 ・収蔵する仏教工芸品・上代工芸品等について随時調査を実施した。			
【備考】 ・調査54回(うち客員研究員・調査員による調査22回、海外調査6回)			



共同研究の調査風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	仏教工芸及び日本上代工芸の総合的な調査・研究を行い、成果を公表するという事業概要に従い、当初の計画に基づき、概ね成果を達成している。元年度は、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館との共同研究(3か年)を開始したことが特筆される。また、29年度より導入されたX線CT撮影装置を用いた調査・研究も実施し、金工品・木漆工品の構造・用材等のデータの蓄積を行った。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展覧会に関する調査に加え、継続して行っている奈良周辺の文化財の調査・研究、仏教工芸に関する調査・研究、上代工芸に関する調査・研究について一定度の成果を上げることができた。また、30年度に続いて、X線CT撮影装置を活用して模造制作を行うこととなり、着実に成果が実りつつある。 2年度は調査回数の確保に努めるとともに、従来の成果を生かしながら、対象となる文化財の一層多角的な調査を行うなど、計画の遂行に努力したい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	エ 墳墓出土品の調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 当館蔵の墳墓出土品の学術調査を通じて展示活用や研究発信に貢献する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品室長 吉澤悟
【主な成果】 (1) 群馬県白山古墳出土品の調査報告の発行 28年度より継続している白山古墳(群馬県前橋市)出土品(当館蔵)の調査報告を発行した。同報告では、昭和29年の調査に関する追加情報をはじめ、方頭大刀や蕨手刀、銅椀、鉄鏃などの年代や製作地等に関する考察、さらに蛍光X線による材質分析、CTスキャンを活用した刀の構造調査、和同開珎の3D計測など、充実した調査成果を公表することができた。 (2) 大和天神山古墳出土品の調査 大和天神山古墳(奈良県天理市)は23面の銅鏡(当館蔵。重要文化財)を出土した前期古墳として有名。元年度より島根大学法文学部岩本崇氏の科研費による研究「器物の『伝世・長期保有』・『復古再生』の実証的研究と倭における王権の形成・維持」(30～4年度)の分担研究として、この古墳出土品の再実測および多方向からの写真撮影などの調査を開始した。年内に3回、計6日間にわたる調査と、2回の研究発表会を開催した。3年後をめどに報告書をまとめて行く計画である。 (3) 盛装男子埴輪の「里帰り」と出土古墳の探索 30年度に購入した盛装男子埴輪(当館蔵)を当館にて初展示した後、その出土地とされる群馬県に「里帰り」させた(群馬県立歴史博物館。元年度考古資料相互活用事業による)。同時に地元研究者の協力を得て、その形態や製作技法、胎土などの特徴を調査し、製作地もしくはこれを用いた古墳の探索を開始した。 (4) 行基墓誌断片の調査成果の発表 奈良時代の僧侶、行基の墓誌断片(当館蔵)に関する調査報告を当館紀要に発表した。さらに東大寺における第18回ザ・グレートブッダ・シンポジウム「東大寺と行基菩薩」(11月23日・24日)にて、調査成果をもとに行基集団に関する口頭発表・シンポジウムを行った。 (5) 中世墓出土品の基礎調査 額安寺五輪塔(忍性塔)埋納品(文化庁蔵、当館寄託品。重要文化財)の実測図作成をすすめ、さらにその関連遺品の調査のため、鎌倉の浄光明寺の五輪塔の実査を行った(科研費「叡尊・忍性による中世的救済ネットワークの形成」との関連調査)。			
 考古資料相互活用事業により「里帰り」させた盛装男子埴輪 【備考】 (1) 研究報告／諫早直人・大江克己・金宇大・降幡順子・山口欧志・吉澤悟「群馬県白山古墳出土品の研究2」『鹿園雑集』第21号 奈良国立博物館 4月30日 (3) 展示／群馬県立歴史博物館 特別展 開館40周年記念「集まれ!群馬のはにわたち」(7月13日～9月1日。当館埴輪の展示は8月6日～9月1日) (4) 研究報告／吉澤悟「行基墓誌断片を考える―東大寺二月堂本尊光背断片との比較から―」『鹿園雑集』第21号 4月30日 口頭発表・シンポジウム／吉澤悟「行基墓誌断片からみた行基集団」第18回ザ・グレートブッダ・シンポジウム「東大寺と行基菩薩」(11月23日・24日)			



考古資料相互活用事業により「里帰り」させた盛装男子埴輪

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館所蔵及び寄託品の墳墓出土品に関して、時代に偏ることなく、積極的に調査・研究・発表することができた。特に行基墓誌の調査成果は当館紀要のみならず、東大寺のグレートブッダ・シンポジウムの発表においても広く発信することができた。また、大和天神山古墳出土品や盛装埴輪の調査は、当館のみならず各地の研究者と連携しながら推進する継続的・発展的な事業である。将来につながる研究を本年にスタートできたことも評価されて良いであろう。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	有形文化財の調査研究の一環として、当館の所蔵品・寄託品を中心に、積極的に調査・整理を行った。また館の内外の展示や研究会でその成果を活用することができた。中期計画に従った活動は概ね順調である。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	オ 南都の古代・中世の彫刻に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 展覧会開催に際して借用した作品や館蔵・寄託作品、また館外の寺社等の作品のなかから、南都伝来もしくは南都と関わりの深い古代・中世の彫刻を選び、詳細な調書の作成とデジタル高精細画像の写真撮影やX線ないしCTスキャン調査を通じ、データの収集と蓄積を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 岩田茂樹
【主な成果】 (1) 館内外において多数の作品の調査・撮影を行った。作品名は下記のとおり。 (2) 調査を通じて重要な学術的知見を得ることができた。 (3) 特別展や名品展における図録の解説や題箋の執筆、講座等における報告、また論文等刊行物のかたちで新知見の発表を行った。一部については2年度以降の刊行物に発表する。 [作品名] 大行寺阿弥陀如来立像(4月14～15日)／個人蔵木造天部立像(4月24日)／個人蔵木造千体仏菩薩立像(4月24日)／館蔵二十八部衆像4軀(5月16日)／藤田美術館木造空也上人立像(6月2日)／海住山寺地藏菩薩坐像(6月2日)／海住山寺不動明王立像(6月2日)／円照寺阿弥陀如来立像(康雲作)(6月29日)／円照寺阿弥陀如来立像(6月29日)／法華寺大日如来坐像(6月29日)／法華寺鬼子母神立像(6月29日)／法華寺妙見菩薩坐像(6月29日)／東壽院阿弥陀如来立像(8月2～4日)／浄土寺阿弥陀三尊立像(9月2日)／延暦寺薬師如来坐像(9月18日)／法隆寺塔本塑像(9月27日)／法隆寺上御堂釈迦三尊像(9月27日)／大神神社乾漆像残欠(10月30日)／正暦寺菩薩立像(2軀)(10月31日)／聖林寺十一面観音菩薩立像(11月14日)／正寿院不動明王坐像／出光美術館木造地藏菩薩立像(12月12日)／浄土寺阿弥陀如来立像(裸形)(2年1月6日) [調査の成果] 館蔵の二十八部衆像、東壽院阿弥陀如来立像、出光美術館木造地藏菩薩立像等についてはCTスキャン調査を行い、目視では確認不可能な構造の把握や、像内納入品の存在など多くの新知見を得ることができた。また、当館が長年行ってきた写真資料の蓄積についても、高精細デジタル画像撮影を行い、多くの成果が得られた。さらに、大阪・藤田美術館木造空也上人立像については、調査の過程で、イギリス王室が所有する古写真(ロイヤル・コレクション・トラスト管理)の中に本像を写したものが判明し、本像がかつて奈良に所在し、明治時代の奈良博覧大会とも関連が推測される貴重な品であることが判明した。			
【備考】 ・30年度に行った藤田美術館所蔵の彫刻作品に関する調査結果並びに写真を、4月13日から6月9日に開催された特別展「国宝の殿堂 藤田美術館展」の展示・図録・公開講座で公開した。 ・藤田美術館木造空也上人立像の調査成果は、元年度の特別展「国宝の殿堂 藤田美術館展」及び特別陳列「重要文化財 法隆寺金堂壁画写真ガラス原板」(12月7日～2年1月13日)図録や、サンデートーク「古写真と仏像研究」(12月15日)で報告された。 ・大神神社乾漆像残欠及び正暦寺菩薩立像、聖林寺十一面観音菩薩立像は、2年度開催予定の特別展「聖林寺十一面観音(仮)」にて撮影画像を図録及び広報媒体に使用し、調査成果を図録・展示に反映させる予定である。 ・大行寺阿弥陀如来立像、東壽院阿弥陀如来立像、出光美術館地藏菩薩立像の撮影及びスキャン調査の成果は、元年度刊行予定の豪華図録『快慶』において公表する。 ・30年度に行った法徳寺の諸尊像に関する調査で得られた知見並びに撮影した写真は、7月13日から9月8日に開催された特別陳列「法徳寺の仏像」の展示・図録で公開された。			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査の成果は、元年度発行の刊行物や展示に反映された。特に元年度は、特別展、特別陳列で奈良に関係のある彫刻を数多く展示することができ、その調査過程で判明した新事実を図録や講座等で積極的に公表することができた。元年度中に行われた調査で得られた知見や、撮影された写真は、2年度以降に開催の特別展や特別陳列、あるいは講座等に反映させる予定である。計画に対し、十二分に成果が得られたと言える。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	30年度に引きつづき、南都に伝来ないし南都と関わりの深い古代・中世の彫刻作品について、調書の作成や記録写真の撮影、X線CT等の光学的手法による調査を行っており、データの収集・蓄積に十二分の成果をあげている。調査によって得られた知見についても、積極的に公表しており、中期計画の4年目として、着実に事業を継続している。今後も同様のペースで事業を進めるように努める。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	カ 東京文化財研究所との共同による仏教美術の光学的調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 東京文化財研究所との共同研究「文化財の光学的調査と情報共有に関する基礎的調査研究」に基づいて、当館が所蔵及び保管する仏教絵画を中心とする美術作品について、高精細デジタルカメラや蛍光エックス線分析器など最新の光学機器を用いた文化財調査を実施し、併せてデジタルコンテンツの作成を行うものである。上記の調査を通じて、色料や基底材など作品に用いられる素材の情報や、制作技法に関する情報、補彩・補絹など補修箇所に関する情報を大量・精緻に蓄積し、報告書等でその成果を広く公表することで、美術史的研究や将来の修理に資することも視野に入れている。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長 谷口耕生
【主な成果】 (1) 30 年度末に刊行した東京文化財研究所との共同研究報告書「朝護孫子寺蔵 国宝 信貴山縁起絵巻―光学調査編―」の成果に基づき、美術史的所見や模写等の関連資料を総括的に盛り込む報告書「信貴山 朝護孫子寺蔵 国宝 信貴山縁起絵巻 調査研究報告書―研究・資料編―」を元年度末に刊行した。 (2) 24 年度から継続的に実施してきた国宝綴織當麻曼荼羅（當麻寺蔵）を対象とする光学調査の一環として、當麻寺本堂厨子安置裏板曼荼羅の追加調査及び當麻寺本堂厨子安置裏板曼荼羅の詳細な分割撮影及び顕微鏡写真撮影を実施した（12 月 9・17～19 日）。			
			
當麻寺裏板曼荼羅調査			
【備考】 調査回数 1 回(4 月 23 日)、調査作品数 1 件（當麻寺本堂厨子安置裏板曼荼羅 1 面） 刊行物 『信貴山 朝護孫子寺蔵 国宝 信貴山縁起絵巻 調査研究報告書―研究・資料編―』2 年 3 月 31 日刊行			



當麻寺裏板曼荼羅調査

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	16年度から継続的に実施してきた東京文化財研究所との共同研究「文化財の光学的調査と情報共有に関する基礎的調査研究」に基づき、平安絵巻を代表する名品である国宝信貴山縁起絵巻について光学的調査の成果報告書第2冊の元年度中刊行に向けて調査データの整理・分析を進め、編集作業を進めることができた。また24年度から共同研究の一環として継続的に実施してきた国宝綴織當麻曼荼羅（當麻寺蔵）の光学的調査について、原本と密接な関係にある當麻寺本堂厨子内安置裏板曼荼羅の追加調査を実施することができた。これら精度の高い調査データは、東京文化財研究所の研究員とともに詳細な分析を加え、現在刊行を計画中の綴織當麻曼荼羅に関する調査成果報告書において広く公表する予定である。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	16年度から協定を結んで進められてきた東京文化財研究所との共同研究に基づき、平安絵巻を代表する信貴山縁起絵巻の調査報告書第2冊を元年度末に刊行した。さらに、24年度から継続的に実施してきた国宝綴織當麻曼荼羅の関連調査を実施し、その成果として得られた画像データを着実に蓄積することができた。今後も国宝綴織當麻曼荼羅の共同研究報告書刊行に向けて、さらなる精度の高い関連調査を継続していきたい。また、高精細デジタルカメラ、蛍光エックス線分析器、エックス線CT分析器など、当館にすでに設置されている光学機器も積極的に活用しながら調査対象として春日宮曼荼羅等奈良ゆかりの仏教絵画を積極的に取り上げ、彩色の施された文化財に関する総合的な研究と情報の共有という広い枠組みの中で検討を重ねることで、中期計画の達成を目指した更なる進展を図りたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ わくわくびじゅつギャラリー「いのりの世界のどうぶつえん」に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 わくわくびじゅつギャラリー「いのりの世界のどうぶつえん」展覧会開催に伴い、教育普及的観点から展示手法を調査・研究する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	主任研究員 中川あや
【主な成果】			
(1) 多様な来館者層が展示を楽しめる観覧補助ツールの調査・研究 親子や外国人観光客など様々な来館者が仏教美術の作品を楽しみながら観覧できるようなツールを、他機関の事例を調査した上で開発し、ワークシート2種、ハンズオン1種（以上4言語対応）、図録1種を製作した。また、会場の題箋・パネル類において、平易な語調やキャラクターによる一言解説など、新たな手法を提示した。			
(2) 来館者を対象とした展示評価の実施・研究 来館者の反応を評価するため、会場での行動追跡調査、アンケート調査（日・中2言語）を実施し、結果の分析を行った。			
(3) 動物図像を含む仏教美術作品の集積 動物が表された彫刻、絵画、書跡、工芸、考古作品を65件展示した（うち国宝5件、重要文化財18件）。時代は飛鳥時代から江戸時代におよび、初出陳の作品や、普段出品機会の少ない作品などを盛り込み充実した展示内容を公開することができた。			
			
展示室内のお絵描きコーナー		展覧会チラシ	
		ワークシート（英語版）	
【備考】			
・作品に関する事前調査 8回			
・公開講座 1回			
中川あや「親子講座 どうぶつえんのわくわくガイド」（7月27日）			
・絵本づくりワークショップ「とびだす！うごく！いのりの世界のどうぶつ」（8月17日）			
・第48回夏季講座「仏教美術にみる動物のすがた」（8月21～23日）			
・展覧会図録『わくわくびじゅつギャラリー いのりの世界のどうぶつえん』 奈良国立博物館 7月12日刊行			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本展覧会では69,165人という想定以上の来館者数が得られ、特にこれまで当館に来館機会の少なかった若年層と、近年増加傾向にある外国人観光客の割合が通常の特別展・特別陳列に比して高かったことが、独自性の高い展覧会として評価できる。また、新規に開発した各種観覧補助ツールにより、作品に関する来館者の対話が生まれ、仏教美術への理解や親近感が促進されたことが伺われた。これは博物館展示における新たな手法として、発展性を持つものである。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館の特色である仏教美術に関して、専門性を保ちつつ親しみやすい手法で広く一般に発信するという目標を達成することができた。また、来館者を対象とした展示評価によってその効果も確認され、今後の展覧会に資するデータを得ることができた。今後も来館者のニーズを敏感に把握し、多様な来館者にとって理解がしやすく、かつ質の高い展示の企画へとつなげたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ク 特別陳列「法徳寺の仏像—近代を旅した仏たち—」に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 仏教美術に関する有形文化財の調査研究の一環として、奈良・法徳寺に近年寄進された約 30 軀の仏像の美術史的及び自然科学的研究を行い、その成果を特別陳列「法徳寺の仏像—近代を旅した仏たち—」に反映させる。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	主任研究員 山口隆介
【主な成果】 (1) 法徳寺仏像群の調査撮影及びX線CTスキャン・蛍光X線分析調査を実施した(6月)。 これまで基礎的な情報がほとんどなかった当該仏像群の全体像を把握するとともに、実査に基づく調書の作成及び高精細デジタルカメラによる写真撮影を行うことができた。また、X線CTスキャン・蛍光X線分析調査により、構造の詳細並びに金銅仏の金属組成が判明した。 (2) 東京文化財研究所にて売立目録デジタルアーカイブを用いた法徳寺仏像群の伝来に関する調査を実施した(5月)。 木造地藏菩薩立像について、明治 39 年(1906)に興福寺を離れて以降、昭和 16 年(1941)に池田庄太郎の所有であることが確認できるまでの間の所有者が、都筑馨六であったことが判明した。 (3) 以上の成果をもとに、特別陳列「法徳寺の仏像—近代を旅した仏たち—」を企画立案し、実施した。同展の展覧会図録において、各像の美術史的及び自然科学的調査から得られた知見を報告するとともに、展示会場のパネルや題箋にも反映させた。			
【備考】 (1) 元年度実施した調査の回数：4 回 (2) 論文等：山口隆介「地藏菩薩像が旅した一世紀 —『法徳寺の仏像』に寄せて—」(特別陳列図録『法徳寺の仏像—近代を旅した仏たち—』巻頭文、7 月 13 日) (3) その他調査・研究の実績等：公開講座「近代を旅した仏たち —奈良ゆかりの仏像を中心に—」(於奈良国立博物館講堂、8 月 24 日)			



会場風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	仏教美術を中心とした文化財の展示を活動の中核に据えている当館にとって、これに関連する多彩かつ魅力的な展示の企画立案及び実施は、社会的な要請がもっとも多い業務である。こうした認識のもと、南都伝来あるいはそうと推測される仏像が法徳寺にまとまって寄進されたことをひとつの契機として、これらの美術史的及び自然科学的調査を実施し、その成果を展覧会に結びつけた本プロジェクトは、博物館における調査研究とその成果の公表の理想的なカタチといえる。これまでその存在さえ認知されていなかった仏像群の基礎的な情報を、高精細な写真とともにいち早く公表し、さらには、展覧会図録にX線CTスキャン調査で得られた画像を豊富に盛り込むことで、最新の成果を広く内外に発信することができた。なお、法徳寺の仏像は長らく個人所有だったこともあり、保存状態が良好でない作品が多い。2年度以降、本プロジェクトで得られた研究成果を活用しながら、計画的に保存修理を実施していく予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	特別陳列「法徳寺の仏像—近代を旅した仏たち—」の企画立案から実施に至る過程における調査研究は、「有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究」という中期計画に沿うものであり、その点において着実に実績を積み重ねている。2年度以降も将来の企画展示の充実を図るべく、他機関とも積極的に連携しながら調査研究を継続し、着実な成果を挙げていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ケ 特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」〔特集〕春日大社にまつわる絵師たち」に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 春日大社摂社若宮社の祭礼であるおん祭の歴史・伝統と、春日信仰に関連した美術作品を紹介する展覧会。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	主任研究員 北澤菜月
【主な成果】 (1) 京都府立京都学・歴彩館所蔵「原家寄贈資料」に含まれる、春日大社関係資料の調査 江戸時代後半に春日大社の式年造替に絵師として関わった京都の原家には、春日大社の式年造替と原家の画事に関する史料が伝来した。京都府立京都学・歴彩館が所蔵する原家寄贈資料の一部について詳しい調査を行い、本年の特集テーマにふさわしい作品を選定することができた。 (2) 春日大社所蔵「原家寄贈資料」及び春日大社式年造替関連資料の調査 京都の原家に伝えられた春日大社の式年造替に関連する資料の一部は春日大社にも奉納されている。これに含まれる未紹介の史料や絵画粉本類を調査した。また、関連する春日大社所蔵粉本類もあわせて調査し、本年の特集テーマにふさわしい作品を選定することができた。 (3) 以上の(1)(2)の調査成果により、元年度の特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」の特集テーマ「春日大社にまつわる絵師たち」の内容を大変充実したものにできた。そのなかで、従来未紹介であった春日大社所蔵の資料を多数展示し、広く紹介することができた。			
			
		(展示風景)	
【備考】 ・調査：京都府立京都学・歴彩館 1回 (2点) 春日大社 1回 (22点) ・論文等：北澤菜月 「おん祭と春日信仰の美術—特集 春日大社にまつわる絵師たち—」(特別陳列『おん祭と春日信仰の美術』図録 展示概説、奈良国立博物館、12月) ・特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」(12月7日～2年1月13日、奈良国立博物館東新館)			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本展は春日大社の伝統行事「春日若宮おん祭」を紹介する例年の展覧会であるが、本年の展示では「春日大社にまつわる絵師たち」を特集テーマとした。おん祭を描いた絵画を集めて展示するとともに、これまでの研究で紹介されることのなかった、江戸時代に式年造替に関わった絵師に関する資料群の調査を行い、その存在を評価し、展示を通じて広く公表することができた。例年、特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」では、祭礼の一部を取り上げてテーマ設定がなされることが多かったが、元年度は絵師にスポットをあてることによって、未紹介の資料を多数紹介しながら、新しい視点で展覧会を構成することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	「おん祭と春日信仰の美術」は、平安時代以来の長い歴史を持ち、重要無形民俗文化財である「春日若宮おん祭」の歴史と、あわせて春日大社に対する信仰を紹介する展覧会であるが、毎年、新たな切り口を見出し、展覧会を通じてその多様な魅力、歴史・文化における重要性を紹介することができているといえる。本年は「春日大社にまつわる絵師たち」を特集テーマとして、新たな視点の展示を示すことができた。今後も、祭礼や信仰の様々な側面に関する研究を行い、新たな知見を提示していく必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	コ 特別陳列「重要文化財 法隆寺金堂壁画写真ガラス原板—文化財写真の軌跡—」に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 昭和10年(1935)に撮影された法隆寺金堂壁画の写真原板の寄託を受け入れたことを契機に、明治時代初頭以降150年にわたる文化財写真の撮影の歴史を通史的に取り上げる展覧会を実施した。あわせて今年度に法隆寺金堂壁画保存活用委員会の活動の一環として高精細デジタル撮影が行われた法隆寺金堂外陣壁画第一号壁について、原寸大に出力して最新の成果を広く公開した。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	資料室長 宮崎幹子
【主な成果】 (1)文化財の指定、修理、寄託にともなう迅速な公開と関連資料の紹介 27年度に重要文化財に指定された法隆寺金堂壁画の写真原板は、法隆寺所蔵の原寸大分割撮影写真363枚と、撮影を請け負った京都の美術印刷会社便利堂所蔵の全図・四色分解・赤外線写真83枚からなる。これらは指定後の修理に引き続いて元年度より高精細デジタルスキャニング事業が実施されており、写真原板をもちいた作業が完了したことを受けて8月末に奈良国立博物館へ寄託された。この機会に写真原板とあわせて明治時代に文化財の写真撮影がはじまって以降の代表的な事例を取り上げ、文化財の記録作成と保存の重要性をあらためて指摘した。国庫補助事業による修理の一環としてはじめて実施されたデジタル化の成果をいち早く公開し、社会へ還元することも叶った。 (2)展示内容の独自性 今回のような趣旨の展覧会は近年例がなく、希少な文化財を国民に広く紹介できた点において大きな意義があった。デジタル化の成果の公表に際しては、次の二つの主体が関わっている。まず文化財活用センターの協力を得てスキャニング画像を壁画一面に接合する作業を行い、活用の幅を大きく広げた。また元年度より当館と法隆寺、国立情報学研究所高野研究室と共同研究の覚書を締結し、その活動の範囲で接合画像をもちいたコンテンツを二種類制作した。これらを特別陳列の会場で発表した。また元年度、高精細デジタル撮影が行われた法隆寺金堂外陣壁画第一号壁も原寸大で出力して展示した。以上の展示内容、協力体制の構築は、いずれもこれまでにないかたちのもので、博物館活動の幅を広げ深めた意味において高く評価できる。			
【備考】 事前調査・撮影： 東京国立博物館（2回）、東京大学史料編纂所（2回）、山形県立図書館（2回）、お札と切手の博物館（2回） 公開講座： 「文化財写真の軌跡—150年のあゆみ—」 宮崎幹子 2年1月11日（土） 奈良国立博物館			



「重要文化財 法隆寺金堂壁画写真ガラス原板—文化財写真の軌跡—」
ポスター



「重要文化財 法隆寺金堂壁画写真
ガラス原板—文化財写真の軌跡—」
ポスター

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	法隆寺金堂壁画の写真原板は大半がガラス乾板だが、近年ガラス乾板は歴史資料としての重要性が指摘されており、わが国における文化財写真撮影の歴史を代表する写真原板を公開することは時宜に適切であった。また文化財写真とその撮影の歴史を正面から取り上げた展覧会は近年例がなく、独自性も高い。さらに出陳品のひとつである東京国立博物館所蔵の台紙装写真が、イギリス王室所有のアルバム装写真と同じ写真原板から作成された紙焼き写真であることを突き止め、撮影年代の下限が明治14年（1881）であることを確認した。これはわが国における文化財写真の歴史上極めて重要な発見であり、撮影年代の確定を含めてさらなる研究の進展が期待されている。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	上記の台紙装写真は関連情報の収集をさらに進めることにより、撮影の背景が詳しく判明することが期待されており、研究の必要性が高い。また当機構内には未整理、未調査の写真資料が大量に残されており、それらを今後丁寧に読み解いていくことで、文化財の記録作成と保存の歴史が解明されてゆき、今後の博物館活動にも大きく寄与するものと思われる。そのひとつの契機となった展覧会であった。

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	X線CTスキャナ等による文化財の構造技法解析に関する調査研究（(4) -①-1）		
【事業概要】 X線CTスキャナ、3Dデジタイザ等を使用した有形文化財の構造及び技法を調査し、その成果を展覧事業及び教育活動に資する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長 木川りか
【主な成果】 (1) 展示関連作品の調査 展示のために借用した作品の構造技法及び保存状態を確認するため、X線CTスキャナを使用した非破壊調査を実施した。例として、大報恩寺所蔵の十大弟子立像全十軀、福岡県内出土の銅戈、鉄戈、鉄剣の調査を行い、一部については破断面の蛍光X線分析も行った。いずれも、保存状態に異常がないことが確認された。今後は、作品担当者、所有者と共に構造及び製作技法に関する研究を進めていく。			
(2) 3Dプリンタによるレプリカの製作 更紗の図案染めに用いるために木版の3Dデジタイザによる計測を行い、得られたデータに基づいたレプリカを3Dプリンタで製作した。このレプリカは、特集展示「館蔵名品展 更紗 生命の花咲く布」に関連する「茜染めワークショップ」（8月10日開催）にて、茜の模様染めの体験学習に活用した。 また、過去の計測データを使用して阿弥陀如来坐像のレプリカを製作した。このレプリカは上下に分離でき、断面の年輪から一木造であることが分かるようになっており、館内のミュージアムトーク及び視覚障がい者を対象とした館外イベント（「みんなでふくし&ふくふくプラザまつり」、12月7日開催）等で活用した。			
【備考】 ・ X線CT調査件数 108 件、調査回数 214 回 ・ 三次元計測調査件数 6 件、調査回数 9 回 ・ 論文 田村史子、塩川博義、中川一人、渡辺祐基「中部ジャワのガムランにおける『ゴング』類の分類 1 肩高水平置き『ゴング』〈Kenong クノン〉と〈Bonang ボナン〉の形と音の特性」『筑紫女学園大学人間文化研究所年報 第30号』（8月） 大西智洋、大橋有佳、渡辺祐基、當山綾乃「黒漆山水楼閣葡萄沈金中央卓の保存修復と光学分析調査」『浦添市美術館紀要 第15号』（2年3月） ・ 関連展覧会 特集展示「館蔵名品展 更紗 生命の花咲く布」（7月30日～10月20日）			



木版の三次元計測風景



木版の三次元計測風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	元年度は114点の文化財の調査を実施し、各種文化財の保存状態や内部構造に関する新たな知見を得ることができた。また、得られたデータの一部をレプリカの製作や研究紀要への掲載を通じて公表し、研究成果の普及に努めた。視覚障がい者のための取り組みの一環として実施した触れるレプリカを用いたイベントが好評であったことは特筆すべきであり、今後も積極的に活用していく予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、これまで各種文化財の構造技法解析を実施し、文化財の製作技法に関する理解を深めてきた。元年度は三次元データの収集を重点的に実施した。2年度には、これらのデータの分析を進め、各種文化財の構造技法の特徴を明らかにする予定である。さらに、展示及び学会発表等によって研究成果の普及に努める。また、レプリカ製作等によって、すべての人が楽しむことのできる展示・解説方法を検討していく。

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	近世キリスト教に関する研究（(4) -①-1）		
【事業概要】 日本の近世（安土桃山時代から江戸時代まで）の時代性を特徴付けるキリスト教の日本伝来と禁教に関する作品の展示等を通じて、近世日本におけるキリスト教の歴史や信仰に関する研究成果を発信する。			
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	資料登録室研究員 松浦晃佑
【主な成果】 (1) 展覧事業 29年度からの継続事業として、「キリスト教の伝来と禁教」というテーマで、キリスト教の日本伝来から明治時代にキリシタン高札が撤廃されるまでの歴史を、観覧者がたどれるように作品展示を行った（4月1日から2年3月31日まで）。30年度までは半年間程の展示であったが、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」がUNESCO世界文化遺産に登録され、日本のキリスト教の歴史や信仰のあり方に対する関心が高まったことを受け、元年度より通年展示を始めた。 (2) 資料調査 福岡県・久留米市埋蔵文化財センターにて、キリスト教関連の考古遺物の調査を行った（10月18日）。久留米は江戸時代初めに禁教令が發布されるまで、キリシタンが多く生活していたところであり、城下町には教会も建てられた。城下町遺跡から発掘された「十字浮文軒平瓦」は、キリシタンの生活の様子をうかがわせるものである。本品は2年度の展示にて公開する予定である。 (3) 研究成果の発信 研究論文「寛永十七年マカオ使節の嘆願書に関する一考察」（当館『東風西声』15、2年3月）を発表した。江戸幕府がマカオのポルトガル人との交易を拒否した、いわゆる「鎖国」の契機となる事件を取り上げ、近世日本の対外関係におけるキリシタン禁制を、日本語史料と欧文史料から論じた。			
		 久留米市埋蔵文化財センター所蔵 「十字浮文軒平瓦」の調査 (10月18日)	
【備考】 ・調査回数：1回（10月18日、於：久留米市埋蔵文化財センター）			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」がUNESCO世界文化遺産に登録され、日本のキリスト教の歴史や信仰のあり方に対する関心世界的に高まるなか、日本人あるいは外国人の来館者に向けて、近世日本のキリスト教の歴史、キリスト教徒の信仰を作品展示にて紹介できた。また、近世日本のキリスト教の歴史で重要な場所であった九州で、通年展示することができた。さらに、研究論文も公表することができ、一般に広く研究成果を発信できた。 近隣の機関の協力を得ながら、2年度も展覧事業を行う予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業では、日本とアジア諸地域等との文化交流を中心とした文化財についての展示及び調査研究の一環として、近世日本の文化交流にとって非常に重要なキリスト教の歴史を、展覧事業と研究成果の公表を通じて、広く一般に伝えることができた。 世界的に関心の高い日本のキリスト教の歴史について、2年度も継続して展覧事業を行う予定である。

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	高等学校が所蔵する歴史資料に関する研究（(4) -①-1）		
【事業概要】			
全国の高等学校には現在、構内遺跡出土品、発掘調査出土品等々、様々な来歴の考古資料が保管されている。高等学校所蔵考古資料の実態把握は、考古学研究上の重要性に加え、社会史的、教育史的意義を有する。しかしながら、考古学的知識を有する教職員の不足から、十分な管理、活用が行われているとはいえない状況にある。本研究は、高等学校所蔵考古資料の更なる活用に向けて、全国的な調査を実施し、その成果を展示、教育普及活動等の博物館活動を通じて広く公開するとともに、高等学校と博物館の効果的な連携活動について研究するものである。			
【担当部課】	交流課	【プロジェクト責任者】	主任研究員 今井涼子
【主な成果】			
(1)「全国高等学校歴史学フォーラム」の実施			
・30年度同様ポスター発表形式で実施し、7県7校（うち、福岡県1校）が発表した。およそ300人が来場した。（8月4日）			
・30年度のフォーラム終了後、参加生徒に感想を聞いたところ、来場者への解説に追われて他校の発表を聞くことができなかった生徒が非常に多かった。このため、元年度は開場前に1校ずつリハーサルを行い、参加生徒全員が他校の発表を聞く機会を設けた。			
・参加生徒相互の交流を促進し、互いの研究活動の充実につなげることを目的に、別室で意見交換の場を設けた。参加生徒を4～5人ずつ班に分け、各班に当館職員1人が進行役としてつき、歴史学フォーラム参加の感想や準備の様子、日ごろの研究活動の状況等について意見交換を行った。引率教員は教員のみで意見交換を行った。初めての試みだったが、参加生徒、引率教員、進行役を担った当館職員、いずれからも概ね良い評価を得た。今後も継続して意見交換の場を設ける予定である。			
・事業趣旨にご賛同いただき、公益財団法人九州国立博物館振興財団の後援、太宰府天満宮の協力を得た。			
(2) 他機関が実施した事業の視察		全国高等学校歴史学フォーラムの様子	
・佐賀県で開催された第43回全国高等学校総合文化祭郷土研究部門の発表を視察した。（7月30日）全国高等学校総合文化祭は毎年各自治体持ち回りで開催しているが、郷土研究部門は必ず設けられるものではなく、活動するクラブが非常に少ないことがうかがえる。全国から25校（研究発表21校、パネル掲示12校）が参加して行われた。視察したのは3日間の日程のうち生徒が研究発表を行った第2日目のみだが、日程の構成や研究発表の進め方、パネル掲示を含む会場配置など、「全国高等学校歴史学フォーラム」の参考になった。			
・静岡県立登呂博物館の常設展および体験活動を視察した。（6月15・16日）登呂博物館は体験型博物館で、常設展会場や屋外に体験補助員が常駐し、稲作に伴う様々な作業の体験をサポートしている。今後、「全国高等学校歴史学フォーラム」のプログラム中に学習効果と満足度の高い体験事業を組み入れることを目的に、運営状況の聞き取り調査と現場状況の視察を行った。			
【備考】・「全国高等学校歴史学フォーラムの実施について」『東風西声』第15号2019			



全国高等学校歴史学フォーラムの様子

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業の3年計画の3年目である元年度は、30年度実施事業の成果ならびに他機関実施事業の視察成果をふまえ、「全国高等学校歴史学フォーラム」に新たなプログラムを加え、実施内容を充実させることができた。しかしながら、担当する国際交流事業や特別展の準備のため、高等学校所蔵考古資料の調査や高等学校との連携事業の実施には至らなかった。 引き続き、高等学校との継続的な博学連携事業の実施方法を検討し、「全国高等学校歴史学フォーラム」に成果を反映させていく予定である。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。元年度は、「全国高等学校歴史学フォーラム」において高校生と博物館職員が意見を交わす機会を設け、幅広い世代の人が博物館で語り合う機会を提供することができた。 一方で、3年間の研究結果を取りまとめ、他機関で参考にできるように形に整理する予定だったが、担当する国際交流事業や特別展の準備のため、取りまとめには至らなかった。 引き続き、他機関の取り組みについての取材研究を進めながら、長期的に継続可能な博学連携事業のあり方、内容について検討を進めていく予定である。

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	「山梨・釈迦堂遺跡の縄文文化（仮）」に関する調査研究		
【事業概要】 元年度開催の特集展示「縄文王国やまなし」の開催に向けた調査研究			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室長 志賀智史
【主な成果】 (1) 資料調査 ・重要文化財釈迦堂遺跡出土品を所蔵する山梨県釈迦堂遺跡博物館で調査を行った。釈迦堂遺跡博物館が改修工事を行う関係で、常設展示作品の一括借用が可能となった。また、釈迦堂遺跡博物館の紹介により、山梨県内自治体の所有する優品を厳選して調査、借用することができた。 (2) 特集展示「縄文王国やまなし」 ・縄文文化が最も高揚した時期と地域である縄文時代中期の山梨に焦点を当てた展示とした。 ・山梨県内8施設より土器と土偶を中心に、石器、石製品など総数68点を展示した。釈迦堂遺跡博物館の全面的な協力が得られたことから、展示品の半数以上の39点が重要文化財となった。 ・文化交流展示室第3室を会場とした。縄文文化は地勢との関係が深い文化であるため、壁付ケースを黒のシートで覆い、壁面上方に甲府盆地から見える周囲の山並みの写真を張り、会場を甲府盆地に見立てた。 ・展示品は、全面に立体的な装飾を持つ土器が中心であることから独立ケースで展示し、四方から鑑賞できるようにした。そのため、来館者に土器の造形美を印象付けることができた。 ・周囲の壁面には8つのコラムを掲出し、高揚期の縄文文化の背景等を解説した。 ・所蔵機関の協力を得て、会場内は全て写真撮影可とした。 ・展覧会図録は考古学者によるコラムに加え、考古学者以外からのコラムを加えることで一般の方々に親しみやすい内容とした。図録は一般書店でも販売した。 ・ミュージアムトークは2回実施した。第1回は、釈迦堂遺跡博物館の学芸員により山梨の縄文文化の魅力を解説した。第2回は、縄文土器の作り方を解説し、普及事業用に借用した土器片のハンズオン体験を行った。 ・地域連携事業として、福岡県大野城市の大野城心のふるさと館においても同一期間で同一タイトルの展示を行い、相乗効果を狙った。 ・関連イベントとして、日本遺産「星降る中部高地の縄文世界」事業による講演会と縄文土器の拓本カード製作等の体験イベントを行った。また映画「縄文にハマる人々」の無料上映会とトークイベントを行い、普及啓発に努めた。			
			
		展示会場風景	展示図録
【備考】 ミュージアムトーク2回の参加者：合計約60人 日本遺産の講演会と体験イベント参加者：合計約100人 映画とトークイベント参加者：合計142人			



展示会場風景



展示図録

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	縄文文化への関心が高まっているこの時期に、釈迦堂遺跡博物館の改修工事に伴う一時閉館により、重要文化財の土器や土偶の一括借用ができたことは、絶好の機会であった。釈迦堂遺跡博物館の全面的な協力により、山梨県内の自治体との借用交渉も順調に行うことができ、より良い展示内容となった。縄文文化が低調な九州において、魅力ある展示を行うことで、縄文文化を再認識できる機会を設けることができた。地域連携や日本遺産関連イベントを組み合わせることで、普及啓発を効率良く行うことができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき本調査研究を行った。展示の構成を、1. 土器と土偶の造形、2. 土器の制作、3. 集まる各地の特産品、4. 繁栄のみなもと、とすることによって、美とそれを生み出した時代背景に迫ることができ、奥深い展示内容とすることができた。また、弥生時代の最先端地域であった福岡において、縄文文化の最盛期の品々を展示することにより、改めて両文化を考えるきっかけを作ることができた意義は大きい。

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	水中遺跡の保存活用に関する調査研究（4）-①-1）		
【事業概要】 本事業は、国内外における水中遺跡の調査手法等の検証を行い、その結果をもとに 30 年度から 5 年計画で実施される予定の『発掘調査のてびきー水中遺跡調査編ー』の作成に資することを目的とする。奈良文化財研究所は、作業部会・研究集会の実施と『てびき』作成に向けた検討、当館は、国内の水中遺跡に関する保存・活用手法の検討、諸外国における水中遺跡保護に関する最新情報の収集などを行った。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 小泉恵英
【主な成果】 元年度の事業は、①『発掘調査のてびきー水中遺跡調査編ー』の作成業務、②国内の水中遺跡に関する保存・活用手法の検討、③海外における水中遺跡保護に関する最新情報の収集、の 3 課題に分けられた。 課題①： 主に奈良文化財研究所が担当し、「てびき」の章立て案と内容の検討のため作業部会（協力者会議）を 4 回開き、2 年 2 月に滋賀県大津にて全国の自治体職員を対象とした研究集会「水中遺跡保護行政の実態 II」を開催した。当館は、「てびき」で使用する資料・アーカイブの作成や研究集会でポスター発表を行なった。 課題②： 当館が中心となり、「A. 国指定史跡周辺の水中遺跡に関する保存・活用手法の検討」と「B. 国内の水中遺跡に関する保存・活用手法の検討」を実施した。A. については、長崎県松浦市において、史跡鷹島神崎遺跡周辺で松浦市と琉球大学が実施した現地保存とモニタリング作業の検証や、海外の現地調査の事例についても資料を集めた。B. については、主に 3 件の水中遺跡に関するプロジェクトを実施した。北海道上ノ国町では、30 年度に引き続き幕末に薩摩藩が建造した昇平丸の推定沈没地点を中心とした地域の水中文化遺産の探査を行った。探査手法の検証の一環として実施した空中ドローン搭載グリーンレーザーによる海底の地形測量は、日本初の事例である。これまで船が入ることのできなかった浅海底の新しい調査手法として注目に値する。鹿児島県徳之島（伊仙町・天城町・徳之島町）では、3 町と共同で潜水調査中の遺跡位置確認の方法などを検証した。福岡県新宮町の相島海底遺跡では、発掘作業、引き揚げ遺物の調査や保存処理作業、遺跡の活用プラン策定に向けた助言・指導を行った。 課題③： 水中遺跡の調査・保護・管理・活用について最新の情報を収集することを目的に、6 月にフランスで開催されたユネスコ水中文化遺産保護条約締約国会議やユネスコ主催の国際会議にオブザーバーとして出席した。また、諸外国の水中遺跡調査に関するマニュアルなどについても情報を収集し、日本の文化財行政の現状に即した内容について精査した。			
【備考】 取組：水中遺跡調査検討委員会（2 回）、作業部会・協力者会議（4 回）、研究集会・ポスター発表（11 回） 報告書：『水中遺跡保護体制の整備充実に関する調査研究事業 2』（奈良文化財研究所と共著）			



グリーンレーザーによる探査の様子
（北海道上ノ国町）



ユネスコ主催の国際会議の様子/中国の発表
（プレスト・フランス）



グリーンレーザーによる探査の様子
(北海道上ノ国町)



ユネスコ主催の国際会議の様子/中国の発表
(プレスト・フランス)

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	①～③の課題について、予定通りに実施することができた。課題①：「てびき」の目次・章立て案、担当者、レイアウトなどの具体的な内容について検討し、一部執筆を開始することができた。課題②：松浦市では遺跡保存の手法について確認し、上ノ国町、徳之島、新宮町では、新しい探査手法や調査手法の検証により課題を抽出できた。課題③：ユネスコや世界の研究者が考える現地保存に対する考え方や遺跡保護の在り方を学び、今後も継続して世界の動向を注視する必要があることを確認した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当事業は、5 カ年計画で「てびき」の作成を進めている。1～2 年目に調査・資料収集を行い、3～4 年目に執筆と刊行、最終年度は、「てびき」のプロモーションを主な業務として行う。元年度は、25 年度から 29 年度まで当館が実施した文化庁委託事業「水中遺跡の保存活用に関する調査研究」を含めて調査・資料収集から執筆と刊行へと変わる節目の年度であった。当機構が実施した調査については十分な検証ができたが、水中遺跡が多種・多様性に富むため、より多くの有識者からの意見を吸い上げが必要であると感じられた。また、自治体の間では水中遺跡の調査と保護が喫緊の課題として捉えられていない現状があり、当事業により得られた知識や見解を広く伝えるために積極的な行動を起こす必要があるという認識が共有された。最終年度の活動案についても協議が行われた。

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特集展示 館蔵名品展「更紗 生命の花咲く布」に関する調査研究		
【事業概要】 インド更紗はインド国内で愛されただけではなく、特に前近代から近世まで、3大洋を渡り5大陸に供給されたグローバルな商品だった。更紗は各地をつなぐアイテムとして、文化交流の大きなうねりを今に伝えている。本展では当館がこれまで積極的に収集してきた更紗の名品を紹介するとともに、各地における更紗の受容のあり方をたどった。			
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	課長 原田あゆみ
【主な成果】			
(1) 展覧事業 会期は7月30日～10月20日で47件の更紗を展示した（前期、後期展示替えあり）。 1章「インドからはじまる」、2章「祖先伝来の聖なる布」、3章「海を越えた異文化のデザイン」、4章「江戸を魅了した更紗」、5章「ジャワに花開いた更紗―パティック」というテーマで、インド起源の更紗が各地に与えた影響について観覧者がたどれるように作品展示を行った。			
(2) 教育普及事業 更紗の魅力、歴史を伝えるために、以下の普及事業を実施した。 ・「茜染めワークショップ」実施日：8月10日、場所：当館研修室、展示室。 20人の一般参加者を迎え、インド更紗の特徴のひとつである茜の模様染めワークショップを行った。ワークショップ準備にあたっては、茜染のほか、藍染、蠟防染模様染の実施についても実験、検討した上で、実施時間等を鑑みて茜染ワークショップの実施と内容を決定した。 ・「ミュージアムトーク」日時：7月30日（講師：原田あゆみ）、9月3日（講師：桑原有寿子） ・聴覚障がい者向け手話トーク「更紗に触ろう！」日時：9月28日（講師：桑原有寿子）場所：展示室。 手話通訳に加え、ボランティア手話部会5人のサポートを得て、更紗の歴史や魅力の紹介、80人の参加者にはハンズオン資料を体験してもらった。なお、本事業は当館展示課が中心に元年度から始めた障がい者向けの取り組みのひとつである。 ・「九州国立博物館が貴賓館にやって来る！歴史講座 館蔵名品展 更紗 生命の花咲く布」日時：8月31日（講師：原田あゆみ）場所：旧福岡県公会堂貴賓館。外部向け講演会を実施。			
(3) 研究成果の発信 インド更紗とその広がりや文化交流の視点から捉え、調査研究を行った。その成果については図録『館蔵名品展 更紗 生命の花咲く布』としてまとめ、また巻頭論文「更紗をめぐる交流史」として発表した。論文では更紗の生産と流通、消費に関する諸相を取り上げ、シャム向け更紗の経由地を具体的に論じた。		「茜染めワークショップ」の様子	
【備考】 ・教育普及事業等検討回数：茜染めワークショップ3回（5月14日、7月31日、8月9日）、聴覚障がい者向け手話トーク5回（7月28日、8月10日、9月3日、9月19日、9月25日）			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	開館以来、文化交流を語るアイテムとして積極的に収集してきた更紗の名品を紹介することができた。特に更紗の生産と流通、消費に関する諸相を取り上げることで、当館らしい切り口で展示し、図録を通して普及した。また、関係各所の協力を得て、聴覚障がい者向け手話トークを実施し、今後の課題を検討する機会を得た。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業は、当館のテーマであるアジア諸地域、さらに世界の文化交流を物語る文化財についての展示及び研究のひとつである。前近代から近世までのインドの木綿をめぐる歴史を、展覧事業と研究成果の公表を通じて、広く一般に伝えることができた。今後も更紗に限らずグローバルなアイテムを通して文化交流に関する研究を継続していく予定である。

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特集展示 住友財団修復助成 30 年記念「文化財よ、永遠に」に関する調査研究		
【事業概要】 本事業は、元年度開催の特集展示「文化財よ、永遠に」に係る調査研究である。住友財団による修理助成が開始されて 30 年を迎えるにあたり、その助成金を得て修理が行われた作品の一部を展示公開し、一般の方々に修理の重要性を知ってもらう機会とした。			
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	資料登録室主任研究員 森實久美子
【主な成果】 (調査概要) 展覧会開催のため、住友財団の助成を得て修理が行われた作品のうち九州に所在する 29 件を選定し、出陳交渉および調査を行った。通常の作品調査に加え、修理報告書や所蔵者・修理業者からの聞き取りによって修理工程に関わる情報も積極的に収集した。 (展覧事業) 9 月 10 日から 11 月 4 日まで、住友財団の助成 30 年を記念する特集展示「文化財よ、永遠に」を開催した。九州に所在する絵画・彫刻・染織・考古・歴史資料など多分野にわたる 29 件の作品を展示した。そのうちには熊本地震によって被災した彫刻も含まれ、高い関心が集まった。 展覧会の主たるテーマである文化財修理について、観覧者の理解の助けとなるよう修理工程や修理前の状態を紹介するパネルを制作したほか、熊本地震で被災した彫刻の修理完成までを記録した映像を制作し会場で放映した。また、住友財団の助成実績をまとめたパネルも掲出し、その活動の一端を紹介した。 展示をより深く理解していただけるよう図録を制作した。作品の解説だけではなく、修理前の状態や修理工程の写真も多く掲載したほか、住友財団選考委員による分野ごとの修理概要も掲載した。 会期中には講演会やミュージアムトーク、ワークショップを通じて、成果の普及に努めた。修理所の一般公開、講演会を行ったほか、展示室においてミュージアムトークを行った。国宝修理装演師連盟に加盟する幸匠の修理技師の協力を得て、小学生対象に裏打ちや穴埋めを体験するワークショップを行った。そのほか、文化財行政を担う地方自治体の担当者に向けて、修理事業の構築方法や課題などを伝えるセミナーを開催した。 会期中にはNHK「日曜美術館」(10 月 6 日放映) など、新聞・テレビなどでたびたび取り上げられた。			
			
ワークショップの様子			
【備考】 調査回数：8 回 修理所公開：9 月 14 日 参加者 53 人 講演会：9 月 28 日 参加者 128 人 ミュージアムトーク：9 月 14 日 参加者 25 人、9 月 18 日 参加者 30 人 セミナー：10 月 4 日 参加者 16 人 ワークショップ：10 月 5 日 参加者 25 人			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本事業では一般にはあまり馴染みのない文化財修理をテーマとした展示を行い、普段とは異なる視点から作品をご覧いただいた。文化財の保存と活用が叫ばれながら、それに大きな役割を果たす修理の重要性があまり語られない、あるいは認知されにくい現状がある。しかしその一方で修理については一般の方の関心も高く、本事業で開催した特集展示「文化財よ、永遠に」は修理の意義を広く知ってもらう貴重な機会となった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画に沿って、作品の調査研究を経て展覧会を開催し、近年関心の高まっている文化財修理について、その重要性を発信することができた。本事業は、展覧事業計画「独創的なテーマ及び地域に密着したテーマで研究成果を公開する」を満たした。

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特集展示「版経東漸～対馬がつなぐ仏の教え～」に関する調査研究		
【事業概要】			
本事業は、元年度開催の特集展示「版経東漸～対馬がつなぐ仏の教え～」に係る調査研究である。科学研究費・基盤研究（B）「対馬に所在する中国・朝鮮伝来経典の総合的研究」（28年度～令和2年度）（研究代表者：京都府立大学教授・横内裕人）の最終年度にあたる元年度に、展覧会及び図録を通じて、本研究の成果をより広く一般に公開した。			
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	資料登録室研究員 松浦晃佑
【主な成果】			
(1) 資料調査			
科学研究費・基盤研究（B）「対馬に所在する中国・朝鮮伝来経典の総合的研究」に係る調査を継続的に行ってきた。元年度は、以下3回の調査を行った。まず、長崎県対馬市の妙光寺所蔵の対馬市指定有形文化財「大般若波羅蜜多経」597帖について、書誌データ収集と状態の記録撮影を行った（6月29日～7月2日、於：当館）。次に、この妙光寺所蔵「大般若波羅蜜多経」に付属する経箱全30合の赤外線撮影も行った（7月25日、於：当館）。最後に、金剛峯寺所蔵の重要文化財「高麗版大蔵経」と公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵の「磧砂版大蔵経」の調査を行った（9月11日～9月12日、於：当館）。			
(2) 展覧事業			
10月29日から12月22日まで、特集展示「版経東漸～対馬がつなぐ仏の教え～」を開催した。対馬に伝来した、中国や朝鮮半島で印刷された経典（版経）を展示した。対馬に所在する渡来版経のほか、かつては対馬に所在したが、現在は島外で保管されている渡来版経もあわせて紹介した。関係各所の協力のもと、対馬ゆかりの渡来版経が一堂に会した。			
展覧会の内容、上記基盤研究（B）の研究成果をより広く一般に公開するため、図録を制作した。簡易に、かつ読みやすさを考慮しながら、研究代表者、研究分担者、研究協力者が分担して作品解説とコラムを執筆した。			
図録だけではなく、講演会や会場内でのミュージアムトークを通じて、成果の普及に努めた。講演会は対馬市内（11月9日、於：峰地区公民館／11月10日、於：対馬市交流センター）と、当館で行った（11月17日）。ミュージアムトークは、11月30日と12月14日の2回開催した。1回目は「大切なお経を未来に伝えるために」と題して、対馬に所在する渡来版経の修復について解説した。2回目は「日本の人はお経コレクターだった？」と題して、小学生向けに解説を行った。			
【備考】			
・本プロジェクト責任者（松浦）は、科学研究費・基盤研究（B）「対馬に所在する中国・朝鮮伝来経典の総合的研究」（28年度～令和2年度）（研究代表者：京都府立大学教授・横内裕人）の研究分担者である。			
・調査回数：3回（6月29日～7月2日、7月25日、9月11日～9月12日）			
・講演会回数：3回（11月9日、11月10日、11月17日）			
・ミュージアムトーク回数：2回（11月30日、12月14日）			
・本展は、朝日新聞（11月20日朝刊）、長崎新聞（11月28日朝刊、12月6日朝刊）で取り上げられた。			



対馬市交流センターでの
講演会(11月10日)

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本事業は、科学研究費・基盤研究(B)「対馬に所在する中国・朝鮮伝来経典の総合的研究」(28年度～令和2年度)(研究代表者：京都府立大学教授・横内裕人)の研究成果に基づくものである。対馬ゆかりの渡来版経が一堂に会する機会は今までになかったが、本展においてそれが可能になった。展覧事業を通じて、研究成果をより広く、また効果的に発信できた。また、盗難や破損など対馬の文化財を取り巻く不安が残る状況のもと、対馬の渡来版経が持つ文化財の価値を多くの人々が認識できる機会となった。本展は研究者だけでなく、一般の来館者、特に対馬の人々の注目も集め、好評であった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本事業を通じて、アジアの印刷文化と文化交流を物語る渡来版経に関する研究成果、また渡来版経の文化財としての価値を発信することができた。本事業は、当館の基本方針「日本とアジア諸地域等との文化交流を中心とした文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行う」と、展覧事業計画「独創的なテーマ及び地域に密着したテーマで研究成果を公開する」を十分に満たした。 本事業の成果は、対馬市内に新たに開館する「対馬博物館(仮称)・対馬歴史研究センター(仮称)」(2年度開館予定)と共有し、研究事業の連携を図っていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特別展「出雲と大和」に関する調査研究		
【事業概要】 特別展「出雲と大和」の開催に係る事前の調査研究の推進と、課題整理・計画立案を効率的に進め、充実した展覧会を円滑に開催する。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課考古室長 品川欣也
【主な成果】 (1) 調査の概要 ・島根県と奈良県とともに、本展に関する出品作品の事前調査を効率的に行い、協議を繰り返しつつ、開催に向けての課題整理と条件整備を実施した。 (2) 調査の成果 ・島根県と奈良県の協力を得て、印象的な展示と会場づくりを行うことができた。 ・なかでも重要文化財 宇豆柱・心御柱、国宝 荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡出土青銅器、重要文化財メスリ山古墳超大形円筒埴輪や、国宝石上神宮伝来七支刀、重要文化財 浮彫薬師三尊像(石位寺蔵)・四天王像(萬福寺蔵)などの出品が実現し、各章の内容を充実させた。 (3) 島根県古代出雲歴史博物館及び奈良県(県庁・奈良県立橿原考古学研究所)とともに出品作品の事前調査を行うことで、作品の状態などを詳しく確認することができた。また、支持具などの展示方法についても検討を行い効果的な支持具を作成することができた。			
【備考】 ・元年度の出品交渉並びに事前調査 20回以上 (島根県出雲大社神祇殿・島根県出雲弥生の森博物館・奈良県石位寺・天理大学図書館など) ・島根県と奈良県関係書を含めた展示構成などの打ち合わせ 約20回			
 調査風景(荒神谷遺跡)  調査風景(準構造船)  展示風景(宇豆柱) ・新型コロナウイルス感染予防に伴う臨時休館のため、会期中途中で終了。			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	(1) 令和を迎え日本の歴史や文化への関心が高まっているなかで、本展は時宜を得たものであり来館者層の拡大を図ることができた。 (2) 島根県や奈良県の強力な後押しによって充実した内容の出品作品を集めて展示することで、従来にない組み合わせや比較が可能になり、新たな発想や着想を生むきっかけになった。 (3) 本展の準備作業によって島根県や奈良県関係者との学術交流を行うことによって、今後の共同研究や特別展の企画立案に役立った (4) 当館で行われた24年度特別展「出雲大社」や26年度特別展「日本国宝展」などの知見などを本展に活用し、業務の効率化を図った。 (5) 本展に合わせて新規撮影やX線CT撮影などを行い、今後の研究や教育普及を行うためのデータが蓄積できた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査や打ち合わせなどで行った検討を踏まえて、広報・展示・図録など本展にかかわるさまざまな事業にその成果を反映させた。中期計画の目標にそった有形文化財の保存と活用を、島根・奈良両県の協力を得て推進することができ、当館の博物館活動の幅広い展開に寄与するものとなった。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特別企画「奈良大和四寺のみほとけ」に関する調査研究		
【事業概要】 総合文化展の活性化を図るため、本館 11 室「彫刻」にて、奈良県東部に所在する、室生寺、長谷寺、岡寺、安倍文殊院の 4 箇寺の尊像・宝物を展示した。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	企画課長 浅見龍介
【主な成果】 (1) 調査の概要 ・6月17日 長谷寺難陀龍王立像、長谷寺赤精童子（雨宝童子）立像（以上、写真撮影） ・6月24日 岡寺菩薩半跏像、長谷寺十一面観音菩薩立像、長谷寺阿弥陀如来立像（以上、写真撮影） ・7月1日 長谷寺銅造十一面観音菩薩立像、岡寺天人文輓、室生寺十二神将立像酉神、室生寺十二神将立像巳神（以上、写真撮影） ・7月22日 室生寺釈迦如来坐像、岡寺義淵僧正坐像（以上、写真撮影） ・2年1月27日、2月10日 室生寺釈迦如来坐像（X線CT撮影） ・2年2月26日 室生寺十一面観音菩薩立像（X線CT撮影） (2) 調査の成果 ・写真撮影においては、高精細な画像データを得ることができた。X線CT撮影においては、対象像の詳細な構造や過去の修理と判断される箇所などの情報を得ることができた。 ・研究成果については、逐次、当館の研究誌などで報告を行う。			
			
5月30日 長谷寺での借用風景		展示会場風景（本館 11 室）	
【備考】 調査回数：7回 論文：総論1本、作品解説15件、寺院解説4件			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本企画は、館外から借用した作品を展示する特別展の性格を有しながらも、基本的に収蔵品と寄託品で構成される総合文化展（平常展）の展示室で開催し、総合文化展の活性化を促進することができた。約3か月の会期で総入場者数は約33万人を記録し、多くの来館者があった。 また、これまで高精細な画像が無かった作品の写真撮影や、重要作品のX線CT撮影を実施した。今後はこれらの資料をもとに研究を進め、逐次刊行物等によって紹介したい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	借用文化財に科学的手法を適切に用いて、学術的・芸術的な価値の究明とコンディションの分析等を行い、適切な保管・展示の環境維持や修理等の処置に資するという中期目標に沿った調査研究をすることができた。これらの調査研究で得た情報を、今後の展覧会企画や出版物のなかで広く発信していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	住友財団修復助成 30 年記念 特別企画「文化財よ、永遠に」に関する調査研究		
【事業概要】 当館で開催する特別展「文化財よ、永遠に」にむけて調査研究を推進し、展覧会やシンポジウムを開催して文化財修理の重要性を幅広く訴えかける。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	広報室長 丸山士郎
【主な成果】 (1) 調査の概要 ・展覧会の開催に向けて作品調査を推進し、本館で特別展「文化財よ、永遠に」を 10 月 1 日～12 月 1 日の期間で開催した。 ・展覧会にあわせてシンポジウム「文化財よ、永遠にー文化財修理の最前線」を開催した（参加者：261 名）。 (2) 調査の成果 ・本展は、泉屋博古館本館（京都）、分館（東京）、九州国立博物館でも同時期に同じテーマの展覧会を開催するもので、当館では彫刻作品を展示した。 ・彫刻作品の修理について理解を深めるため、展示室内に写真を伴った修理過程の解説を掲示するとともに、同様のリーフレットを作成し無料で配布した。 ・元は当館の所蔵品で、昭和 18 年にフランス極東学院と文化財交換して、現在、ベトナム国立歴史博物館が所蔵する阿弥陀如来像の里帰り展示をした。			
			
事前調査風景			
【備考】 調査回数：24 件について事前に調査を実施した。 論文：論文 3、コラム 1、修理に関する解説 6、作品解説 26 件			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	事前の作品調査を実施し、その成果を図録や会場の解説に活かすことができた。文化財修理という、博物館活動の柱の一つについて、展示を通して広く紹介することができた。主だった作品については、事前あるいは会期中に写真撮影をして研究資料の充実を図ることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	同一テーマの展覧会を、東京・京都・九州ではほぼ同時に開催することで、修理に対する理解を深め、中期計画に沿った文化財の保存と活用について訴えかけることができ、多くの来館者を得た。本展のテーマである文化財を守り、伝えることの重要性を紹介し、大きな社会的な関心と呼ぶことができた。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	御即位記念特別展「正倉院の世界―皇室がまもり伝えた美―」に関する調査研究		
【事業概要】 御即位記念特別展「正倉院の世界―皇室がまもり伝えた美―」の開催準備にあたって、出陳予定の作品を調査し、その成果を展示に反映する。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	企画課長 浅見龍介
【主な成果】 (1)調査の概要 ① 正倉院宝物について、「聖武天皇と光明皇后にゆかりのある宝物」「正倉院に伝わった染織品」「正倉院に伝わった香木」「正倉院の楽器」「正倉院宝物の保存活動」などの観点により調査を行った。 ② 当館の法隆寺献納宝物について、正倉院宝物との比較という観点で調査を行った。 (2)調査の成果 元年は天皇陛下の御即位があり、この御慶事を記念して、天皇の勅封によって厳重に保管されてきた正倉院宝物を紹介する展覧会を企画した。正倉院宝物は「シルクロードの終着点」ともいわれるほどに当時のアジア大陸の面影を留めていることから、世界的にも比類のない文化財として知られている。また、当館が管理する法隆寺献納宝物も、飛鳥・奈良時代の美術を代表するものであり、正倉院宝物と双璧をなす存在と見なされている。本展では、調査研究の成果を特別展「正倉院の世界―皇室がまもり伝えた美―」において反映し、両宝物が守り伝えられてきた歴史を振り返り、文化財保存への関心を高めるきっかけを提供した。			
			
正倉院正倉		特別展「正倉院の世界」会場風景	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	正倉院宝物と法隆寺献納宝物の、両宝物は、古代アジアにおける人々や文化の東西交流の実態をしめす世界的に貴重な文化財であり、両宝物を同時公開することは、古代の日本文化がもっていた国際性に対する理解を一層深める絶好の機会であり、このような展示は当館でしか行うことができない。本展では明治時代以降の正倉院宝物に関する保存・修理・調査・復元模造などの活動についても光を当て、研究者のみならず、一般市民が文化財保護に対する関心を高める契機になるものである。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	正倉院宝物と法隆寺献納宝物を同時に展示することで、研究者ばかりでなく、多くの来館者に対しても古代における日本文化の多様性を紹介すると同時に、宮内庁正倉院事務所による保存・修理・調査・復元模造などの活動についても光を当て、来館者が文化財保存に対する関心を深める機会となった。本展を通じ、中期計画の目標である文化財の保存と活用に大きく寄与するものとなった。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特別展「人、神、自然—ザ・アール・サーニ コレクションの名品が語る古代世界—」に関する調査研究		
【事業概要】 特別展「人、神、自然—ザ・アール・サーニ・コレクションの名品が語る古代世界—」の開催に向けて作品調査を推進すると同時に、展覧会の開催を通じて日本初公開のコレクションについて分かりやすく紹介する。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館情報課長 今井敦
【主な成果】 (1) 調査の概要 ・標記展覧会を、11月6日から2年2月9日まで東洋館3室で開催した。 ・出品予定作品124件の調査を、4月21日から4月27日まで、ロンドンにて行った。 ・図録を刊行し、日本初公開のコレクションを分かりやすく紹介した。 (2) 調査の成果 ・ロンドンで行った調査成果を、展覧会図録、会場解説に反映させた。 ・2回のギャラリートーク（11月12日「古代オリエントの工芸品」担当：小野塚拓造、12月10日「古代世界の工芸品の細部に迫る」担当：同前）で、成果の一部について発表した。 ・専用の演示具を必要とする作品が多かったため、安全で展示効果の高い陳列方法の検討ができ、展示に生かすことができた。			
 調査風景			
 会場風景			
【備考】 プロジェクトメンバー 今井敦（博物館情報課長兼情報資料室長）、小野塚拓造（列品管理課平常展調整室研究員）			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館の収蔵品や通常の展示体系になく、日本人にとってなじみの薄い作品が少なくなかったが、事前調査を十分に行うことにより、来館者にとってわかりやすい、図録の解説文や会場解説の翻訳に反映させることができた。また、日本初公開の作品が少なくなかったが、安全かつすぐれたデザインの展示を行うことができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画に沿って十分な事前調査を行うことにより、日本初公開のコレクションを紹介できたことは、来館者の理解を深めることにつながったとともに、世界の古代工芸に関する今後の研究の進展に大きく寄与すると考えられる。本展を通じて、当館の博物館活動の幅を広げ、展示の新規客層の掘り起こしや活性化に繋がる成果を得ることができ、中期計画の目標に大きく寄与するものとなった。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特別展「法隆寺金堂壁画と百済観音」に関する調査研究		
【事業概要】 法隆寺金堂火災を契機に文化財保護法が制定されて 70 年を機に、法隆寺金堂壁画の優れた模写や、焼損後に再現された現在の壁画、そして日本古代彫刻の最高傑作の一つである国宝・百済観音など金堂ゆかりの諸仏を紹介する展覧会を実施した。来館者に法隆寺金堂の美の世界を体感いただき、文化財を保護し継承することへの理解を促す。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部保存修復課保存修復室長 瀬谷愛
【主な成果】 (1) 調査概要 ・特別展に出陳予定の作品を調査、撮影した。調査機関は法隆寺、放光寺、大仙市、個人、奈良国立博物館。また当館所蔵の大型作品の調査、撮影を行った。 (2) 調査の結果得られた知見 ・出陳作品の状態や、安全な輸送梱包、百済観音の新規ケース製作のための有益な情報が得られ、展覧会の構成や解説、安全な輸送、会場製作のための準備に取り組むことができた。 ・凸版印刷の協力により金堂内部の精密な 3D 計測を行い、通常の調査では得難い知見を得ることができた。 ・図録掲載の東野治之氏論文「法隆寺壁画の模写と写真撮影」に基づく調査を行い、大正 4 年(1915)に発足した法隆寺壁画保存方法調査委員会の事業で大正 5 年(1916)に田中松太郎が撮影した写真に関連するガラス乾板、紙焼き写真を当館所蔵資料に見出した。 (3) 展覧会の実施(ただし、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止) ・展覧会名:「法隆寺金堂壁画と百済観音」 ・会期:2 年 3 月 13 日～5 月 10 日 ・会場:本館特別 4 室・5 室 ・出陳作品件数:23 件 (4) 図録の編集 ・館員の他、法隆寺金堂壁画保存活用委員会、有識者、出品者から論文、コラムの寄稿を受けた。出品作品全件と出品されない参考作品の図版、金堂の図解等を掲載する展覧会図録を編集した。 ・論文 5 件(彬子女王「大英博物館に所蔵された法隆寺」、有賀祥隆「法隆寺金堂壁画の表現技法について」、東野治之「法隆寺壁画の模写と写真撮影」、瀬谷愛「法隆寺金堂壁画と文化財保護」、三田覚之「百済観音像誕生の謎」) ・コラム 6 件(三田覚之「法隆寺金堂の世界観」「百済観音」という名前」、高橋一倫「鈴木空如の作法」、朝賀浩「法隆寺金堂壁画研究の今後」、建石徹「法隆寺金堂壁画 複製陶板(第一号壁)」、小俣英彦「現代におけるスーパークローン文化財の意義」) ・作品解説 20 件			
			
会場風景			
【備考】 ・調査回数:のべ 19 回。 ・プロジェクトメンバー:浅見龍介(学芸企画部企画課長)、三田覚之(学芸研究部調査研究課工芸室研究員) ・新型コロナウイルス感染予防に伴う臨時休館により、中止。			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	法隆寺金堂壁画の再評価だけでなく、文化財保護法制定の契機となった金堂火災、文化財保護と未来への継承、活用について、多くの国民に伝えるための調査研究を実施することができた。出品作品について事前調査を実施し、成果を図録や展示に活かすことができた。得られたデータは今後の研究に活かすことができる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画にそって調査や出品交渉を進めることによって、文化財保護の原点であり象徴でもある金堂壁画と関連作品について伝え、展覧会は中止となったが、これまで一堂に会することがなかった壁画模写を互いに比較する場としての展覧会の準備をできたことは、今度の調査研究と文化財保護の機運に大きく寄与しうる。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特別展「きもの KIMONO」に関する調査研究		
【事業概要】 特別展「KIMONO」は、800年以上を生き抜き、今なおあらたなファッション・シーンを繰り広げる「きもの」を、現代を生きる日本文化の象徴として展覧する、当館47年ぶりの染織の展覧会である。開催に際し、元年度は出品される作品の調査・研究を行い、新たな文化財の価値を見出すとともに、来館者にきもの歴史をわかりやすく理解できる展示を目指す。また、展示方法、図録の編集、講演会、広報のことなどについて共催者とともに検討した。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課工芸室長 小山弓弦葉
【主な成果】 (1)調査概要 ・当館所蔵品及び国内外に所蔵される染織及びきものが描かれた日本絵画を調査研究した。 ・共催者とともに、2年度の展覧会に向けて、展示方法、講演会、広報のことについて月に2～3度、打ち合わせを行った。 ・共催者とともに、図録の編集を行った。 (2)調査の結果得られた知見 ・脆弱で伝存する数が少ない染織文化財の新たな価値付けがなされた。 ・覧会事業計画や文化財の復元制作などを通して、それらの文化財の有効な活用にも寄与した。 ・展覧会では、200件以上の染織文化財・日本絵画を展示し、日本人にとって現在も「衣服」であり続ける「きもの」の歴史をわかりやすく紹介し、さらに、伝統衣装、民族衣装としての「きもの」の未来像について考える機会となるように展示計画を立てた。 (3)調査研究の成果 ・日本染織における専門の博物館で調査することによって、染織に関する有意義な知見を得ることができた。また、染織文化財の復元を製作することによって、「着付け体験」など、今後のワークショップに活かすことが可能となった。その成果は特別展「きもの KIMONO」展の展覧会事業、講演会、教育普及事業、広報などに有効に活用できる。 ・今回の調査・研究によって得られた知見を反映した図録を編集した。展覧会が開催される2年度に発行されることとなった。			
【備考】 特別展「きもの KIMONO」は、2年4月14日～6月7日まで開催の予定。			



国立歴史民俗博物館での出品作品調査

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	- 日本内外に所蔵される美術館・博物館や個人所蔵の染織コレクションを調査することによって、日本の伝統工芸である染織の美術的・民族学的な知識や情報を深めることができた。 - 当館が所蔵する染織文化財2件、絵画作品1件を元に、その復元品を制作することによって、教育普及事業である「着付け体験」などのワークショップにも有効に活用できることとなった。 - 本展の実施にあたり、他所蔵者との調査研究の可能性が広がった。染織文化財を守り、後世に伝えていくために、2年度以降も、相互の協力しながら、調査研究を深め、次の展覧会事業、あるいは、教育普及事業につながるよう、より充実した調査研究を目指したい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	- 当館においては、日本・東洋の伝統文化を紹介し、有形文化財を保護、活用ために、例年さまざまなテーマを設けて特別展事業を行っている。日本文化の特質である「工芸」に対する一般来館者のより深い理解を得るために、染織だけではなく、他分野の工芸展覧会についても計画を進めていきたい。 2年4月14日から開催される特別展「きもの KIMONO」の事業が、より充実した内容になるように、今後も共催者と協力しながら、展示計画、講演会、ワークショップ、広報などについて調査・研究を深めていきたい。 - 今後開催される「工芸」の展覧会に向けて、列品を精査し、来館者が満足すると同時に、列品の調査研究も充実するような計画を立て、実行したい。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1412A 7

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	「スポーツ・武道の歴史と文化展」に関する調査研究		
【事業概要】 2 年度開催予定「スポーツ・武道の歴史と文化展」の実施に向けた資料調査を行い、展覧会の開催計画を立案する。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課工芸室研究員 佐藤寛介
【主な成果】 (1) 調査の概要 ・秩父宮記念スポーツ博物館をはじめ、日本スポーツに関する展覧会や展示施設を視察し、情報収集を行った。 ・調査研究を踏まえて、出品リスト・レイアウトを策定し、図録・展示パネルの原稿執筆や会場造作の検討を行った。 (2) 調査の成果 ・秩父宮スポーツ博物館の協力を得て、出品資料の選定および調査を行った。 ・展覧会の事業計画を立案し、関係機関との協議をのべ 5 回行い、開催に向けての課題を洗い出し、条件整備と意思統一を図ることができた。  秩父宮記念スポーツ博物館での資料調査			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	東京オリンピック・パラリンピックと連携して開催される、日本では例の少ないスポーツをテーマとした展覧会の実施計画を策定し、実施に向けた条件整備を進めることができた。開催準備の一環として、出品リスト・展示レイアウトを策定し、図録・展示パネルの原稿執筆や会場造作の検討が行えたため、課題の洗い出しと条件整備を効率的に進めることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画が定めるところの有形文化財の展覧事業に係り、日本では例の少ないスポーツに関する文化財について、調査研究・収集保存・公開活用に向けた取り組みを行うことができた。また、展覧会を共同で主催する秩父宮記念スポーツ博物館との協働によって、調査研究体制の強化と効率化が図られ、当館の博物館活動の幅広い展開を行うことができた。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特別展「国宝 鳥獣戯画のすべて」に関する調査研究		
【事業概要】 特別展「国宝 鳥獣戯画のすべて」に関して事前調査・研究を行い、展覧会開催に向けての課題整理と計画立案を効率的に推進する。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室主任研究員 土屋貴裕
【主な成果】 (1)調査の概要 4月26日 高山寺にて重要文化財「明恵上人坐像」ほかの調査 5月8日 中之島香雪美術館にて国宝「鳥獣戯画」ほかの展示状況、会場グラフィック等の調査 5月27日～29日 京都国立博物館にて国宝「鳥獣戯画」の8K撮影 7月12日 高山寺聖教（寄託品）の調査、撮影 10月28日 高山寺にて重要文化財「明恵上人坐像」ほかの調査、撮影 10月30日 館蔵の鳥獣戯画模本の調査、撮影 (2)調査の成果 ・展覧会開催にあたって、出品作品の事前調査、撮影、及び会場施工の調査等を行うことができた。 ・本展は「国宝鳥獣戯画のすべて」、「断簡と模本—失われた場面の復原—」、「明恵上人と高山寺」の3章から構成され、30年度に完了した展覧会の中心となる国宝「鳥獣戯画」の調査研究に加えて、元年度は主に鳥獣戯画断簡や模本、そして高山寺関係作の調査研究を進めた。 ・寺外では27年ぶりの公開となる重要文化財「明恵上人坐像」に関しては、作品調査と並行して作品の状態点検、安全な輸送方法の検討などを行った。			
【備考】			



重要文化財「明恵上人坐像」の調査・撮影風景（高山寺）

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	標記展覧会の開催に向けて、出品予定作品の事前調査・撮影を推進し、会場の計画立案を効率的に進めるための課題整理を円滑に行うことができた。作品の状態点検をはじめとした事前調査を順調に推進することができ、展覧会の充実はもとより、作品の安全な輸送、展示を行うことができることが見込むことができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	出品する作品の調査・研究に関しては、元年度においておおむね完了の見込みである。特にオリンピック、パラリンピック開催時に実施する本展には、多くの来館者が見込まれるため、そのような中でも鑑賞にストレスが発生しない展示方法の工夫などを進め、中期計画に沿った文化財の保存と活用の実現に向けて大きな成果が得られた。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特別展「桃山 天下人の100年」に関する調査研究		
【事業概要】 2年10月6日から11月29日に開催予定の特別展において、室町時代末から江戸時代初期にかけての日本人の美意識の変化を、名品を通して検証し、展覧会として構成展示するための準備と調査研究を行う。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部長 田沢裕賀
【主な成果】 (1) 調査の概要 ・資料の所蔵先調査を効率的に推進し、作品の状態並びに輸送に対する事前調査をおこなった。 ・研究書、論文等により出品リストの絞り込みを行い、充実した展覧会の企画立案を進めることができた。 (2) 調査の成果 ・出品候補作品の調査により、近年まで所在不明だった作品の存在が確認できた。また、素材や技法、表現などにいくつかの再発見があり、新たな歴史的位置づけをはかる手がかりを得ることができた。 ・上記知見などを踏まえつつ所蔵者に出品交渉をおこない、会場構成や作品解説など、展覧会の実務的業務を行う準備を進める。			
【備考】			



調査風景



調査風景

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展覧会の開催に向けて、事前準備のための調査研究を推進し、作品の状態確認や展示計画の立案など、開催に向けての課題整理や条件整備を円滑に進めることができた。その中で、これまで知られてきた著名な作品についても、新しい解釈をおこなうことで、一定の学術的な評価を上げることができた。また、今までに知られてなかった作品を新たに位置づけるなど、大きな学術的な評価を上げることができ、充実した展覧会の準備作業を推進することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画にそって調査や出品交渉を進めることで、テーマに沿った多くの作品の出品許可を得ることができた。これまで、安土・桃山時代の名品中心主義の展覧会が多く行われてきたが、室町時代末から、江戸時代初期までの約100年の中で、作品を再検証し、変革の時代と捉えることによって、歴史的に見た日本人の美意識の変遷の中でのこの時代の特殊性を示すことができるような準備ができ、今後の時代感の再構築を促す研究に大きく寄与する展覧会となるような準備ができた。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究
プロジェクト名称	オ 特別展「流転 100 年 佐竹本三十六歌仙絵と王朝の美」ほか特別展に関する調査研究 (4) -①-2)
【事業概要】 特別展「流転 100 年 佐竹本三十六歌仙絵と王朝の美」(10 月 12 日～11 月 24 日) のため、散逸する佐竹本三十六歌仙絵各断簡の搜索・出品交渉をおこなった。出品が決定したものについては、図録等印刷物掲載のための新規撮影や、作品調査をおこなった。また、一部については先行集荷のうえ、館内の科学分析機器による詳細な調査を実施した。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	企画室研究員 井並林太郎
【主な成果】 (1) 佐竹本三十六歌仙絵が一般向けの展覧として最も多く集まったのは 1986 年の 20 件であったが、今回はこれをはるかにしのぐ 31 件が集結した。絵はもちろんのこと、分割によって付された各断簡の表具を一度に鑑賞することができるまたとない機会となった。 (2) 図録には各断簡の法量等データ・作品解説のほか、新規撮影を多く実施して表具を含む全図写真を掲載した。佐竹本三十六歌仙絵がこれだけの規模で集結する機会は将来数十年にわたって見込まれないことを考えると、この図録は展覧会時の基礎情報を後世に伝える貴重な研究文献になったといえる。 (3) 佐竹本三十六歌仙絵のうち、「小大君」(大和文華館蔵)・「藤原高光」(逸翁美術館蔵)・「坂上是則」(文化庁蔵)については、当館に設置された機器を利用して透過 X 線分析・蛍光 X 線調査を行い、顔料などに関する多くの新知見が得られた。また、その現場には NHK の撮影が入り、後日の番組放送によって博物館における文化財科学分析調査の実態と意義を広く発信することができた。	
 佐竹本の化学調査	
【備考】 展覧会出品数 全 137 件 (うち国宝 5 件、重要文化財 61 件)	

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	本展は佐竹本三十六歌仙絵が分割されてから 100 年という節目に開催したもので、広報への注力も奏功して多くの人々の関心と呼び、目標数 (8 万人) を大きく超える約 13 万 7000 人の来場者を迎えることができた。 100 年前の分割事件は 1980 年代に放映された NHK の番組で取り上げられ話題になったとはいえ、それから 30 年以上が経過し、ふたたび一般には知られない出来事となりはじめていた。このたびの展覧会では、この事件や各断簡の伝来をもういちど調査しなおして発信することで、文化財の保存や後世への伝達ということの意義や難しさを一般来場者が改めて考える契機を与えたといえる。また、佐竹本三十六歌仙絵を伝えてきた茶の湯文化の豊かさを知らしめることにも成功した。 さらに、佐竹本三十六歌仙絵それ自体の作品研究を進め、これに関連する書画の展示を行うことによって、その絵画史上／書道史上／和歌文学史上の高い価値を再認識することができた。各分野の研究者の関心も高く、今後佐竹本三十六歌仙絵を通した中世王朝文化の学際的な研究が進むことが期待される。また、改元直後の展覧会ということもあり、一般来場者が王朝文化への興味をさらに増す機会ともなったといえるが、王朝文化が息づく京都に位置する当館から研究成果を発信した意義もここに認められるだろう。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	中期計画に沿って、文化財の展覧事業と教育普及活動等に関連する調査研究を実施することができた。佐竹本三十六歌仙絵という所在さえ不明なものもある断簡についての情報収集や、科学分析機器の利用を含む作品調査を進め、さらにその成果を大々的に公開できたことは、絵画や和歌を中心とする今後の中世王朝文化研究に大きく資するものといえる。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 特別展「西国三十三所草創 1300 年記念 聖地をたずねて—西国三十三所の信仰と至宝—」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 西国三十三所草創 1300 年記念特別展「聖地をたずねて—西国三十三所の信仰と至宝—」(2 年 4 月 11 日～5 月 31 日)開催のため、西国三十三所の札所寺院が所蔵する文化財について、調査及び図録等印刷物に掲載するための写真撮影を行うとともに、関係各所への出品交渉を進める。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室長(兼列品管理室長)羽田聡
【主な成果】 (1)西国三十三所札所会の協力のもと、第 2 番札所紀三井寺や第 29 番札所松尾寺をはじめとする 11 箇寺において、とくに彫刻分野を中心に、出品予定作品に基づく調査及び写真撮影を行った。展覧会の実施にあたっては、展示はもとより、作品の状態に伴う安全な梱包と輸送が不可欠なため、これらに必要な情報を得ることできた。 (2)館外での調査及び写真撮影とあわせ、展覧会実施にかかる経費の節減、さらには博物館のアーカイブ充実のため、第 22 番札所総持寺や第 24 番札所中山寺など、可能な限り事前に作品集荷を行い、博物館内で調査及び写真撮影を実施した。 (3)成果の公開としての展覧会は、第 3 番札所粉河寺の「千手観音立像(裏観音)」や第 18 番札所頂法寺の「秘仏如意輪観音坐像」など寺外での公開実績がほとんどない作品も含まれるため、貴重な機会となる。これらの作品に関する詳細な情報は、展覧会にあわせて刊行される図版目録の作品解説に反映されているため、質の高い図版とあわせ、今後の研究に資することができる。また、展覧会会期中には、各作品担当者が本プロジェクトを通して得た知見を一般へ還元する講演とシンポジウムの開催を予定している。 (4)実作品の調査及び写真撮影と並行して、各作品に関連する著書や論文などの文献を収集し、図版目録の作品解説に参考文献として提示することで、より有効に利用者が活用できるようにした。			
			
寺外での公開が初となる「秘仏如意輪観音坐像」(頂法寺蔵)		図版目録の表紙(2 年 4 月 11 日刊行予定)	
【備考】 ・調査件数及び撮影カット数 38 件・約 150 カット ・成果の公開(展示) 2 年 4 月 11 日～5 月 31 日(予定) ・成果の公開(刊行) 『西国三十三所草創 1300 年記念 聖地をたずねて—西国三十三所の信仰と至宝—』図版目録 1 冊(2 年 4 月 11 日刊行予定) ・成果の公開(講演) 羽田聡「資料からみた西国三十三所」(2 年 4 月 18 日)ほか全 5 回予定 ・出品予定件数 171 件(うち国宝 12 件、重要文化財 39 件)			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	時間が限られているなかで、調査を中心に据え、出品交渉や写真撮影、安全な輸送方法の検討など、展覧会開催に係る一連の作業がスムーズに進行したことから、所期の目標は達成していると判断した。撮影によるアーカイブの充実や成果を含めた図書の刊行、講演やシンポジウムの開催、あるいはプロジェクトの実施を通して 33 箇寺との連携を深めるなど、ほかの博物館事業に及ぼす効果も判断の材料とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施し、コロナウィルスの影響により予断を許さない状況にあるが、2 年度に展覧会として開催する段階まで順調にきていることから、所期の目標を達成していると判断した。今回の展覧会は、近畿圏 2 府 5 県の 33 箇寺が関係しているため、奈良国立博物館とならび、関西における「ナショナルセンター」としての役割を当館が担っていくためにも、本プロジェクトの実施により築いた関係性を保存や修理までも視野に入れ、包括的に維持・継続することが必要である。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 特別展「御即位記念 第71回正倉院展」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 特別展「御即位記念 第71回正倉院展」の開催に当たり、円滑かつ安全に展覧会を遂行し、最新の成果を広く国民に周知するため、当該年度に出陳される宝物を含む宝物全般についての調査・研究、展示環境についての調査・研究、観覧環境についての調査・研究、その他宝物の適切な輸送方法など、多角的に研究を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 内藤栄
【主な成果】 (1) 宝物についての調査・研究 ・宮内庁正倉院事務所の協力を得て、一部の宝物や調書の閲覧を実施し、また出陳宝物の写真の提供を受け、会場の題箋やパネル、図録の解説に宝物に関する最新かつ正確なデータを反映させた。 ・上記成果は、図録に掲載される小論(「宝物寸描」)や公開講座、学術シンポジウム等にも反映させ、雑誌や新聞紙面におけるコメント、コラムとしても広く一般に発信した。 ・研究員全員が参加する宝物についての研究会を実施した。 (2) 展示環境についての調査・研究 ・宝物の展示環境の一層の改善を図っていくため、展覧会の会期中、温湿度データや塵埃のデータを収集し、分析した。 ・展覧会の会期前に、宮内庁正倉院事務所とともに宝物の展示環境に関する検討会を実施した。 また、会期後には、上記で収集した温湿度、塵埃データの検証を踏まえ、同事務所とともに今後の展示環境の向上を図るための検討会を実施した。 (3) 観覧環境についての調査・研究 ・来館者に快適な観覧環境を提供すべく、題箋・パネルの位置や大きさ、文面などについて検討し、また会期中にはアンケート調査を実施して来館者からの意見を収集した。 ・照明を担う外部専門家の意見を得ながら、宝物にとって安全で、かつ来館者に見やすい照明方法について検討した。 ・宝物にとって安全で、かつ来館者に見やすい展示を検討する検討会を、宮内庁正倉院事務所とともに行った。 (4) その他 ・宝物を安全に輸送するため、梱包方法及び輸送手段に関する検討会を、宮内庁正倉院事務所とともに行った。			
【備考】 ・宝物に関する事前調査 5回 ・宝物についての内部研究会 2回 ・公開講座 2回 清水健「正倉院に伝わる作り物をめぐってー仮山残欠を中心にー」(11月2日)ほか ・正倉院学術シンポジウム2019「即位と正倉院宝物」 1回 ・『御即位記念 第71回正倉院展』目録(日・英) 奈良国立博物館 10月25日 日本語篇所収／岩井共二「袈裟付木蘭染羅衣と偏衫」ほか			



図録表紙

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	元年度の年度計画については、次のとおり概ね達成することができた。まず、展覧会の円滑かつ安全な遂行に関しては、宝物の梱包・輸送・展示・保存環境について宮内庁正倉院事務所と協議を密に行い、また各研究員の経験の蓄積を活かすことで、一層の向上が図れた。次に、最新の成果を国民に周知することに関しては、研究員全員参加による研究会等を通じ、宝物の基礎情報や研究成果を正確かつ明快に発信するための検討が重ねられ、さらに公開講座や学術シンポジウムの開催、新聞紙面でのコラム執筆等により、積極的な情報発信が展開できた。御即位の祝賀ムードも与って、正倉院展への国民の関心が高まりを見せる中、一定の貢献を果たし得たものと考えられる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間においては、宝物についての調査・研究、観覧環境についての調査・研究を重点項目に据えている。宝物についての調査・研究は、正倉院展の開催に伴う宝物の実見や資料収集、宮内庁正倉院事務所による最新の研究を基礎に更新されており、図録、紀要、研究誌、講演等を通じて成果の普及に引き続き努めている。また、観覧環境の調査・研究についても、日々の業務の中で検討を重ね、年々の改善に繋がっている。今後は学術情報の公表の一層の充実を図り、また展示照明の改善で正倉院事務所との合意が形成できるよう、協議を続けていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 特別展「毘沙門天―北方鎮護のカミ―」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】令和2年(2020)2月4日から3月22日まで開催予定の特別展「毘沙門天―北方鎮護のカミ―」に出陳を予定する作品に関する調査研究を行い、その成果を展覧会図録や展覧会場におけるパネル、また公開講座の内容等に反映させる。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 岩田茂樹
【主な成果】 展覧会に出陳もしくは写真等による紹介を行う次の作品につき、調査を行うとともに写真撮影を実施した。 岩手・三熊野神社毘沙門堂：木造尼藍婆・毘藍婆坐像、山梨・放光寺：木造毘沙門天立像（以下、毘沙門天像は記載省略）、岐阜・岩滝山奉賛会、滋賀・高尾地藏堂、京都・慈心院、京都・泉屋博古館、京都・乙訓寺、京都・鞍馬寺、京都・清涼寺、京都・神童寺、京都・観音寺、京都・浄瑠璃寺、京都・個人、京都国立博物館、奈良・常光寺、奈良国立博物館（2軀）、香川・香西寺、愛媛・金竜寺			
 			
会場風景			
【備考】 調査回数 19回 調査点数 25点 論文 岩田茂樹「〈資料紹介〉愛媛・如法寺 木心乾漆毘沙門天立像」(『MUSEUM』676号、10月15日)			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査によって得られた知見を展覧会図録の論考や解説、また題箋に生かすことができ、また新規撮影した写真の多くを展覧会図録に掲載することができた。そのうち作品の側面や背面、部分等の写真はほとんどが初めて公開されたものである。このため本展覧会図録は毘沙門天に関する基礎的な学術研究書となった。展覧会は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から会期半ばで終了となり、予定されていた公開講座も中止となったため、調査の成果を講座に生かすことはできなかったが、2年度の夏季講座においてあらためて成果を発表する予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	有形文化財の展覧事業・教育普及活動に関連する調査研究として実施した毘沙門天に関する調査研究は、調査回数、調査作品点数ともに多数にのぼり、多くの知見を得ることができた。また、それを展覧会図録や題箋等に十分に反映させることができた。実施できなかった公開講座に代わる夏季講座での成果の発表により、教育普及活動にも充分資することができると考える。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 御大典記念特別展「よみがえる正倉院宝物—再現模造にみる天平の技—」に関する調査研究 (4)-①-2))		
【事業概要】 正倉院宝物模造製作の歴史や意義とともに、各模造作品に反映された原宝物の調査・研究成果や、伝統技術などについて紹介する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	主任研究員 中川あや
【主な成果】 (1) 出品作品・関連資料の調査 宮内庁正倉院事務所の協力を得て模造作品や模造製作関連資料の調査を7回実施した。また出陳作品の写真・情報の提供を受け、会場の題箋やパネル、図録の解説に最新かつ正確なデータを反映させた。加えて、東京文化財研究所売立目録デジタルアーカイブにより、近代の正倉院宝物模造品の流通に関する調査を行い、展覧会関連講座の内容に反映する予定である。 (2) 展示手法の調査・研究 作品にとって安全で、かつ来館者に見やすく訴求力のある展示に関する検討会を宮内庁正倉院事務所や学術協力者である九州国立博物館とともに行った。 (3) 出品作品の高精細画像データの蓄積 展覧会に出品される模造作品のうち、これまでに画像が不足していた明治時代製作の大刀を中心に新規写真撮影を行い、画像データベースの充実をはかった。			
			
模造 螺鈿紫檀五絃琵琶の模造関連資料調査		展覧会ポスター	
【備考】 刊行物 特別展図録『よみがえる正倉院宝物—再現模造にみる天平の美—』(2年4月17日刊行予定)			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特別展「よみがえる正倉院宝物—再現された天平の美—」に出陳予定の作品・資料について基礎調査を実施し、作品に関する最新の調査・研究成果を盛り込んだ展覧会を開催する素地が整った。また本展は正倉院宝物模造に特化した独自性の強い展覧会であり、正倉院展開催館として長年蓄積してきたデータ(展示手法、作品解説、会場構成など)を効果的に活用しながら順調に準備を進めることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	2年度春期開催の特別展の充実という目的に向け、一定の成果を上げることができた。また、前回の正倉院宝物模造展は20年前であり、その後、最新の調査・研究成果を反映して製作が進められた模造作品を紹介するにあたり、単なる作品紹介にとどまらない多角的な視点に基づく展覧内容の構築に向け、前進することができた。本展は、当館で今後開催予定の正倉院展の内容充実にも大きく貢献するものである。

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特別展「室町将軍一戦乱と美の足利十五代」に関する調査研究（(4) -①-2）		
【事業概要】 室町幕府の初代足利尊氏から15代義昭まで、歴代将軍の栄枯盛衰と個性ある魅力に迫りつつ、南北朝時代から戦国時代にわたる240年間の時代と文化について紹介する特別展（会期：7月13日～9月1日）の準備として調査研究を実施した。			
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	主任研究員 一瀬智
【主な成果】 (1) 調査研究 30年度までの調査研究成果や図録・文献等による情報を元に、特別展開催のための内容・構成を深化させた。 (2) 展覧事業 ・調査研究に基づいて作品件数134件、4章構成の特別展として結実させた。 ・展覧会図録（303頁、当館研究員による作品解説、コラム6編、論文3編収録）を作成した。論文は次のとおり。 一瀬智「室町将軍足利十五代の栄華と軌跡」 橋本雄（北海道大学准教授）「足利義満の「日本国王」冊封と勘合貿易の実像」 高岸輝（東京大学准教授）「室町将軍十五代の政治と美術—肖像・首府・国土—」 ・展示室では特に将軍会所における唐物による座敷飾りを実物資料によって復元展示し、寺外初の一斉公開となる京都・等持院所蔵の歴代将軍木像13軀を一堂に鑑賞できる空間で展示した。また実物大の「勘合」を復元し、日明貿易のシステムを解説する体験エリアを設けた。これらの展示効果は非常に高く、多くの来館者の好評を得た。 ・会期中に次の講演会・シンポジウムを実施した。 7月14日記念講演会 橋本雄（北海道大学准教授）「室町将軍家の東アジア外交」（参加者数：202人） 7月20日リレー講座 一瀬智「足利十五代—ムロマチックな男たち—」・末兼俊彦（京都国立博物館主任研究員）「名刀乱舞！足利将軍」（参加者数：230人） 8月3日記念講演会 呉座勇一（国際日本文化研究センター助教）「室町将軍の再評価—本当に弱かったのか？—」（参加者数：301人） 8月12日記念シンポジウム「京都・等持院 歴代足利将軍像の謎に迫る」（参加者数254人） 根立研介（京都大学教授）「室町時代肖像彫刻史における等持院像の位置づけ」 楠井隆志（展示課長）「等持院像の調査報告」 大田壮一郎（立命館大学准教授）「足利将軍家の伝事について—等持院・等持寺を中心に—」 高岸輝（東京大学准教授）「室町将軍の身体観—画像と彫像の比較分析—」 パネルディスカッション（コーディネーター：一瀬智） ・会期中の教育普及イベントでは、日明貿易のシステムを体験するワークショップを4回（7月19日、8月7日の各午前・午後）開催し、「勘合」が使用された意味と時代背景について、参加者の理解を深めた。なお両日とも午後の部は視覚障がい者を対象とした。 8月1日と15日には視覚障がい者を対象とする観覧ツアーを開催し、通常とは異なる解説やハンズオンの体験コーナーを設けて特別展を案内した。			
			
実物大の「勘合」の復元			
【備考】 ・新聞掲載（特集記事のみ）：公明新聞6月26日、西日本新聞7月12日朝刊・26日朝刊・8月6日朝刊、朝日新聞8月17日朝刊、読売新聞8月24日朝刊 ・NHK日曜美術館「よみがえる美の力～室町将軍の文化戦略～」(8月4日放送、8月11日再放送)にて特集			

実物大の「勘合」の復元

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本業務による特別展では、室町将軍が積極的に主導した、日本と東アジアとの交流、および公家文化や大陸文化を複合した新たな美の価値観の形成について、近年の研究蓄積を踏まえて紹介するとともに、15人の歴代将軍を切り口とすることで、室町時代の歴史と芸術文化に係る新たな展覧会を作り上げた。展示構成・空間、各種イベント、教育普及プログラム、いずれも好評を得て目標値（4万人）を大きく上回る来館者（85,356人）にお越しいただいた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画、および当館の基本方針「日本とアジア諸地域等との文化交流を中心とした文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行う」に沿って、作品を中心とする調査研究成果に基づいて特別展を開催した。研究蓄積が厚く、近年は社会的関心も高い室町時代・室町文化について、新たな視点による構成で、質の高い展示を実現することができた。

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	日中文化交流協定締結 40 周年記念 特別展「三国志」に関する調査研究		
【事業概要】 特別展「三国志」に関する調査研究。 これまで正史『三国志』、『晋書』など文献資料から研究が進められてきた三国志の歴史について、曹操高陵をはじめとする出土資料や、長崎の関帝信仰にかかる文化財に着目することで新たな光を当てようとする企画。10 月 1 日から 2 年 1 月 5 日にかけての当館における開催、並びに会期中に実施した関連展示、講演会などの様々な関連事業の準備を国内外の研究者と連携しながら進めた。日本でも広く親しまれている三国志に対する観覧者の認識をより豊かなものにしていただくことを目的とした。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室主任研究員 川村佳男
【主な成果】 ・三国志に関する情報収集を書籍、論文、面談などで随時行った。 ・調査研究の内容に基づき 7 章構成の展覧会を実現し、展覧会図録、会場掲出物、音声ガイド、作品目録などを製作。 ・記念講演会を当館ミュージアムホールにて 2 回実施した。 「ここまで分かった“リアル三国志” - 新発見の考古資料から読み解く -」（10 月 20 日）参加者：238 人 講師：川村佳男 特別記念講演会（12 月 14 日）参加者：306 人 「曹操高陵の考古学的発見と研究」講師：潘偉斌（河南省文物考古研究院第一研究室副主任） 「三国志の時代と卑弥呼の鏡」講師：辻田淳一郎（九州大学大学院人文科学研究院准教授） ・文化交流展示室（平常展）にて特別展「三国志」の関連展示を 3 件実施した。 「長崎の関帝信仰」（期間：11 月 12 日～12 月 22 日、担当：楠井隆志（展示課長）） 「重要文化財 三国志呉志第十二残巻」（期間：11 月 12 日～12 月 22 日、担当：松浦晃佑（文化財課研究員）） 「重要文化財 金銀錯嵌珠龍文鉄鏡」（期間：11 月 6 日～2 年 1 月 19 日、担当：小澤佳憲（展示課主任研究員）、川村佳男） ・学術交流会（非公開）を当館にて 2 回実施した。 「ユニバーサルミュージアムに関する日中學術交流会-特別展『三国志』での事例を踏まえて -」12 月 4 日、日本側 8 人（川村佳男、西島亜木子（研究員）、茂泉千尋（展示課非常勤職員）ほか）、中国側 5 人（劉寧（遼寧省博物館副館長）ほか）参加 「鉄鏡検討会」12 月 16 日、7 人（谷豊信（東京国立博物館特任研究員）、潘偉斌、辻田淳一郎ほか）参加 ・関連講演会を館内外で 11 回（記念講演会は含まない）実施した。 ・その他、当館で実施した次の関連イベントに出演し、特別展「三国志」の案内役を務めた。 「びじゅチューン！なりきり美術館&三国志 コンサート」10 月 14 日 「きゅーはくミュージアムコンサート 中国悠久の調べ」11 月 9 日 「ナイトミュージアム 英雄（ヒーロー）現る!!」11 月 22 日、12 月 14 日 「夜な夜な三国志」11 月 23 日 「視覚に障がいのある方を対象とした特別展『三国志』観覧ツアー」12 月 5 日、12 月 11 日			



鉄鏡検討会の様子



鉄鏡検討会の様子

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中国で曹操高陵など三国志にかかる重要な考古学的発見と発掘が21世紀に入って相次いだことで、本展は開催の機運の熟した恰好のタイミングで実施することができた。東京国立博物館からの巡回ではあったが、展示の方法や掲出物の内容を見直し、全作品解説を多言語化するなど工夫を加えた。また、「長崎の関帝信仰」など九州に立地する国立博物館ならではの関連展示や、三国志と魏志倭人伝との関連を重視した「三国志の時代と卑弥呼の鏡」をはじめとする講演会や関連イベントを充実させることで、来館者のニーズに即した高い満足度を得ることができた。親子連れ、外国人、視覚・聴覚障がい者など多様な来館者に広く開かれた展覧会を実現することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画に基づき本調査研究を行った。三国志の歴史展開に即しながらも、魏・蜀・呉それぞれの文化や政策の違いなどこれまでに出土した考古学資料だからこそ迫ることのできる要素を盛りこんだ。同時に、曹操や朱然など具体的な歴史人物と可能な限り関連付けながら展示を構成することで、単なる考古学の展覧会に終わらせることなく、既存の三国志ファンにも歓迎される内容となった。日中文化交流協定40周年の節目に当たる元年に、三国志を通した日中両国の文化交流をいっそう促進できる展覧会を実施した今日的な意義は大きかった。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 各施設と協力して、レプリカやVR等先端技術を使った、文化財の活用についての調査・研究		
【事業概要】 文化財に親しむ機会の拡大を図ることを目的として、文化財のレプリカやVR等の先端技術及び、文化財の活用事例についての調査・研究を行った。それらの知見をもとに体験型展示等の活用事業を実施し、成果を一般に広く公開するとともに、その効果について検証した。			
【担当部課】	本部文化財活用センター	【プロジェクト責任者】	副センター長 小林牧
【主な成果】 (1)レプリカ制作やデジタルコンテンツ制作に関して優れた技術を持つ、企業・機関等や、それらを使ったコンテンツの公開、活用を行っている国内外の博物館・美術館の視察・インタビューを行った。また、その成果を広く普及するため、公開シンポジウム「複製がひらく文化財の未来」を開催し、報告書を刊行した。 (2)各施設と連携し、レプリカやデジタル技術を活用した体験型展示の実施や教育プログラムの開発・実施を行い、アンケートによる体験者への調査を行った。 (3)キャノン株式会社、凸版印刷株式会社との連携による共同研究プロジェクトを継続して実施した。シャープ株式会社との連携により、「8Kモニターを用いた文化財の活用方法の開発に関する共同研究プロジェクト」を締結した。			
【備考】 (1)主な調査先／株式会社 便利堂、株式会社 大入、ソニー株式会社、ICOM 京都大会、日本科学未来館、(リンツ)アルスエレクトロニカセンター、ウィーン美術史美術館、V&A ダンディー分館、(グラスゴー)ケルビングローブ美術館・博物館ほか(小林牧、松嶋雅人、小島有紀子、西木政統、高木結美、松沼穂積、救仁郷秀明、高橋美奈子、曾田めぐみ) ・公開シンポジウム「複製がひらく文化財の未来」(11月23日、東京国立博物館平成館大講堂) 発表者：松嶋雅人(文化財活用センター企画課長)、河内 智之(和歌山県立博物館主任学芸員)、大杉 栄嗣(大塚オーミ陶業株式会社代表取締役社長)、山口 晃(画家) (2)アンケート調査実施事業／8Kで文化財「国宝 聖徳太子絵伝」2019(10月29日～11月24日)、ぶんかつアウトリーチプログラム(元年度全10回実施)、「体感!日本の伝統芸能ー歌舞伎・文楽・能楽・雅楽・組踊の世界ー」エントランス展示(3月10日※～5月24日)(※新型コロナウイルスの影響により公開を延期) (3)キャノン株式会社との共同研究により制作した「風神雷神図屏風」(尾形光琳筆)高精細複製、シャープ株式会社との共同研究により制作した「8Kインタラクティブ・ミュージアム」、NHK エデュケーショナルと制作した「8Kで文化財 聖徳太子絵伝」をICOM 京都大会に出展(9月2～4日) ○そのほか発表等 ・「新しい鑑賞体験をデザインする」小林牧(7月19日 一般財団法人デジタル文化財創出機構 シンポジウム「進化する複製の未来」)			



シンポジウム「複製がひらく文化財の未来」開催の様子



シンポジウム「複製がひらく文化財の未来」開催の様子

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30年度に引き続き、文化財に親しむ機会の拡大を目的として、国内外における先進事例の調査・研究を行い、各施設や企業等との連携を強化しながら、文化財の新たな鑑賞方法の開発を推進した。これらによって得た知見をもとに、体験型展示の企画・運営、教育プログラムの提供を行うことで、成果を広く公開するとともに、シンポジウムの開催により、研究課題に関して一般市民への普及に貢献した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を着実に推進した。元年度は、各施設や企業等とも連携しながら、文化財に親しむ手法の開発に関する研究を重点的に行うとともに、展示やシンポジウムの開催等においてその成果を広く公開した。2年度も継続してこれらを実施し、調査・研究データの蓄積に努めたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	博物館環境デザインに関する調査研究		
【事業概要】 当館における文化財の展示／観覧環境のデザインについて調査・研究し、今後の展示／観覧環境のデザイン向上を目的として実施する。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	デザイン室長 矢野賀一
【主な成果】 ・「東京国立博物館本館 13 室展示室改修」、「博物館に初もうで」「大和四寺のみほとけ」「文化財よ永遠に」「博物館でアジアの旅」「日本のよろい」「聖徳太子絵伝」の展示デザイン、「法隆寺百済観音像展示ケースデザイン」「聖林寺十一面観音像展示ケースデザイン監修」を行った。 ・総合文化展示キャプション、解説のフォーマットデザインを行った。 ・本館観覧用ソファのレイアウトデザインを行った。 ・「大和四寺のみほとけ」「聖徳太子絵伝」「敦煌」ポスター・チラシのデザインを行った。 ・特別展用バナー、総合文化展用大型バナーのデザインを行った。			
  			
【備考】 ・他館のデザイン調査：これまでの国内外の博物館・美術館でのデザインを調査し、元年度においては特別展及び総合文化展示の展示デザインのための参考とした。 ・調査先／蘇州博物館、MIHO MUSEUM、富岡製紙場、京都市京セラ美術館、佐川美術館、福岡市美術館、郡山美術館、東洋陶磁美術館、秋田県立美術館、国立歴史博物館、香雪美術館、バンコク国立博物館、ブレラ絵画館、大英博物館、V&A MUSEUM、ロンドンデザインミュージアム、ロンドンナショナルギャラリー、バイエルン州立エジプト美術収集館。			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	目標を達成している。国内外の美術博物館デザインの最新事例を調査し、総合文化展示及び特別展への展開がなされている。2年度は引き続き国内外の美術博物館デザインの調査を行う。また最新の情報技術など本館の総合文化展示や展示室のスマート化などへ展開できるよう調査研究を進める。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	金工・刀剣・陶磁・彫刻作品を展示するための高透過低反射合せガラスや小型LED照明器具を用い、展示作業の安全性に配慮した展示ケースをデザインし観覧環境の向上につながった。 2年度は展示室のスマート化の調査研究及び引き続き本館リニューアル、特別展、特別公開の展示デザインを進める予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 博物館教育に関する調査研究（(4)-①-3）		
【事業概要】 来館者の鑑賞体験を豊かにすることを目的とした、博物館教育の理論と実践に関する調査研究を、教育普及事業の実践、参加者に対するアンケート、学校教員との研究会を通して行った。			
【担当部課】	学芸企画部博物館教育課	【プロジェクト責任者】	博物館教育課長 伊藤信二
【主な成果】 1)各種ワークショップ、スクールプログラム等を通して、来館者の多様なニーズに沿ったプログラムの開発とその運営に関する研究を行った。ワークショップ「トーハク劇場」では、30年度開発した、飛鳥時代を舞台とした法隆寺宝物館でのプログラムを元年度も2回実施し、低年齢層を対象としたプログラムの研究と実践を重ねるとともに、手応えを実感した。 2)海外からの来館者を主な対象とし、日本文化体験プログラムを継続して実施した。元年度は甲冑をテーマとし、特別2室で実施した特集の展示「日本のよろい！」（7月17日～9月23日）にあわせて、特別4室に体験コーナーを設置し、実際に着ることのできる甲冑レプリカを用いた甲冑着付け体験やハンズオンコーナーを設置した（7月17日～9月23日）。 また30年度と同様に書体験も実施した（10月8日～10月20日）。 3)障がい者に向けたプログラムの開発を目指した調査・研究を継続して行い、特に聴覚障がい者に向けて試験運用したUDトーク（音声認識ソフトによるコミュニケーション支援アプリ）を講演会、ギャラリートークにおいて本格実施した。 4)他館との連携事業として、上野動物園、国立科学博物館との国際博物館の日記念ツアー「ツノのある動物」（5月12日）並びに関連展示、親と子のギャラリー「サルひろば」（4月16日～5月26日）を実施した。 5)東京都社会科教員を対象とした研修会（10月3日）を行い、意見交換を行った。 6)東京藝術大学との連携事業として、東京藝術大学の学生によるギャラリートークを行った。 7)ボランティア組織のマネジメント及びボランティアによる事業の開発等について調査・研究を行い、外国人対応をテーマとした研修を実施した。			
			
甲冑着用体験			
【備考】調査 1)ワークショップ等における参加者アンケート調査 6回、教員研修会参加者アンケート調査 3回 2)ICOM 京都大会（9月2日～9月4日）に参加した（鈴木みどり、藤田千織、井出浩正、川岸瀬里、阿部楓子、永田香織、中村麻由美、永田香織）			



甲冑着用体験

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	様々な教育事業の実践や、他館との交流・連携事業を通じて、博物館教育についての研究を実施した。元年度は外国人を主な対象としたもの、有料のプログラム、聴覚障がい者に向けてのUDトーク、ボランティアの外国人対応など、新たな対象や多様なニーズに対応するため開発した教育プログラムの実践・検証を行うことができた。またICOM京都大会への参加は、国内の美術館博物館はもとより諸外国の博物館美術館における現況や動向を知るうえで大きな機会となった。 2年度は、3年度に東京オリンピック・パラリンピックが開催されることもあり、これを好機ととらえ、日本国内のみならず諸外国から認知と人気を得るためのプログラムの更なる開発と博物館教育の発展に寄与する調査研究の推進を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今中期では、より幅広い来館者に向けた鑑賞支援プログラムの調査・研究と実践を目指している。 未就学児を対象としたキッズデーなど、子どもを対象とした事業、障がい者を対象とした事業の調査・研究は、28年度から継続して行っている。元年度は、外国人を対象とした事業に対応したプログラムを30年度から検証的に継承し、手応えを得ることができた。こうした取り組みは、3年度のオリンピック・パラリンピック後にもものこるものとして位置付け、しっかりと調査・研究のもと、実践につなげることが重要である。他館の調査やプログラム参加者のアンケート調査なども、継続して行いたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	凸版印刷と共同で実施するミュージアムシアターにおけるコンテンツの開発に関する調査研究		
【事業概要】 館蔵文化財のデジタルアーカイブを活用した、文化財の新たな公開・鑑賞手法を、凸版印刷株式会社と共同で研究する。			
【担当部課】	学芸企画部博物館情報課	【プロジェクト責任者】	博物館情報課長 今井敦
【主な成果】 ・丸山（土）室長が監修した新作コンテンツ「空海 祈りの形」を、特別展「国宝 東寺—空海と仏像曼荼羅」の会期に合わせて公開した。 ・酒井主任研究員、佐藤研究員の監修により、新作コンテンツ「VR 刀剣」を制作し、実物展示の期間に合わせて公開した。 ・猪熊室長、三田研究員の監修により、新作コンテンツ「正倉院一時を超える想い」を制作し、特別展「正倉院の世界—皇室がまもり伝えた美—」の会期に合わせて公開した。 ・法隆寺金堂内部・西院伽藍の高精細テクスチャー撮影および立体形状計測を行い、瀬谷室長、三田研究員の監修により、新作コンテンツ「国宝金堂—聖徳太子のこころ」を制作し、特別展「法隆寺金堂壁画と百済観音」の会期に合わせて公開した。 ・長谷川等伯と「松林図屏風」をテーマとしたコンテンツ開発を視野に入れて、松林図屏風の高精細デジタルアーカイブ撮影、質感取得に必要な斜光線撮影、赤外線撮影を行った。			
【備考】			
			
法隆寺における調査風景		打合せの様子	

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	・展示と連動したコンテンツを公開することができ、所蔵品のデジタルアーカイブ蓄積の有用性が再確認できた。 ・「空海 祈りのかたち」は、歴代最高の21,789名の来場者があった。「VR刀剣」は、SNSと連動した多くのリピーターを含む16,975名の来場者があり、とくに若い女性、外国人から好評であった。デジタルデータを利用した新たな鑑賞手法の有用性が立証された。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・デジタルアーカイブのデータ取得に関する調査研究については、新たなデータ取得手法の着手を含め、着実な成果をあげている。 ・新規データの取得による新作コンテンツの開発により、集客力のあるコンテンツとして、継続的に公開を行うことができています。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	エ ICTを利用した博物館見学ガイドの開発に関する調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】 来館者の鑑賞体験を深めることを目的とした日英2ヶ国語による鑑賞支援アプリ「トーハクナビ」のユーザー動向解析を用い、より豊かな鑑賞体験の創造に関する調査研究を行った。また、児童生徒のための鑑賞支援アプリ「学校版 トーハクナビ」のユーザー動向解析を用い、その活用・改善に関わる調査研究を行った。			
【担当部課】	学芸企画部博物館教育課	【プロジェクト責任者】	博物館教育課長 伊藤信二
【主な成果】 1)スマートフォンによる公式ガイドアプリ「トーハクナビ」(日英2か国語対応)を継続して配信した。 2)29年1月より継続して、来館者サービスの一環として、「トーハクナビ」をインストールした端末の貸し出しサービスを行い、その結果、アプリのアクセス数を大きく伸ばすことができた。 3)27年4月より継続して「トーハクナビ」のユーザーログを集積・解析。来館者の鑑賞体験を深めるための情報の在り方と発信方法、的確なシステムについて、調査・研究を行い、報告書を作成した。 4)学校団体で来館する児童・生徒を対象としたスクールプログラムの一環として、タブレット端末によるアプリ「学校版トーハクナビ」(中学生・高校生対象)の運用を継続した。児童生徒へのアンケート調査およびログの集積を行い、報告書を作成した。 5)ICTを利用した博物館ガイドについて、他館への情報提供や意見交換を行った。 6)共同研究プロジェクトとして、電通国際情報サービス(ISID)とクウジットの協力を得た。			
			
		鑑賞支援アプリ「トーハクナビ」トップ画面 (英語版)	
【備考】 報告書「学校版トーハクナビ」利用者の動向 30年4月、31年3月作成 2)電通国際情報サービス(ISID)とクウジットとの研究会を行った(1回) 3)元年度末で共同研究が終了するため、2年4月をめどにこれまでの事業を総括を行う予定。			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	1) アプリ「トーハクナビ」によるサービスを提供しつつ、ユーザーの動向についてのデータを集積することができた。 2) 「学校版トーハクナビ」でも、生徒たちの使用状況についてデータを集積することができた。 3) これらの実績とデータをもとに、運営方法等の改善を試み、オリンピック・パラリンピックに向けた新しい鑑賞ガイドシステムの開発を目指して、具体的な検討を開始した。 4) 現在の課題は、日英中韓による情報提供、ならびに展示替えに即した個別の作品解説の提供である。(当館は、展示作品数が膨大かつ頻繁に展示替えされるため、「トーハクナビ」では本館、平成館考古展示室に限って個別作品解説を提供している)。 5) 元年度は、これらの課題を克服すべく、作品鑑賞ガイドシステムの構築を進めている。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	3年に開催予定のオリンピック・パラリンピック開催にむけて、主に訪日外国人を対象とした鑑賞支援プログラムの充実を目指しているが、元年度は30年度から継続して現行のシステムのユーザー動向解析や他館のシステム等の情報収集を行い、それをもとに今後のシステムのあり方について検討することができた。また現行トーハクナビとは別に、2年度より運用するための新しい作品鑑賞ガイドシステムの構築を進めている。 また、学校団体での来館者に対しては、「学校版トーハクナビ」の提供を継続して行いたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 博物館教育及びボランティアに関する調査研究 ((4) -①-3))		
【事業概要】本研究では、第一に、館内で活動するボランティア「京博ナビゲーター」を実例に、対話とハンズ・オン教材を組み合わせた博物館教育の実践と研究を行った。第二に、「文化財に親しむ授業」で講師を務める大学生及び大学院生のボランティア「文化財ソムリエ」の育成に関する実践と研究を行った。第三に、これまでの研究成果を活用し、子どもや海外からの来館者を対象とした教育的な特集展示を企画立案し、実施した。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長 永島明子
【主な成果】			
1)京博ナビゲーターの活動			
・京博ナビゲーター201 人の育成及び運営にかかる調査研究。			
・ミュージアム・カート内の解説シートの多言語対応。			
・特別展関連ワークショップ「一遍さんを探そう！～さわって楽しむ絵巻物～」の実践と研究。			
・特別展関連ワークショップ「顔を描こう！～和歌で感じる歌仙のころ～」の実践と研究。			
・外部の調査員と共同で第 1 期京博ナビゲーター（29 年度任期満了）に向けたアンケートの分析調査。			
・京博ナビゲーターの活動を含む教育普及活動についての視察の受け入れ及び意見交換。（2 回・台湾・台北市立建国高級中学、愛媛県・新居浜市教育委員会）			
2)文化財に親しむ授業			
・文化財ソムリエ 21 人の育成にかかる調査研究。（スクーリング・20 回）			
・「文化財に親しむ授業」（7 回・683 人）、「文化財に親しむ授業スペシャル！」（4 回・84 人）の実践と研究。			
・「記者体験in京都国立博物館」（京都市教育委員会主催）(1回・134人)の実践と研究。			
・複製文化財の活用を希望する学校教員との交流会の企画・実施と研究交流。			
・交流会に出席した教員による複製を活用した授業の支援と分析。			
・他機関が実施する鑑賞教育の見学（4 回・醍醐中学校、文化財活用センター）。			
3)研究成果を反映した特集展示「赤ってじつはどんな色？」（7 月 2 日～8 月 12 日）の企画・実施。			
・展示の理解の補助を目的とした 4 言語のワークシートの作成。			
・教育室研究員によるギャラリートーク及び関連土曜講座の実施。			
・ミュージアム・カートへの新教材の追加。			
【備考】			
本研究を踏まえた事業の実績については、処理番号 1311B1、1311B2、1312B も参照。			
1)科学研究費助成事業「対話とハンズ・オン教材を組み合わせた博物館教育の実践と研究」5 年計画（研究代表者の育児休業のため 1 年延長）の 4 年目			
2)文化財ソムリエに向けたスクーリングでは、絵画担当研究員による作品の勉強会や、岩絵の具や墨などを実際に扱う体験を実施した。それにより、文化財ソムリエは作品に関する専門的な知識をふまえ、授業案を作成することができた。			



ワークショップの様子



ワークショップの様子

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	京博ナビゲーターについては、来館者アンケートなどから、その活動が来館者の主体的な興味・関心を引き出し、博物館における効果的な教育普及活動として機能していることが確認できた。また、第1期京博ナビゲーターに向けたアンケートの分析調査を30年度に引き続き行い、論文を執筆した（2年5月刊行予定）。また元年度は、30年度の活動分析を踏まえ、あらたに特集展示のワークシートと連動した取り組みを実践した。 文化財ソムリエ育成については、スクーリングなどを通じて多様なプログラムを立案・実践することにより、文化財ソムリエの主体的な参加を促し、多様で質の高い鑑賞授業を行った。元年度はICOM京都大会に関連したイベント「文化財に親しむ授業スペシャル！」や「記者体験in京都国立博物館」を実施した。 海外を含めた外部機関から視察もあり、当館の教育普及活動が国内外の機関に周知・評価を得られていることが確認できた。今後もこれらの活動を継続して行い、それぞれの質の向上に努めたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究の中で、30年度に引き続き、中期計画を超える教育普及を目的とした特集展示を実施することができた。また、継続的に行っている京博ナビゲーターや文化財ソムリエに関する調査研究及びその活動も、年々質の向上が認められる。 中期計画の3年目を迎える2年度は、これまでの成果を振り返り、今後の博物館教育の展開の方向性を見据えた調査研究を進めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 歴史、伝統文化の教育普及に資するための調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】 奈良を中心とした寺社の歴史や伝統行事に関する情報を集め、「世界遺産学習」をはじめとする教育プログラムに反映させられるか検討を行い、重要度の高い情報、適切な内容を発信する仕組みを考える。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長 谷口耕生
【主な成果】 (1) 奈良市教育委員会との連携事業による世界遺産学習の一環として、奈良市在住の小学生の親子を対象とする教育プログラムの実施に向けて検討を重ね、仏像館見学や仏像クイズを通じて地域の文化遺産について学ぶ「親子で学ぼう 奈良の仏像」を7月24日～25日に実施した。 (2) 奈良教育大学・奈良市教育委員会とともに立ち上げた ESD（持続的開発のため教育）コンソーシアム文化遺産教育ワーキンググループにおいて、博物館施設を活用して地域社会への関心を高めるための方策について協議を重ねた。 (3) わくわくびじゅつギャラリー「いのりの世界のどうぶつえん」関連の親子ワークショップ「とびだす！うごく！いのりの世界のどうぶつ」を奈良教育大学との連携事業として開催し(8月2日)、小学生の親子が飛び出す絵本づくりを通じて、仏教美術に登場する動物をテーマとする展覧会への理解を深めることができた。			
【備考】 ・世界遺産学習や学校プログラムのために来館した学校団体 34 校（奈良市世界遺産学習 24 校、その他 10 校） ※30 年度実績：38 校（奈良市世界遺産学習 26 校、その他 12 校）			



親子ワークショップ「とびだす！うごく！いのりの世界のどうぶつ」



親子ワークショップ「とびだす! うごく! いのりの世界のどうぶつ」

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館における教育普及プログラムの重要な柱である「世界遺産学習」については、奈良教育大学・奈良市教育委員会とともに立ち上げたESDワーキング等で内容を随時検証しながらその継続性と質の確保に努めるとともに、実施対象を全国から来館する小中高校生に拡大した結果、合計34の学校団体(奈良市24校/その他10校)を受け入れ、前年度並みの実績を達成した。さらに親子ワークショップ「とびだす! うごく! いのりの世界のどうぶつ」や親子対象の教育プログラム「親子で学ぼう 奈良の仏像」を実施し、「世界遺産学習」の地域学習・家庭学習への浸透というESDワーキングが提唱する理念を実践することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	仏像を主なテーマとしながら奈良の歴史、伝統文化に関する教育普及事業として継続的に行ってきた「世界遺産学習」は、全国から来館する小中校生に対象を拡大するなど、一定の成果を収めている。その内容の充実・向上に向けて継続的な検討を行っており、親子対象の教育プログラム「親子で学ぼう 奈良の仏像」における現地見学実施方法の改善等について奈良市教育委員会と協議を重ねた。今後も「世界遺産学習」を地域学習・家庭学習に普及させることを目的として、地元の教育機関と連携しながら博物館の展示内容に密着した小中学生の親子を対象とする教育プログラム、ワークショップの一層の充実を図っていきたい

【書式B】

施設名 九州国立博物館

処理番号 1413Dア

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	NHKと共同で実施する高精細画像を活用したスーパーハイビジョンシアターにおけるコンテンツの開発に関する調査研究（(4) -①-3）		
【事業概要】 当館では開館以来、世界で唯一の常設設備として 8K スーパーハイビジョンシステムによる映像を公開してきた。4K の 4 倍の密度を有する 8K が持つ臨場感あふれる優れた映像美を生かした、魅力的なコンテンツ作りを行う。多言語化などの新しいシステムの調査研究を推進する。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	課長 白井克也
【主な成果】 NHK エンジニアリングより、遠からず機器の部品供給が不可能になるため、大規模な機器の更新などを提案された。これをきっかけに、スーパーハイビジョンシアターを、機器更新の上で存続するか、あるいはまったく新たなプログラムの場を創出するか、館内での検討を行った。 2 年 1 月 28 日（火）に第 1 回検討会を行い、設備の現状や費用対効果などを検討し、現状のスーパーハイビジョンシアターを継続することは困難であること、跡地利用の具体案が必要であることを確認した。 2 年 3 月 5 日（木）に第 2 回検討会を行い、2 年度までで現状のスーパーハイビジョンシアターの運用を終え、その後施設改修を行うこととし、跡地利用の具体案の検討を始めた。 さらに、跡地利用に関係する部署のヒアリングを順次行った。			
【備考】  現状のハイビジョンシアター			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	現状のスーパーハイビジョンシアターの活用実績を踏まえ、文化財への理解を醸成・向上するための新たな検討を始めている。具体案は2年度に集約し、今後の事業計画に反映する予定である。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	歴史・伝統文化の理解促進に資する展覧事業・教育普及活動等に資するため、部署や専門を超えた検討を進めている。

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特別展のテーマに則した解説パネル・冊子・ワークショップ等、観覧者の理解促進のための教育普及プログラムに関する調査研究（(4) -①-3）		
【事業概要】 特別展をより楽しくわかりやすくするための教育普及プログラムを実施する。元年度は「京都 大報恩寺 快慶・定慶のみほとけ」展、「室町将軍一戦乱と美の足利15代」展、「三国志」展において実施する。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室研究員 西島亜木子
【主な成果】 過去の特別展のアンケート結果や来館者調査に基づき、特別展の内容や来館者層に応じた効果的な教育普及プログラムを実施した。 ・「京都 大報恩寺 快慶・定慶のみほとけ」展では、展示されている仏像の4つの製作技法（金泥、漆箔、截金、玉眼）を紹介した。金泥、漆箔、截金は、製作過程がわかる手板を製作し、製作過程の映像とともに掲示した。玉眼については、構造がわかる模型を展示し、イラスト入りの解説パネルとともに紹介した。 ・「室町将軍一戦乱と美の足利十五代」展では、イラスト入りのわかりやすいパネル4枚を製作。また、勘合貿易（日明貿易）の流れを紹介し、勘合の復元を掲示するとともに、勘合を照合できる体験コーナーを設置した。生徒・児童向けにはワークシートを製作し事前配布したほか、来館した小中学生にも配布した。 当館初めての試みとして、視覚障がい者向けのプログラムも準備した。視覚障がい者向けの音声ガイドの無料貸出、点字及び拡大文字での解説の設置、体験コーナーでの視覚障がい者用勘合の設置を行った。展示室以外のプログラムとしては、視覚障がい者に快適な環境で展覧会を観覧してもらう目的で、視覚障がい者のための観覧ツアーを2回開催した。（参加者：25人）また、「実践！勘合貿易ワークショップ」を一般向けに2回、視覚障がい者向けに2回行い、勘合貿易の流れを解説するとともに、割印、割書き体験のほか、参加者自らが寸劇をし、勘合貿易の流れを体験した。（参加者数：一般：23人、視覚障がい者：10人）一般向けの参加者、応募者には学校関係者も数名おり、参加した高校教諭からは学校向けの勘合貿易キット作って欲しいという要望もあった。 ・「三国志」展では、展示されている武器や金印などのレプリカを製作し、どのように使われていたのかをわかりやすく解説する1回15分の演劇を展示室内で2日間（3回/日）開催した。演劇には、聴覚障がい者も楽しめるよう、手話通訳をつけた。また、視覚障がい者のための観覧ツアーを2回実施した。（参加者数：30人）			



三国志ナイトミュージアムでの演劇の様子

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	わかりやすいパネルや体験コーナーはアンケートや来館者調査からも好評であることから、元年度も実施した。「大報恩寺」展と「室町将軍」展でのアンケートでは、回答した人のうち約9割が「とてもよかった」または「よかった」と回答していることから、高評価を得ていることがわかる。 元年度に初めて行った視覚障がい者を対象としたプログラムについては、初めて当館に来館した方もおられ、これまで博物館に来たくてもさまざまな理由で来館をあきらめていた方に対して文化へのアクセスの機会を提供したといえる。特別展での視覚障がい者向けのプログラムは同伴者も含めて高評価をいただいており、次の開催を期待する声も多い。 「三国志」展でのイベントでは、聴覚障がい者に配慮して手話通訳を付けたことで、多くの聴覚障がい者が来館した。 今後も当事者の要望を聞きながら継続していくとともに、他の障がい者や高齢者等への配慮も行っていきたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特別展の教育普及プログラムは29年度、30年度に引き続き元年度のアンケートでも高評価を得ていることから、来館者のニーズに合ったプログラムを実施することができたといえる。視覚及び聴覚障がい者に対するプログラムは元年度新たに始め、参加者からも高い評価を得るとともに、新たな来館者層の開拓にもつながった。これにより、中期計画における「教育普及に関する調査研究」のうち、特別展の教育普及については充分達成できたと考える。

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	身体障がい者向けの展示解説プログラムに関する調査研究（(4)-①-3）		
【事業概要】			
28年に「障害者差別解消法」が施行された。この法律により、国立博物館などの公共文化施設では障がい者への合理的配慮が法的義務となった。当館では年間約10の障がい者団体・学校の対応（ワークショップ・展示室見学・あじっば体験・博物館ガイダンス等）を行っている。これまでは事前に時間や内容等の打ち合わせは行うものの、事後アンケートによる障がいを持つ当事者や関係者への具体的なニーズの把握は不十分であった。そこで、多様な利用者のニーズに応えるため、元年度は特に視覚・聴覚の障がい者に向けたプログラムを実施し、博物館での合理的配慮をどのように行うべきか、当事者へのヒアリング等も含めたプログラム運営について研究を行った。			
【担当部課】	展示課 企画課	【プロジェクト責任者】	主任研究員 加藤小夜子 特別展室研究員 西島亜木子
【主な成果】			
(1) 視覚障がい者及び介助者向けワークショップ ・当事者・介助者のニーズを踏まえたワークショップの実施を目指すため、事前に国立福岡視力障害センターへのヒアリング及び打合せを実施した（4月3日・9日）。 ・ワークショップ本番（4月12日） ①鬼瓦のミニチュア作り②体験型展示室（民族衣装や楽器）での体験③文化交流展示での触察体験（鑑賞の際にはLEDライトを使用）を実施した。 ・終了後、参加者へのヒアリングを実施したところ、最も満足度の高かったのは①の体験で、当事者の満足度が7割、介助者の満足度は9割であった。白黒反転文字や点字による資料を準備したこと、担当研究員による鬼瓦の解説や質疑応答を実施したことが高く評価された。 (2) 手話通訳付きミュージアムトーク ・聴覚障がい者向けプログラムとして、また多様な利用者が楽しむことができる取り組みの一つとして、ミュージアムトークに当館の手話ボランティア（22人在籍）による手話通訳を導入した。 ・第1回「手話と仏像」（5月28日平日昼間）参加者：75人（うち聴覚障がい者11人） 参加者の手話への関心は高かったが、スペースの確保や展示室の暗さなどが課題として残った。 ・第2回「更紗にさわろう」（9月28日夜間開館時）参加者：80人（うち聴覚障がい者6人）1回目の課題を踏まえ、手話が見やすいように作業灯を点灯し、前方に優先スペースを設け、誰もが楽しめるようハンズオンのコーナーも設置した。手話を使わない聴覚障がい者のためにPPTに要約字幕を入れ、配布資料とした。また地元の手話を学んでいる高校生も数多く参加し（17人）、当館のボランティアとの交流を持つことができた。 (3) 手話通訳付きバックヤードツアー 参加者：38人（うち聴覚障がい者22人） ・博物館の「展示する」「運ぶ」「守る」仕事の舞台裏を覗くバックヤードツアーを当館ボランティアの手話通訳付きで実施。移動しながらの手話通訳のため、リハーサルを2度実施した。事後アンケートでは参加者の9割が満足と答え、「展示室の裏側の見学」や「手話が分かりやすかった」ことが良い点としてあげられていた。課題としてツアーの適正人数や手話通訳を行う場所の明るさ等の検討が必要である。今後も定期的開催していきたい。 (4) 特別展 視覚障害者向けプログラム ・特別展「室町将軍一戦と美の足利十五代」では、視覚障がい者向けのプログラムを準備した。視覚障がい者向けの音声ガイドの無料貸出、点字及び拡大文字での解説の設置、体験コーナーでの視覚障がい者用資料の設置を行った。展示室以外のプログラムとしては、視覚障がい者に快適な環境で展覧会を観覧してもらう目的で、視覚障がい者のための観覧ツアーを2回開催した。（参加者数：25人）アンケートでは参加者、同伴者共、9割が「満足」または「大満足」と回答した。また、「勘合貿易ワークショップ」を行い、勘合貿易を解説するとともに、割印、割書き体験のほか、参加者自らが寸劇をし、勘合貿易の流れを体験した。このイベントは、一般向けにも行った。（視覚障がい者参加者数：10人）ワークショップでは、参加者の8割が「満足」または「大満足」、同伴者10割が「満足」または「大満足」と回答した。 ・特別展「三国志」では、視覚障がい者向けの観覧ツアーを2回実施した。（参加者数：34人）「室町将軍」展でのアンケート結果を踏まえて、さわれるものを増やしたり、椅子を準備するなどの工夫を行った。アンケート結果では、10割が「満足」「大満足」と回答した。			
【備考】			
取材：手話通訳付きミュージアムトーク 新聞（朝日新聞）、手話通訳付きバックヤードツアー 新聞（朝日新聞）、特別展「室町将軍」「三国志」視覚障害者向けプログラム 新聞（毎日新聞・西日本新聞） 手話通訳付きミュージアムトーク・バックヤードツアーの動画を九博HP及び、ユーチューブ、九博チャンネルで公開中 上記(1)～(4)のプログラムについて、福岡県障がい者差別解消推進功績者表彰を受賞した。			



特集展示「更紗展」第2回手話通訳付きミュージアムトークの様子



特別展「三国志展」視覚障がい者向け観覧ツアーの様子



特集展示「更紗展」第2回手話通訳付きミュージアムトークの様子



特別展「三国志展」視覚障がい者向け観覧ツアーの様子

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	プログラム実施の重要なプロセスとして当事者・介助者へのヒアリングが欠かせないが、元年度は障がい者団体や国立福岡視力障害センター、手話を学ぶ高校生など地元の団体へのヒアリングを積極的に行い、プログラムに生かすことができた。プログラムの実施に向けて、ボランティアと職員の事前打ち合わせや担当研究員との勉強会を通して、段取りや配慮についての共通理解を行うことができた。 今後は特別対応だけでなく個人での利用者にとどのような体験が提供できるのかを検討し、研修などを通して、職員すべてのスキルアップが必要である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	28年の障害者差別解消法の施行や、オリンピック・パラリンピックに向けて、多様な文化の紹介の拠点である博物館には、より一層の配慮が求められる。元年度は特別展と文化交流展示室において当事者・介助者のニーズに合わせた障がい者対応のプログラムを行うことができた。 また、ボランティアと共にプログラムを考えることで、ボランティア活動の活性化にもつながった。 2年度は元年度の実践を生かし、障がい者に届く広報の検討も行いたい。

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特集展示「刀剣ことはじめ－刀剣ワールド財団と九博の名刀－」における観覧者の理解促進のための教育普及プログラムに関する調査研究（(4)-①-3）		
【事業概要】 刀剣ワールド財団と当館が所蔵する代表的な刀剣を用いて、ふだん刀剣に馴染みのない初心者の特に対象として分かりやすい展示を行う。会場内は、日英中韓の4言語完全対応による図入り解説パネルを見やすいデザインを心掛けながら掲示する。また会期中の関連行事として、展示担当者によるミュージアムトークを行うとともに、刀剣に関係する様々な職方と協力するかたちで体験イベントを複数回実施する。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室研究員 望月規史
【主な成果】 会場内に展示した国宝2件、重要文化財6件を含む全15作品（当館所蔵品6件、刀剣ワールド財団所蔵品9件）に対して、通常の題箋とともに15字程度のキャッチフレーズを付し、観覧者に対して作品についての理解をより深めることができた。会場内に掲示した解説パネルは、当館所蔵品の「国宝太刀 銘来国光」の押形画像を入れた上でそこに部位名称について図示し、更に分かりやすい解説を入れることで、刀剣を鑑賞する上での理解を促すことができた。また、刀剣の主な産地を図示したパネルも設置したことで、具体的に日本のどの地域で刀剣が数多く制作されたのかを明示することができた。			
			
「刀剣研磨工程見本」の展示		展示会場風景	
また、作品とともに「刀剣研磨工程見本」のコーナーを設置した。福岡県内の刀鍛冶および刀剣研磨師に依頼して作成した13本からなる研磨工程ごとの研磨見本であり、これを順番に並べて展示することで刀剣特有の見どころである地鉄や刃文がどのように現れてくるのかについて視覚的に説明することができた。			
さらに、会場内には無料リーフレットを設置した。表面に「日本刀とは何か」「刀剣の種類」「刀剣の名どころ」「刀剣の見どころ」など項目を設けて図入りで解説を付した。また裏面には特に5件を選んで作品画像入りでそれぞれの見どころについて解説し、更にQRコードを入れて所蔵先での公開データとリンクをさせることで、興味を持った観覧者に対してより詳しい解説への案内をすることができた。			
さらに本展の関連イベントとしては、プロジェクト責任者によるミュージアムトーク、および2年1月11日(土)・2年2月9日(日)に九州島内の刀鍛冶、刀剣研磨師、象嵌師からの全面的な協力を仰ぎ、「ペーパーナイフ制作体験」「刀剣研磨体験」「象嵌体験」を事前予約制により実施し、さらに同日中に刀剣にかかわる諸職の紹介をすることで、日本刀に対する総合的な理解と興味を来館者に促すことができた。			

年度計画に対する総合的評価

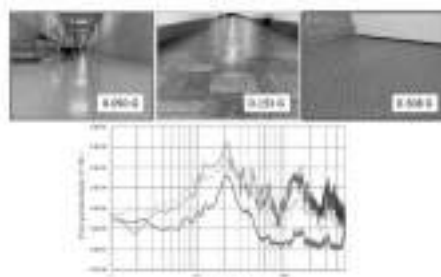
評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	会期中は総数5万人以上の来館者があり、SNS上でも非常にわかりやすい、親しみやすい展示である旨の高い評価が数多く得られた。会場内アンケートも非常に好評であり、次回の刀剣展示に対する期待が数多く寄せられた。また、体験イベントは計2回とも盛況かつ安全に実施することができた。従って、初心者の特に対象として分かりやすい刀剣展示とする当初の目的は、十二分に達成できたと考える。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	近年の刀剣ブームもあり今回は非常に多くの観覧者を得ることができた。特に関連イベント、ミュージアムトークの際に今後も刀剣や刀装具に関する展示を積極的に行ってほしい旨の声が数多く寄せられており、魅力ある刀剣の展示をさらに心がけていけるようにしたい。また、当館の刀剣コレクションについても充実をはかり、その調査研究成果についても積極的に展示の中で盛り込んでいける展示を心掛けたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	博物館の環境保存に関する調査研究		
【事業概要】 当館による文化財の活用に伴い保全の必要性が生じる、収蔵環境、展示環境、輸送環境について調査研究し、今後の環境の向上を目的として実施する事業。			
【担当部課】	学芸研究部保存修復課	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 富坂賢
【主な成果】 (1) 貸与先施設に関する調査研究 当館が新規に作品を貸与する先の施設を中心に、展示環境の調査を行った。その際に協議した、環境改善や環境維持についての共通する課題や取り組み事例を情報共有することで、当館の環境保全についての有益な知見を得ることもできた。 (2) 展示ケースの研究開発 工芸資料の展示を目的とした、展示ケースをデザイン室と共同で開発した。また、展示ケースに用いる素材の安全性に関する国際シンポジウムに参加し、国際的研究動向についての情報収集を実施した。 (3) 展示用支持具に関する調査研究 展示用支持具の製作工程を整理するとともに、その効果及び機能と現状かかえる課題について検証し、関連学会において成果を発表した。 (4) 館内用輸送時に生じる振動に関する調査研究 短距離ではあるが発生頻度の高い館内輸送について、床面形状と発生振動レベルの関連を検証した。成果を関連学会で発表することで今後の館内輸送のさらなる安全性向上について議論を深め、有益な情報収集ができた。 (5) 収蔵環境に関する調査研究 国立民族学博物館との共同研究を通じて、持続可能な保存管理の在り方を協議するとともに、館内で収集している生物生息環境、温湿度環境の各種データの評価手法についての研究を開始した。			
【備考】 ・国内調査先：葦崎大村美術館、徳島市立考古資料館、福岡市美術館、碧南市藤井達吉現代美術館、国立アイヌ民族博物館、長崎県歴史文化博物館、高崎市立かみつけの里博物館、大倉集古館、観音塚考古資料館、大野城心のふるさと館、京都市京セラ美術館、徳島市立徳島城博物館 ・国外調査先：浙江省博物館（中）、蘇州博物館（中）、イラクリオン考古博物館（希）、Goppion 本社（伊）、メトロポリタン美術館（米）、Saint-Gobain 社（羅）、V&A 美術館（英） ・研究成果の学会発表 和田浩「博物館内輸送用防振機能付台車の開発」日本機械学会第 28 回交通・物流部門大会、11 月 27 日 和田浩「博物館内の作品輸送で生じる振動レベルの評価とその対策」第 57 回全日本包装技術研究大会、11 月 21 日 和田浩、矢野賀一、黄川田翔「展示用支持具の効果および機能と課題」第 38 回日本展示学会大阪大会、6 月 30 日			



当館内の各種床面を台車で通行した際に荷台上で検出された振動の解析

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	年間を通して、新規あるいは大規模改修後の貸与先に対して、必要に応じて現地に赴き調査をし、施設毎の状況に応じた実現可能な環境保全について協議を続けた。こうした調査によって当館に有益な知見が得られる場合もあり、今後も継続したいと考える。また、展示ケースの新規製作に伴い、気密性、調湿機能、ガラスの性能について国内外の製作会社と製作現場において協議を重ねる一方、使用素材の安全性に関する国際的研究動向について積極的な情報収集を実施した。課題であった館内輸送に対する調査研究について、各所で生じる振動レベルの評価に関する研究を進めることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展示環境の調査研究に関しては、貸与先施設に関する調査研究、展示ケースの研究開発、展示用支持具に関する調査研究の成果に示した通り、最も充実した成果が得られた。また、輸送環境の調査研究に関しては、国内外ではば着目されてこなかった館内輸送に関しての研究を深めることができたと考えている。収蔵環境の調査研究に関しては、既に収集している膨大なデータの効果的な活用手法についての研究を開始した。以上の展示、輸送、収蔵の各環境保全全般に関しては、持続可能性が今後の重要な視点になると予想される。2年度においてはそうした角度からの調査研究を進めたいと考えている。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	美術品・輸送機関・梱包資材の振動特性情報を集積した安全輸送のためのシステム構築		
【事業概要】 輸送機関、梱包資材、文化財が輸送中に発生する振動に対してどのような応答を示すのかを調査し、科学的根拠に基づく梱包設計を行うシステムを構築する。			
【担当部課】	学芸研究部保存修復課	【プロジェクト責任者】	環境保存室長 和田浩
【主な成果】 (1) 論文による研究成果発表 ・和田浩(元年)「文化財の海上輸送中に生じる振動レベルの評価」MUSEUM、680号、pp. 39-53、査読有、6月 (2) 学会等による研究成果発表 ・和田浩「博物館内輸送用防振機能付台車の開発」日本機械学会第28回交通・物流部門大会(広島)、11月27日 ・和田浩「博物館内の作品輸送で生じる振動レベルの評価とその対策」第57回全日本包装技術研究大会(仙台)、11月21日 ・和田浩「文化財輸送環境の保全」全国美術館会議保存研究部会第54回会合(島根)、2年2月27日 (3) 調査実績 ・文化財の梱包資材として用いられる綿布団の衝撃吸収特性を得るための落下衝撃試験を実施した(日本ビジネスロジスティクス試験所)。10月10日 ・屏風の振動伝達特性を得るために、屏風構造を再現した複製を加振し、各周波数に対する応答を計測する試験を実施した(都立産業技術研究センター)11月1日、12月1日			
【備考】			



加振実験による屏風構造体の振動伝達特性試験の様子



加振実験による屏風構造体の振動伝達特性試験の様子

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業によってこれまで得られた成果の内、文化財の輸送機関上で生じる振動計測プロトコルを用いて、公表データの少ない海上輸送中に生じる振動を計測し、その評価について論文として公表できた。また、日常的に発生頻度の高い館内輸送の安全性向上を目指した研究を開始し、その成果を学会発表することで多様な研究者との協議を深めることができた。梱包資材の性能評価としては、伝統的に用いられる綿布団の衝撃吸収特性を得るための試験を国内で最初に実施することができた。さらに、輸送対象である文化財自身が輸送中に生じる振動を受けて、どのような挙動を示すのかを検証するために、屏風構造体の振動伝達特性試験を実施し、その検証方法を確立できた。文化財の振動伝達特性については今後も幅広い範囲の構造体に対して実施していく計画である。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展覧会への出品を主とした積極的な美術品の活用が施策される現下において、活用に伴う輸送による文化財の劣化進行の抑制技術や管理基準の確立は急務の課題となっている。既に、本事業によって美術品輸送に用いる輸送機関上で振動を計測し、陸上、海上、航空の各輸送のあらゆる工程における振動データを解析している。また、その解析結果を用いて輸送中の振動環境を再現し、振動を受けた梱包資材の応答の計測手法と評価手法を確立している。さらに、振動を受けた美術品素材に蓄積疲労が生じる現象を捉えることに成功し、小さい加速度でも徐々に美術品を劣化させる原因となりうることを検証できた。輸送機関上で生じる振動に着目し、文化財が長期間振動を受け続けることで破損する危険性である蓄積疲労現象の存在を検証することが残る課題であったところ、上記成果によってその検証方法を確定できたと考える。2年度以降はこの検証をより多様な文化財を対象として拡大したいと考えている。

【書式B】

施設名 京都国立博物館

処理番号 1421B ア

業務実績書

中期計画の項目		(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究	
プロジェクト名称		ア 修復文化財に関する資料収集及び調査研究	
【事業概要】文化財保存修理所で実施されている修復・模写文化財の資料収集及び調査研究を行う			
【担当部課】学芸部		【プロジェクト責任者】保存修理指導室長 大原嘉豊	
【主な成果】			
(1)修復文化財情報の収集と調査 - 元年度、文化財保存修理所の工房に搬入された新規の修復文化財に関して、修理工房より提出された「修理計画書」に基づき、170 件のデータを収集し、「修復文化財データベース」に登録した。 - 当館研究員により 7 回行った修理工房の巡回のほか、修理技術者とともに実施した科学調査を含む調査を適宜実施し、文化財の構造や使用材料、内部納入品・銘文調査など、修理中にのみ得られる情報を収集、分析した。 (2)修復文化財情報の整理 30 年度に修理が完了し、搬出を終えた修復文化財に関して、修理工房より提出された「修理解説書（報告書）」に基づき、2,049 件のデータを「修復文化財データベース」上で更新し、整理事業を行った。 (3)模写作成のための文化財の調査 - 当館と模写修理事業者（六法美術）による当館蔵「若狭国鎮守神人絵系図」の復元模写（5 か年計画）の 3 か年目として、上げ写しによる模写を終え、色鉛筆での仮彩色を行った。本紙料紙の作製として雲母を糊でひき、打紙の試作を行った。 (4)情報の公開と共有 28 年度に修理が完成した文化財 149 件に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第 17 号(2 年 3 月 31 日発行)に掲載した。 - 修理時の調査により発見された銘文 23 件を「銘文集成」として同書に報告した。 2 年 2 月 28 日に文化財保存修理所で修理を実施した重要文化財「兜率天曼荼羅図」（京都・興聖寺蔵）の修理に伴う新知見について、記者説明会を実施した。			
【備考】 (1)データ収集件数 170 件、巡回回数 7 回 (2)データベースの追加更新件数 2,049 件 (4)報告書 1 冊（修理報告 149 件、銘文報告 23 件を含む）			



『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第 17 号



『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第17号

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財保存修理所で行われる修復文化財情報の収集・整理については、データのデジタル化処理方法等、将来的な情報の応用に対する発展性を見据えて継続的に実施している事業であり、効率性・正確性を担保しつつ元年度も順調に実施できた。この内容は『京都国立博物館文化財保存修理報告書』にて逐次報告している。 当館蔵「若狭国鎮守神人絵系図」の復元模写も調査結果をもとにした料紙が作成されるなど、5か年計画の3か年目として順調である。 2年度計画も元年度に準じて実施していくが、得られた知見をもとにした研究の活性化が望まれる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究活動の一環として、文化財保存修理所で実施されている修復・模写文化財の資料収集及び調査研究を行った。本事業は、法人化以前から継続してきた基礎研究事業であり、中期計画でもその重要性に鑑みて継続性を重視している。文化財保存修理所に搬入される修復文化財の多寡は他律的条件であるため定量的評価になじまないものであるが、ほぼ安定した件数で推移しており、有形文化財の修復や模写にかかる調査研究の情報を継続的に蓄積していく所期の目標は順調に達成しており、2年度以降も継続していく。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 文化財の製作・技法等に関わる材質構造調査・研究 ((4) -②-1)		
【事業概要】博物館の展示・教育普及活動に関連する調査研究として、有形文化財の製作技術に関わる調査や材料等に関する調査を実施する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存科学室 降幡順子
【主な成果】			
(1) 蛍光X線分析法は、非破壊分析が可能であるため、共同調査等に係る材料調査として多くの調査を実施した。元年度は特に金属組成、顔料調査、七宝、陶磁器胎土・釉薬の分析調査が主としたものであった。 (2) 実施した分析調査は、寄託修理品を含め、X線CT撮像7件(13点)、蛍光X線分析(携帯型装置含む)29件(206点)、可視赤外分光分析3件(4点)、ポリライト調査2件(2点)、透過X線撮影2件(5点)である。 (3) 館蔵品の調査をはじめ、外部からの分析調査依頼で実施した三仏寺の美術工芸品調査(柄付鏡等)や京都市埋蔵文化財センターの出土遺物調査(二彩多口瓶)等もあり、他機関とも連携して文化財の科学調査を実施することができた。			
			
唐獅子牡丹文様陣羽織の分光分析調査			
【備考】			
・学会発表等			
(1) 降幡順子・井上暁子・齋藤努「博多遺跡群出土ガラス容器片の科学調査-吹きガラスに着目して-」『文化財保存修復学会』6月、東京学芸大学			
(2) Junko Furihata「Conservation Science and Explorations of Cultural Exchange-the blue color agents used to decorate ceramics」『ICOM Kyoto2019』9月、京都国際会議場			
(3) Junko Furihata「Early domestic production of lead-glazed earthenware in Japan: Analytical studies of excavated ceramics from the 7th and 8th centuries」『EMAC 2019 Barcelona』9月、バルセロナ大学			
(4) 降幡順子「近世陶磁器の彩色材料」、京都国立博物館土曜講座、2年2月、京都国立博物館			
・論文等			
(1) 諫早直人・大江克己・金宇大・降幡順子・山口欧志・吉澤悟「群馬県白山古墳出土品の研究2」『鹿園雑集』第21号、奈良国立博物館、pp. 57-94、4月			
(2) 降幡順子「北野廃寺跡出土多口瓶化学的特徴について」『平安京右京一条二坊十六町跡』京都市埋蔵文化財研究所 pp. 16-22、9月			
(3) 降幡順子「藤原宮等出土瓦と生産地遺跡出土瓦の胎土分析成果 1. 蛍光X線分析の成果」『蛍光X線分析と鉍物組成分析による飛鳥藤原地域出土古代瓦の生産・供給体制の研究』奈良文化財研究所、pp. 70-83、2年3月			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	元年度は、外部からの依頼による科学調査の実施とともに、館蔵品・寄託品、展示に関わる科学分析調査の機会が増加した。使用科学機器も、蛍光X線分析装置を使用した化学組成調査のみならず、定性分析ではあるが、可視赤外分光分析やポリライトなど、30年度より多様な機材を用いた光学的調査を実施することができ、幅広い分析調査を実施することができた。これらの結果の一部は、学会、講演会、紀要等により専門家のみならず広く市民に向けて公表することができた。今後は調査研究として一層のデータ蓄積に努めていき、報告書等で公表していく予定である。今後も体制を整え継続を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	収蔵品・寄託品の調査点数の増加させることができた。30年度と比較し、展示事業等へ調査結果を活用する機会も増え、普及広報等への取り組みも実施することができた。しかし教育活動等に結び付ける機会は、いまだ十分とはいえないため、2年度調査では、これまで実施してきた迅速な情報公開、調査研究成果の展示活用と共に、教育活動への取り組みについて、より一層の充実を図っていきたいと考えている。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他 有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 収蔵庫・展示室・ケース内部等における環境が文化財に与える影響等に関する調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 館内施設や設備（展示室・展示ケース・収蔵庫等）の環境が文化財に与える影響の調査・分析を目的としている。次の3点の調査を継続的に実施し、得たデータの分析と情報共有を行うことで保存環境の向上を図った。 (1) 温湿度センサーを用いた館内施設の温湿度調査 (2) 展示ケース内に浮遊する塵埃調査（電子顕微鏡を用いた塵埃の観察） (3) 文化財害虫トラップの設置及び回収			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 鳥越俊行
【主な成果】 (1) 30 年度に引き続き、展示室や展示ケースに設置した無線式温湿度センサーで 24 時間リアルタイムモニタリングを実施した。蓄積した温湿度データから、展覧会ごとに情報を整理し展示ケースの気密性向上に役立てた。収蔵庫についても 30 年同様、温湿度データロガーとデジタル温湿度計を用いた定期的なモニタリングと温湿度データの回収を行い、空調の調整に役立てた。 (2) 正倉院展終了後に、展示ケース内のアクリル製治具などから塵埃を採取・電子顕微鏡にて観察し、塵埃の状況からケースの気密性に対する評価を行った。調査結果を踏まえ、気密性向上のための修理や部材交換などのメンテナンスを実施した。 (3) 30 年度に引き続き、文化財害虫の生息状況を把握するため、文化財の保管及び展示に関わる箇所を中心に昆虫調査用トラップを設置し、2 か月に 1 回交換を行った。調査結果を蓄積し分析することで IPM(総合的有害生物管理)を推進し、文化財害虫の生息が確認された箇所を重点的に清掃し被害の低減に努めた。また、清掃と防塵マット交換を定期的の実施し、展示室・収蔵庫の周辺の衛生環境保持に努めた。			
【備考】 ・学芸部保存修理指導室員並びに総務課環境整備係員等により構成される、「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」を実施した。月に 1 回程度開催し、保存環境に関する問題点や改善案について協議を重ねている。 (1) 展示室内温湿度調査：228 か所 (2) 展示ケース内ほか粉塵調査：25 か所 (3) 文化財虫害生息状況調査：100 か所 ・「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」：11 回開催			



正倉院展終了後の塵埃調査の様子

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	継続した調査の実施やデータの蓄積を着実にやっている。また調査で得られた結果を踏まえ、ワーキンググループでの情報共有や議論を行い、保存環境の保持と改善を図った。データの共有化を進め、保存環境の維持や向上を進めると共に円滑な監視体制を整えたい。なら仏像館についても同様に館内環境維持のため継続して調査を進めデータの蓄積を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展示室や収蔵庫では、温湿度並びに文化財害虫に関する継続したモニタリングや調査を年間を通じて行っている。なら仏像館も同様にデータの蓄積を着実に継続して実施することで、中期計画の達成を目指す。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他 有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 文化財修理の観点からの収蔵品・寄託品等の調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 本事業では、以下の3点の内容について実施した。 (1) 修理方法の記録を残し将来の文化財修理に資するため、館蔵品や寄託品の保存状態に関する科学的な調査を行う。 その内容を保存カルテとして記録する。 (2) 館蔵品や寄託品の修理を着工するにあたり、修理文化財の保存状態に関する情報を得るための科学的な調査を行った。また、調査結果を踏まえた修理調書を作成している。 (3) 修理中の文化財から取得した材質・銘文等の情報について調査と分析を行った。また、その結果を当館の研究紀要などへの掲載等を行いデータの蓄積を実施している。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 鳥越俊行
【主な成果】 (1) 30年度に引き続き、館蔵品や寄託品の保存状態を詳細に観察するとともに、得られた情報をふまえて保存カルテを作成している。必要に応じて光学調査も併せて実施し、作品の基礎データを蓄積した。 (2) 30年度に引き続き、館蔵品や寄託品の修理に伴い、詳細な観察や光学調査を実施した。保存カルテと調査結果をふまえて修理調書を作成し、館内鑑査や修理方針の策定に役立てた。 (3) 30年度に引き続き、修理中の木製文化財から得られた木片について、共同研究の一環として京都大学生存圏研究所との協定に基づき樹種同定を実施し樹種を同定した。また、修理中に発見された銘文は、当館研究員が翻刻を行い情報化と整理を実施した。これらの成果は「奈良国立博物館 文化財保存修理所 修理報告書」第1号として6月に刊行した。			
【備考】 ・保存カルテや修理調書を基に修理された文化財は、修理完了後の翌年度冬に開催される特集展示「新たに修理された文化財」にて公表している。 (1) 保存カルテ作成件数：総計107件 (内訳 絵画：32件、書跡：5件、彫刻：12件、工芸：10件、考古：34件、歴史資料：9件、その他：5件) (2) 修理調書作成件数：総計8件 (内訳 絵画：2件、書跡：1件、彫刻：2件、工芸：2件、考古：1件) (3) 材質調査及び銘文調査件数：2件 (内訳 材質調査実施件数：2件)			



「奈良国立博物館 文化財保存修理所 修理報告書」第1号に銘文を掲載した「泣不動縁起 箱蓋」(当館蔵)

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財保存修理所の修理技術者と連携を進め、X線CT、X線透過撮影や顔料調査などの科学的調査を行い、修理に有用な成果が得られた。保存カルテについても整備を進め、修理方針の検討に役立てた。また、材質調査や銘文調査も引き続き実施し、データの蓄積を図った。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館の文化財保存修理所は、奈良をはじめとする国指定品の修理における拠点であり、修理技術者との連携は今後も重要である。本事業は、修理に関する基礎情報を収集し、その成果を公開するものであることから、2年度以降についても引き続き調査を行い、情報の蓄積を図ることで、中期計画の達成を目指す。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他 有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 保存科学の観点からの収蔵品・寄託品等の調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 本事業では、以下の2点の内容について実施した。 (1) 館蔵品や寄託品の修理前や修理中等に併せ、光学調査（X線透過撮影・蛍光X線分析）を実施した。そして、修理方針の策定に有効な情報を取得し反映させた。 (2) 文化財保存修理所での修理中の文化財については、当館の研究員と工房の技術員が共同で光学調査を実施し、得られた結果を修理へ反映している。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 鳥越俊行
【主な成果】 (1) 館蔵・寄託の文化財（彫刻や漆工品など）の修理等に併せ、X線CTスキャナやX線透過撮影を実施し内部構造や納入品の把握を行った。これらの光学調査は修理に活用すると共に、データの蓄積も進めた。 (2) 当館研究員と工房の技術者が共同でX線CTスキャナ、X線透過撮影や蛍光X線分析などの光学調査を行った。館蔵品や寄託品の修理前や修理中にこれらの調査を実施することで、修理へ成果を随時反映させることが可能となり、彫刻作品・漆工作品や絵画作品のより安全な修理に役立てることができた。			
			
		蛍光X線分析調査の様子	
【備考】 ・調査件数 X線CTスキャナ調査・蛍光X線分析調査回数：1件			

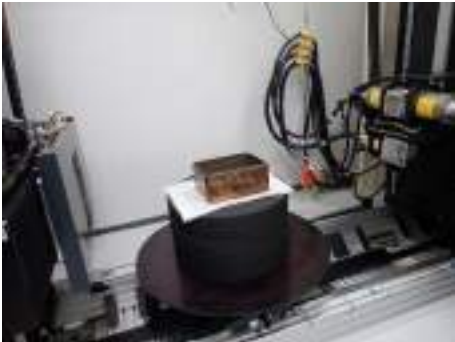
年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30年度に引き続き、修理等の際に内部構造や保存状態・材質情報に関する情報を得るため光学調査を実施した。X線CTスキャナやX線透過撮影は安全な修理に欠かすことのできないものとなっており、また蛍光X線分析は彩色材料の同定に重要な役割を果たしている。光学調査の結果は、修理調書に反映させるとともに修理方針の策定にも役立っている。2年度についても継続した調査並びにデータの蓄積を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	X線CTスキャナは順調に稼働し、彫刻や漆工品などの修理に大いに役立っている。文化財保存修理所での修理内容をふまえ、X線透過撮影や蛍光X線分析などの調査を行うことで、修理方針の策定等に伴う調査を随時実施できた。2年度も調査を継続し、データの蓄積を図ることで中期計画の達成を目指す。

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	文化財の材質・構造等に関する共同研究（(4) -②-1）		
【事業概要】 文化財用X線CTスキャナ、マイクロCT、3Dデジタイザ等を使用して、文化財の材質・構造に関する研究を外部研究者と共同で実施する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長 木川りか
【主な成果】 (1) ジャワ「ガムラン」におけるゴングの音と形の関係 インドネシア・ジャワの「ガムラン」では様々なタイプのゴング類が使用される。これらゴングのうち、「クノン」及び「ボナン」について、筑紫女学園大学及び日本大学との共同プロジェクトとしてX線CTによる形状分析、音響分析、及び形状データに基づいたモード解析を行った。モード解析結果（理論値）は、音響分析結果（実測値）と概ね一致していると考えられた。また、楽器の音高や音色を決定すると考えられる部位も明らかになった。 (2) 漆器の構造の調査 修理のために寄託された黒漆山水楼閣葡萄沈金中央卓の科学分析として、文化財用X線CTスキャナによる中央卓の構造調査及びマイクロCT撮影による塗膜断層構造の調査を行った。前者によって、少なくとも2樹種の木材が使分けられていること、天板及び底板はダボを用いた2枚接となっていること等が明らかになった。後者（マイクロCT）により、下地は少なくとも3～4層に重ね塗りされている可能性が示唆された。 また、文化庁、熱田神宮、各博物館等の所蔵者と協力し、様々な箱の文化財用X線CTスキャナによる構造解析を行った。その結果、蓋甲板・身底板のはぎ合わせの有無、側板・底板の接合方法、布着の有無や様式等が明らかになった。 (3) 茶入の製作技法 茶入の伝統的な製作技法を解明するために、いくつかの窯の茶入及び関連資料のX線CTスキャンを実施した。その結果、茶入内部に存在する気泡（す）等の空隙を可視化でき、その分布様式の差異から複数の茶入製作技法が存在する可能性が示唆された。今後は、茶入内部の空隙のみを抽出するデータ処理手法を確立した上で、詳細な製作技法の分類方法を検討していく。			
			
		菊蒔絵手箱のX線CT調査の様子	
【備考】 ・X線CT調査件数 108件、調査回数 214回 ・三次元計測調査件数 6件、調査回数 9回 論文 田村史子、塩川博義、中川一人、渡辺祐基「中部ジャワのガムランにおける『ゴング』類の分類 1 肩高水平置き『ゴング』〈Kenong クノン〉と〈Bonang ボナン〉の形と音の特性」『筑紫女学園大学人間文化研究所年報 第30号』（8月） 大西智洋、大橋有佳、渡辺祐基、當山綾乃「黒漆山水楼閣葡萄沈金中央卓の保存修復と光学分析調査」『浦添市美術館紀要 第15号』（2年3月）			



菊蒔絵手箱のX線CT調査の様子

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	元年度は114点の文化財の調査を行うことができた。特に、上記の漆器及び陶磁器については、30年度に引き続き重点的な調査を実施し、体系的なデータベースを確立することができた。さらに、一部の成果は研究紀要にて公表した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	これまで中間計画に沿って様々な文化財の調査を実施し、文化財の保存と活用を推進するための基礎データを蓄積しており、元年度も継続して取り組むことができた。30年度末に本研究の中核的な分析装置であるX線CTスキャナの更新が完了し、元年度は従来よりも高精細なデータを多数収集できた。2年度は、文化財の更なる調査を計画しており、同時にデータの分析及びその結果の学会発表・論文による公表、並びに展示等への活用を推し進めていく予定である。

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	博物館における国内・アジア地域の文化財保存修復に関する研究（(4) -②-1）		
【事業概要】 九州の保存修復の中核となる当館文化財保存修復施設の機能を活かし、西日本地域の大学において文化財保存修復を学ぶ学生を対象とした技術研修を実施する。また、地方自治体の博物館等施設の古文書担当者に対して文化財保存の基礎的な研修を行う。さらにベトナム国立歴史博物館が所蔵する作品の保存修理事業を行い、ベトナムでの修理理念の検討と人材育成等を目指す。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室長 志賀智史
【主な成果】 ・「文化財保存修復研修」 実施日：8月19日～23日の5日間 参加者：広島市立大学3人、九州産業大学2人、佐賀大学3人の計3大学8人 内容：屏風の下張り製作 協力者：一般社団法人国宝修理装演師連盟 大学・大学院で文化財保存修復を学ぶ学生を対象に、装演修復技術を学ぶ機会を提供することができた。屏風の下張り製作を通して、伝統的な日本の紙文化財の構造を学び、その修復技術の一端を実習することで、受講者に文化財や保存修復への理解を深めてもらうことができ、将来の修理技術者の育成にも寄与することができた。 ・「古文書保存基礎講座」 実施日：2年1月24日・25日 参加者：地方行政及び博物館等施設において古文書の調査・保管・修復担当者24人 内容：24日 文化財の保存修理及び古文書の保存と活用についての講義、糊炊き実習 25日 紙文化財の取り扱い実習、応急手当の実習 当館、福岡県教育委員会及び筑紫野市歴史博物館の三者共催事業。古文書の調査・保管や応急手当について研修の場を設けることができた。 ・ベトナム国立歴史博物館所蔵品の修理事業 実施日：10月14日～18日の5日間 当館との協定館であるベトナム国立歴史博物館が所蔵する所蔵品の修理事業（住友財団助成事業）。元年度は神勅（紙本）を対象とした（3ヵ年継続事業の初年度）。当館修復施設を使用する修理工房幸匠（株）の協力を得て、ベトナムでの紙文化財の修理理念の検討と修理対象の調査、現地人修理技術者の育成、伝統的紙漉工房の調査を行った。 ・文化交流展示「文化財をまもりつたえる博物館」 実施日：4月2日～7月28日の17週間 展示場所：文化交流展示室 第1室 バックヤードツアーでしか見ることができない博物館の役割について、「修理」、「模写模造」、「収蔵」、「環境」の4つのテーマで作品を中心に様々な資料を展示することにより、より多くの方々に「文化財をまもりつたえる」という博物館の役割を知って頂く機会を設けた。			
【備考】			



ベトナムでの伝統的紙漉工房の調査風景

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	国内・国外の将来及び現在の文化財保存修復の担い手を対象に、元年度も継続して研修の機会を設けることができた。また、バックヤードツアーと修理に関する展示を行うことで、「文化財をまもりつたえる」という博物館の役割を一般の方々に強く印象付けることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	行政機関職員への研修、将来の修復技術者の育成、海外協定館所蔵品の修理事業、修理に関する展示事業を行うなど、中期計画に沿って多方面への文化財保存修復に関する普及活動を行うことができた。特に、元年度開始したベトナムでの紙文化財の修理事業は、今後の展開が期待されるものである。

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	博物館危機管理としての持続的 IPM システムの研究 ((4) -②-1))		
【事業概要】 本研究の目的は、我が国の博物館における IPM (総合的有害生物管理) 普及のための地域共働システムづくりである。本研究では、研修会の開催、及び地元 NPO 法人やボランティア、大学・専門教育機関・地域文化施設の連携による IPM 研修プログラム確立を通し、IPM の社会的理解度を深めつつ、博物館等における IPM を軸にした自立的な地域共働システムづくりを目指すものである。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	環境保全室主任研究員 秋山純子
【主な成果】 (1) 海外の IPM への取り組みに関する事例報告や東京文化財研究所から最新のカビに関する講演の協力を仰ぎ、IPM セミナーを実施した (10 月 23 日)。国内の博物館、美術館、図書館関係者及び館内での IPM 事業にかかわるスタッフ、NPO 法人、ボランティアあわせて 150 人の参加を得た。 (2) IPM 研修を元年度も実施した (10 月 24 日、25 日)。IPM 研修の受講は各施設の職種の異なる 2 人 1 組 (総務系と学芸系など) での参加を原則としている。元年度の IPM 研修では、募集定員 24 人のところ、全国各地の 51 施設から 95 人の応募があり、34 人が受講した。 28 年度～30 年度に受講した施設が再度申し込みをするなど、この IPM 研修が各館で役立っていることが伺える。また、無記名でのアンケート結果では「とても良かった」と最高の評価で回答した参加者が全体の 72% と、高い満足度を示しており、継続した IPM 研修の実施の必要性があるといえる。 (3) 館内向け IPM 研修の開催 館内関係者向けに IPM 研修を実施した (5 月 14 日)。館内において IPM 活動に対する理解を深めることができた。 (4) 環境ボランティア活動の一環として、NPO 法人ミュージアム IPM サポートセンターの IPM メンテナンスの体験実習を実施した。これにより館内の IPM 活動の体制をさらにしっかりと作ることができた。			
			IPM セミナーの様子
		IPM 研修風景	
			NPO 法人とボランティアによる IPM メンテナンスの様子
【備考】 ・ IPM セミナー 1 回 参加人数: 150 人 ・ IPM 研修 (2 日間) 1 回 参加人数: 34 人 ・ 館内希望者向け IPM 研修 (1 日間) 1 回 参加人数: 20 人 ・ 学会研究会等発表: 木川りか、秋山純子、渡辺祐基、富松志帆、松尾実香、岡部海都、柿本大典、大城戸博文「ガラス壁を有する博物館建造物の衝突野鳥の対策: 建物の俯瞰的概観の調査と照明・音声を利用した対策について」文化財保存修復学会第 41 回大会 (6 月 23 日、東京)、秋山純子、山崎久美子、石橋陽見子、渡辺祐基、富松志帆、松尾実香、川越和四、木川りか、「夜間開館開始にともなう昆虫類の侵入調査について」文化財保存修復学会第 41 回大会 (6 月 23 日、東京)			



IPM セミナーの様子



IPM 研修風景



NPO 法人とボランティアによる IPM メンテナンスの様子

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	博物館の危機管理として IPM 活動を進め、その成果を文化財保存修復学会で報告・当館の IPM の取り組みを発信することができた。30 年度の IPM 研修の内容と受講生の反応を踏まえ、元年度の IPM 研修の内容を精査し、実施することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画のとおり、博物館等の IPM 活動に関連し、セミナーや IPM 研修等について全国の博物館等から総務系と学芸系など職種の異なる担当者を受け入れて実施している。IPM 研修は毎年、多くの受講の希望があり、IPM 関連の調査研究により最新の状況を反映した普及活動を今後も実施したい。

業務実績書

中期計画の項目	②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	展示ケース内の環境に関する調査研究（(4)-②-1)）		
【事業概要】			
展示ケースは、展示される文化財を粉塵や温湿度の急激な変化から保護し、また作品への影響を最小限にする照度条件でより良く作品を観覧していただくための環境を実現するにあたってきわめて重要な役割を担っている。さまざまな状況下の展示ケース内の環境条件について、作品を保護する見地より多角的かつ詳細な調査研究を実施する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長 木川りか
【主な成果】			
(1) 展示ケース照明の光源の位置と温湿度条件についての調査			
密閉ケースが主流となっている中で、展示ケース照明の光源の位置がケース内の温湿度環境に及ぼす影響を詳細に調査した。密閉ケースにおいては、通常は安定した温湿度条件が期待されており、多くの場合良好な温湿度環境を保つことができるが、状況によっては例外がある。当館は独立ケース内照明として、現在はまだハロゲンランプが用いられているが、ケースの形状・ハロゲンランプの光源の位置・調湿剤設置ボックスの位置関係によっては、高温のハロゲンランプから発生する熱によって、密閉ケースの中ではかえって温湿度の変化が大きくなる場合もあることがわかった。この対策としては、このような状況のケースについては、早期に熱をより発しにくい LED 光源に変えつつ、ランプハウスの位置を変更することが推奨される。			
(2) 展示ケース内の空気質環境についての調査			
展示ケース内では、敷板や展示台に合板が用いられることが多々あり、合板から放出される有機酸やアルデヒドなどの揮発性化学物質の問題は広く認識されている。近年、このような揮発性化学物質の現場での測定方法が発達したことを受け、当館でもさまざまな条件を実験的に作り、酢酸、アルデヒドの環境濃度を調査している。合板を用いた場合、環境の化学物質濃度は上昇するため、定期的な換気や合板を包材で梱包するなどの対策が必要となっている。			
			
ケース内の化学物質を測定する実験の様子			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	一般には密閉ケースで調湿剤を入れれば、作品を理想的な条件で保管・展示できると考えられているが、密閉ケース特有の難点も認識されつつある。この問題について、さまざまな状況下での温湿度や揮発性化学物質濃度について、詳細な調査を通じて状況の把握を行うことができた。このような結果は、博物館等施設全般に共有できる知見と考えられる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	予定していた項目について、継続的にいろいろな条件下でデータを集めることができた。今後は改善につながる状況を試行し、引き続き調査を続けていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究		
【事業概要】 当館における収蔵品管理システムの調査研究を通じて、資料情報と学芸業務の有機的な関連について調査研究し、博物館における効果的・効率的な情報の管理及び蓄積、活用のための環境構築に資することを目的とする。			
【担当部課】	学芸企画部博物館情報課	【プロジェクト責任者】	情報管理室長 村田良二
【主な成果】 1) 収蔵品管理システムについて、作品検索、総合文化展管理、鑑査会議管理、貸与管理、修理予定・履歴管理、文献情報管理の各機能を継続的に運用し、随時改善を重ねて機能を向上させた。 2) 新元号に対応した。 3) 総合文化展に関連する印刷機能を更新した。 4) 新たに編入された古写真のデータではアルバム内の個別の写真を扱うため、親子関係として従来の「部分」のほかに「内容細目」を追加し、適切にデータ処理ができるようにした。 5) ColBase との連携のため、収蔵品管理システムから抽出した公開用のデータを投入し、ColBase から自動で取り込むための中継サーバを新たに開発した。			
 中継サーバ管理画面			
【備考】 収集データ件数 234,836 件 (内訳) 作品データ件数 221,873 件 平常展データ件数 5,542 件 鑑査会議データ件数 100 件 貸与データ件数 1,944 件 修理データ件数 2,687 件 文献データ件数 2,690 件			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	収蔵品の効果的・効率的な管理のためのシステムについては継続的な開発を進め、館内からの要望に応えながら着実に発展させることができた。新たに編入された古写真では、アルバムのように物理的は一体でも内容として個々の写真の情報を必要とする。これを全体に対する内容細目として扱うことにより、展示案等では個々の情報を表示した。さらにアルバム全体のスケジュールを登録する仕組みを設ける必要性の確認と、その具体的な実装により、収蔵品データ管理のための新たな知見が得られた。また「ColBase」に定期的にデータを送信するための中継サーバを構築し、OAI-PMHプロトコルによる収蔵品データの連携を実現した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間では、システム全体の設計を再検討し、さらに発展させていく。元年度は、継続的な機能改善と同時に、「ColBase」とのデータ連携を実現した。2年度以降は、中継サーバの構築により得られた知見を踏まえつつ、システム設計の見直しを行う。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	創立 150 年へ向けた館史編纂のための基礎的な資料整理と調査研究		
【事業概要】 4 年度の当館創立 150 年へ向けて『東京国立博物館 150 年史』を編纂するために、業務文書や刊行物等を収集、整理し、今後の編纂事業の基礎資料を作成する。また、原稿の整理や入稿など編集作業を行う。元年度は関係文書類の整理とデータ化をし、保存措置を講じる。また、『150 年史』執筆者に向けて資料提供を行い、寄稿された原稿の整理と入稿を進めた。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	東京国立博物館百五十年史編纂室長 恵美千鶴子
【主な成果】 (1)収集した文書類の整理・目録化・保存措置（4 月 1 日～2 年 3 月 27 日：週に 1～2 日） 資料保管室（資料館 3 階）に収集した約 8,500 件の館史関係文書類について、27 年度に完成した目録（仮）と対応させながら、資料の保存や出納のために、中性紙箱への入れ替えを行った。また、館内外より新たに収集した資料について目録を作り、活用できるように整理をした。以上は、東京国立博物館百五十年史編纂室員 2 名、編纂室 AF1 名がともに作業を行った。 (2)東京国立博物館百五十年史編纂に向けた会議の実施（5 月 31 日） 『150 年史』執筆担当者を集めて編集調整会議を行った。執筆者より寄せられた疑問点への回答と、編集出版業者が作成した組見本と、文体の統一や原稿ファイル名、関連資料検索方法などの確認を行った。 (3)『150 年史』原稿についての整理と入稿作業（適宜） 30 年度に執筆依頼を行った執筆者に対して連絡を入れながら、原稿提出を促した。提出された原稿について、内容を確認し、文体の統一に向けての問題点を抽出し検討した。確認した原稿を、編集出版業者に入稿した（11 月 20 日～）。 (4)館史の内容に即した文書類の整理・デジタル化 a)海外交流展覧会資料のデジタル化（5 月 8 日、11 月 6 日、11 月 19 日） 『150 年史』編纂に向けて、執筆資料とするために、海外交流展覧会に関する資料のデジタル化を行った。室員 1 名、謝金アルバイト 1 名がこれを進めた。 b)『150 年史 年表（稿）』へのデータ追加（適宜） 30 年度に作成した冊子『150 年史 年表（稿）』の訂正や追加項目をデータとして蓄積した。 (5)聞き取り調査の実施（6 月 18 日ほか） 当館の 0B に面会し、当館の歴史に関する聞き取り調査を実施した。聞き取った内容は文字に起こして適宜『150 年史』執筆者に資料として提供した。 (6)問い合わせへの対応と関係資料の提供（7 月 10 日ほか） 『150 年史』執筆者などへの資料提供と、館内・館外からの館史に関する問い合わせに対応した。			
 執筆者への提供資料			
【備考】 (1)収集した文書類の整理：52 日間実施 (4) a) 海外交流展覧会資料のデジタル化：3 日間実施（25 件 550 点） b) 『150 年史 年表（稿）』へのデータ追加：85 点 (6)資料提供・問い合わせ対応：65 件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27 年度より継続的に行ってきた文書類の整理・保存措置について元年度も進めた。また収集・整理した文書類のデータを活用し、『150 年史』執筆者へ資料提供を行うことができた。そして、寄稿された原稿の整理と入稿を進め、編集出版業務へ着手することができた。引き続き、館内各所に所在する文書類を『150 年史』編纂に有効に活用できるようにするとともに、原稿執筆を促し資料編の準備もすることにより編集出版作業を進めたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	『150 年史』執筆者への資料提供や館史に関わる問い合わせ、調査研究などの要望に迅速に対応できるようになった。また、原稿の整理や入稿を進められたことから、中期計画に対する進捗状況は順調である。2 年度以降も引き続き文書類のデータ化を行い、利用しやすい文書整理を心掛け、さらなる活用を図るとともに、編集出版作業を進めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目		(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究 2) 博物館情報、文化財情報に関する調査研究	
プロジェクト名称		博物館情報システム・資料情報処理に関する調査研究	
【事業概要】当館の文化財情報システムや博物館ウェブサイト、博物館システムの整備や運用について検討するとともに、文化財情報に関する諸般の調査研究を実施する。			
【担当部課】		学芸部	【プロジェクト責任者】美術室長（兼列品管理室長） 羽田聡
【主な成果】 (1)当館の文化財情報システムや博物館ウェブサイト、博物館におけるインフラネットワークの整備や運用について検討する情報システム検討委員会を隔月で開催し、文化財情報に関する調査研究を推進した。 (2)情報システム委員会での検討課題が多岐にわたることから、文化財情報の調査研究をより強力に推進するためのデジタルアーカイブ小委員会を設置、隔月で開催した。 (3)e 国宝のリニューアルや国立博物館所蔵品統合検索システム (ColBase) への対応のため、近年の他機関における動向や社会的ニーズの変化を踏まえ、メタデータの整備や画像提供のあり方について調査・検討を行った。 (4) ColBbaseが当館の公開データを自動的に収集可能なよう、文化財情報システムの改修を行った。 (5)写真及び撮影におけるデジタル化の推進に伴い増大する画像データに対応するため、ストレージの増強を図った。			
<pre><!-- 分類 --> <!-- objectWorkType --> <!-- objectWorkType --> <!-- term --> <!-- objectWorkType --> </!-- objectWorkType --> <!-- type を designation として指定に換える --> <!-- classification --> <!-- classification --> <!-- term --> <!-- classification --> </!-- classification --> </!-- objectClassification --> <!-- objectIdentification --> <!-- title --> <!-- title --> <!-- titleSet --> <!-- preferred を漢字表記, alternate をかなにする --> <!-- application --> <!-- application --> <!-- application --> <!-- application --> </!-- titleSet --> </!-- title --> </!-- objectIdentification --></pre> 文化財情報システムの改修 (ColBase 対応)			
【備考】			
・情報システム検討委員会 6回 ・デジタルアーカイブ小委員会 4回			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館のデジタルアーカイブズや博物館ウェブサイト、博物館システムの整備や運用について検討する情報システム検討委員会を隔月で開催したほか、文化財情報システムや画像ストレージシステムの改修を通じ、文化財情報に関する調査研究を促進した。 情報システム委員会での検討課題が多岐にわたることから、元年度から文化財情報の調査研究をさらに推進するためのデジタルアーカイブ小委員会を設置、開催した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	画像データのバックアップシステムの稼働を安定に運用開始することができたことで、ストレージ増強の計画を進めた。元年度末に発生した新型コロナウイルスの影響により工場の出荷が遅れ、予定していた作業が年度内に実施できなかったが、2年度に実施予定である。 元年度は文化財情報システムを含めた博物館アーカイブズの調査研究に特化した分科会として、デジタルアーカイブ小委員会を設置し、本調査研究をより推進した。2年度以降も本委員会と併せて開催を継続する。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他 有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 文化財アーカイブズの形成に関する理論的・実践的研究 ((4)-②-2))		
【事業概要】 当館が活動範囲とする仏教にかかわる歴史と美術について、展覧会や調査研究事業と連動した情報収集を行い、そこにデジタル技術を適切に取り入れることにより、データの継続的な作成・データベースの構築・情報資源の公開並びに共有へと展開させる。その際には実践に即した方法論を鍛え、文化財の保存活用に資するアーカイブズの形成・発展にも寄与することを目指す。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	資料室長 宮崎幹子
【主な成果】 デジタル撮影の安定的な稼働を目指し、撮影機材、環境、保存用ストレージ、体制等の整備を行い、多数の撮影を実施した。情報システムや公開用データベースの更新を適宜行い、情報の公開と拡充に積極的に取り組んだ。また法隆寺、国立情報学研究所との共同研究についてあらたに覚書を締結し、実施した。 (1)特別展「国宝の殿堂 藤田美術館展 曜変天目茶碗と仏教美術のきらめき」(以下、藤田美術館展)、特別陳列「法徳寺の仏像 一近代を旅した仏たち」等の開催と連動して、彫刻・絵画・書跡・工芸・考古の各分野の文化財の撮影を行った。「藤田美術館展」では、図録掲載のすべての作品について新規の撮影を実施し、精度の高い文化財写真の収集と公開を実現させた。藤田美術館の所蔵品については未公開作品も含めて寄託期間中にさらに多くの撮影を継続しており、研究資料の蓄積に取り組んでいる。 (2)元年に寄託となった法隆寺金堂壁画写真ガラス原板(法隆寺所蔵。363枚)について、同寺が国庫補助事業によりおこなっているデジタル化に協力し、あわせて国立情報学研究所高野研究室との共同研究により、デジタル化が完了した一部の高精細画像をもちいてデジタルコンテンツを制作した。コンテンツは特別陳列「重要文化財 法隆寺金堂壁画写真ガラス原板—文化財写真の軌跡—」(12月から翌年1月)において一般に公開した。デジタル化事業は来年度も継続されるため、3年度に金堂壁画全12面の画像を盛り込んだ完成版の制作を目指して、引き続き共同研究をおこなっていく。 (3)3年度に刊行予定の快慶作品を集成した大型図録のため、兵庫県・浄土寺等において文化財写真の撮影を実施した。この事業は、当館のアーカイブズの充実のみにとどまらず、広く学界へ裨益する事業にも結び付けられる成果である。			
			
		デジタルコンテンツ「法隆寺金堂壁画写真ガラス原板」	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館では、文化財アーカイブズの形成を重要な事業のひとつとして位置付けており、拝観や移動、調査の機会が稀少な文化財を画像データとして蓄積し、共有可能な研究資源としていくことには大きな意義があると考えます。文化財の撮影は、保存や所有者の意向、物理的・時間的制約など様々な要因が影響するため、過去の平均値との比較から各年度の実績を評価することは必ずしも適切ではないが、主な成果でも述べたとおり、学術的に重要でありながら撮影の機会を得ることが難しい文化財について、継続的に調査を実施して質の高い画像データを取得して公開に繋げていることの意味は非常に大きい。近年では、文化財写真の黎明期を伝えるガラス乾板のデジタル化にも取り組むなど、更なる発展も視野に入れている。今後も仏教美術研究・情報の拠点として、文化財アーカイブズの質・量双方の維持に努める予定である。また、人員と予算に限られる現在のような体制で、他館と比して遜色ない幅広い活動を展開できている点も評価できる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	デジタル撮影並びにスキャニングによる画像データの作成について、現在のところ安定的な稼働を維持できている。内部での処理から最終的な情報公開までの一連の流れについて、今後とも人材及び機材の確保を含めた長期的な展望が必要である。 当館では仏教美術分野において国内唯一と言っている貴重な画像データのコレクションを運用しているが、CT撮影に代表されるような文化財調査の進展に併せ、文化財アーカイブズの拡充が図れるよう、更なる体制整備が肝要である。今後も文化財の保存・活用そして研究の基盤として機能するべく、文化財アーカイブズ形成の実践を続けていくとともに、それを下支えする理論の構築にも取り組んでいく。

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等							
【年度計画】 (4館共通) 1) 海外の博物館・美術館等の研究者を招へいし、海外の研究者との交流を促進する。 2) 当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。 3) 国際的な講演・研究集会、シンポジウム等の開催若しくは職員を派遣する。 4) ICOM (国際博物館会議) 京都大会2019に参加し、積極的に協力する。 (東京国立博物館) 1) 学術交流協定を締結している博物館及び東アジア・欧米主要館を中心に、海外の博物館との交流を活発に行う。 2) アジア国立博物館協会 (ANMA) 理事会・定期大会、IEO (国際展覧会オーガナイザー会議) 等の国際会議へ参加する。								
担当部課	学芸企画部企画課国際交流室	事業責任者	室長	楊鋭				
【実績・成果】 (4館共通) 1) 中国、韓国、欧米の博物館・美術館等から計 55 人の研究者を招へい・受け入れ、研究交流を行った。 2) 中国、韓国、マレーシア、イスラエル、米国、ヨーロッパなど 19 カ国・地域の博物館・美術館等へ研究職員を 89 人派遣し、収蔵品とその活用に関する研究及び研究交流を行った。 3) 文化庁支援による北米・欧州ミュージアム日本美術専門家連携・交流事業の一環として日本美術専門家会議 (2 年 1 月 31 日、東京国立博物館) 及び国際シンポジウム「展示室で語る『日本美術』」(2 年 2 月 1 日、同館)を開催した。 4) 第 25 回 ICOM (国際博物館会議) 京都大会に参加した。 (東京国立博物館) 1) 韓国国立中央博物館及び中国・上海博物館等との学術交流協定に基づき、研究員の交流・派遣を行うとともに、海外での文化財調査や特別展など共同事業の企画・実施準備、国際会議に研究員を派遣した。また、元年度は館蔵品の海外貸与案件が大幅に増加し、当館クーリエの派遣をはじめ、国際的な展示協力、展示施設の調査、ネットワーク構築、交流事業の推進を図った。 2) 外国人来館者に日本美術をより深く理解し、楽しんでもらうため、多言語対応担当者を継続的に海外に派遣し、各国の公私立博物館の多言語化の対応状況を調査した。特別展及び平常展において、外国語のパネルを増設や展示作品の多言語解説の改善等、外国人へのサービス向上を図った。								
【補足事項】 (4館共通) 上記研究員派遣人数は当館予算による派遣延べ人数を示す。 科学研究費助成事業、当館収蔵品の海外貸与にともないクーリエ派遣等外部資金等を含む人数は 141 人。 (東京国立博物館) 1) 研究員の海外交流の成果を館内で共有するため、学術交流発表会及び派遣者による研究交流成果報告会を実施した：①韓国国立中央博物館研究員 (7 月 30 日鄭 美娟氏・9 月 24 日李 賢珠氏)、当館研究員 (2 年 1 月 28 日市元壘主任研究員・三笠景子主任研究員) ②中国・上海博物館研究員 (3 月に予定していたが、コロナウイルス蔓延防止のため中止)								
								
第 7 回アジア国立博物館協会 (ANMA) 理事会・定期大会 (11/29)								
【定量的評価】項目	元年度実績	目標値	評定		27	28	29	30
海外からの研究者招聘	55人	-	-	経年 変化	83	73	35	79
海外への研究者派遣	89人	-	-		47	60	67	52
国際シンポジウム開催数	1回	-	-		1	1	1	1
国際シンポジウム参加者数	314人	-	-		284	463	334	256
【年度計画に対する総合評価】 評定：A	【判定根拠、課題と対応】 韓国国立中央博物館・中国上海博物館との協定に基づく主体的な招へいに加え、海外の優れた研究者を招聘するとともに、当館研究員を海外に派遣し研究者交流を活性化することにより、博物館活動の向上を図る。元年度で6度目となる北米・欧州ミュージアム日本美術専門家連携・交流事業には11カ国30人の参加があった。また、海外における日本美術展の当館クーリエ派遣などの取り組みにより海外研究者・博物館関係者との交流が進み、今後の展覧会等事業や研究交流につながっている。さらに、外国人来館者向けに展示室のパネルや作品の多言語解説の改善を行った。2年度は、海外の博物館・美術館との交流・連携を一層深めていくとともに、東京オリンピック・パラリンピックに向け、外国人来館者にとってより楽しく分かりやすい情報発信に努めたい。							
【中期計画記載事項】 信に努めたい。 我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。さらに、2019年ICOM京都大会の開催にあたり、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与する。								
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 例年より多くの研究者招へいと派遣により成果を達成し、順調に遂行できた。第6回となった北米・欧州ミュージアム日本美術専門家会議では、「展示室で語る『日本美術』」というテーマのもと、欧米の研究者による日本美術に関する活発な議論が交わされ、交流を通じて相互理解を図ることができた。また、平常展示室において、日本史や日本文化の知識が少ない外国人等の展示理解・補助を目的として、時代背景や用途等を記した解説パネルを各展示室に増設した。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等								
【年度計画】 (4館共通) 1) 海外の博物館・美術館等の研究者を招へいし、海外の研究者との交流を促進する。 2) 当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。 3) 国際的な講演・研究集会、シンポジウムの開催若しくは職員を派遣する。 4) ICOM（国際博物館会議）京都大会2019に参加し、積極的に協力する。									
担当部課	総務課 学芸部		事業責任者	課長 西尾佐枝子 企画室長 山川曉					
【実績・成果】 (4館共通) 1) ・サンフランシスコ・アジア美術館副館長ミンツ氏を招へいし連携に関する打合せを行い、同館へ職員を派遣するなど、積極的に交流を行った。 ・2019年度北米欧州ミュージアム日本美術専門家連携交流事業において、実行委員会に参画し、全般に協力して行い、特に当館で刀剣・甲冑に関するワークショップ、東福寺、龍光院、大西清右衛門美術館、千總、岡墨光堂において、エクスカッションの企画、運営を行った。 2) 研究交流及び研修等のため、職員18人を海外へ派遣した。 3) ・中国国立シルク博物館長趙豊氏を招へいし、研究集会及び学術交流を行った。 ・国際博物館の日・ICOM京都大会2019開催記念シンポジウム「ICOM京都大会2019の開催に向けて」の開催及び運営に協力した。 ・ICOM京都大会開催記念 日米文化教育交流会議(CULCON)美術対話委員会シンポジウム「日本美術における国際交流―課題と可能性」の実行委員会に参画し、開催及び運営に協力した。 ・CULCON美術対話委員会の開催及び運営に協力した。 4) ・日本博物館協会に設置された「ICOM京都大会準備室」への職員の派遣や、大会運営のための各種委員への職員の就任等を通して、大会運営に積極的に協力した。 ・会議、国際委員会、関連プログラム等に職員を派遣し、世界の博物館関係者とネットワークを構築した。 ・当館を会場とする各国際委員会のワークショップやオフサイトミーティング、大会エクスカッションに協力した。 ・KYOTO博物館子どもフォーラム実行委員会に参画し、当館でのKYOTO博物館子どもフォーラム開催に協力した。 ・大会のクロージングセレモニーにおいて、明治古都館（本館）を閉会式場、庭園をパーティー会場として提供したほか、平成知新館では大会参加者向けにICOM京都大会開催記念特別企画「京博寄託の名宝」の特別鑑賞会を実施する等、開催地京都の国立博物館として大会の締め括りに尽力した。 ・ICOM京都大会2019記念シンポジウム「日本のミュージアムの未来」の実行員会事務局に参画した。									
				 ICOM 京都大会閉会式（本館）					
【補足事項】 1) 海外研究者2人、特別研究員1人 4) ワークショップ2件（ICOM-DRM、ICOM-UMAC）、オフサイトミーティング2件（ICOM-ICEE、ICOMAM）、大会エクスカッション1件（文化財保存修理所視察）を当館内で実施した。ICOM京都大会2019記念シンポジウム「日本のミュージアムの未来」を京都で開催した。 なお、東京会場で予定していたシンポジウムは新型コロナウイルス感染症拡大により中止となった。									
【定量的評価】項目		元年度実績	目標値	評価	経年変化	27	28	29	30
海外からの研究者招聘		3人	-	-		2	2	2	14
海外への研究者派遣		18人	-	-		17	21	21	35
国際シンポジウム開催数		0回	-	-		1	0	1	1
国際シンポジウム参加者数		0人	-	-		200	0	140	99
【年度計画に対する総合評価】 評価：A			【判定根拠、課題と対応】 元年度も外国人招へいや海外の研究者との研究交流を行った。また、ICOM京都大会においては、人員及び会場の提供、関連イベントの実施に当たって積極的な協力を行い、開催地の国立博物館としての役割を十分に果たすことができた。さらに、前後にもICOM京都大会に関連したシンポジウム開催に積極的に協力した。以上のことから、年度計画の目標を上回る成果をあげることができた。						
【中期計画記載事項】 我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。さらに、2019年ICOM京都大会の開催にあたり、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与する。									
【中期計画に対する評価】 評価：A			【判定根拠、課題と対応】 元年度はICOM京都大会をきっかけとして、上記招へい者を筆頭に多くの海外の博物館関係者が来訪し、交流を行うことができた。2年度以降もこうした人脈を引き続き活用しながら、海外研究者も交えたシンポジウム、講座、講演等の実施を検討していく。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等							
【年度計画】(4館共通)								
1) 海外の博物館・美術館等の研究者を招へいし、海外の研究者との交流を促進する。								
2) 当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。								
3) 国際的な講演・研究集会、シンポジウムを開催若しくは職員を派遣する。								
4) ICOM(国際博物館会議) 京都大会2019に参加し、積極的に協力する (奈良国立博物館)								
1) 学術交流協定を締結している博物館を中心として、海外の博物館等との交流を活発に行う。								
担当部課	学芸部			事業責任者	部長 内藤栄			
【実績・成果】(4館共通)								
1) 中国と韓国から研究者等12人を招聘し、文化財にかかる最新の研究動向や、博物館活動の現状と今後の方向性等について、情報交換した。特別展「毘沙門天」でアメリカの美術館から展示品を輸送するに際し、先方のクーリエを招聘した。								
2) 職員のべ33人を諸外国に派遣し、現地の研究者と研究交流を図り、また博物館活動全般についての研修を実施した。								
3) 国際講演会「慶州地域における青銅器時代の集落」を8月4日に実施した。学術交流事業で来館した国立慶州博物館研究員による国際講演会を行い、計30人の参加があった。								
4) ICOM2019京都大会に多数の職員が参加するとともに、委員会の一つCOMCOLにおいて2人が口頭報告した。また、COMCOLのプレカンファレンス(8月29日～31日)を受け入れ、会場を提供し、基調講演したほか、奈良県内の現地見学等にも同行した。								
(奈良国立博物館)								
1) 韓国の国立慶州博物館、中国の上海博物館及び河南博物院との間で、学術交流協定に基づいて職員を相互に派遣し、それぞれの専門分野について研究交流を実施した。								
【補足事項】 (4館共通)								
1) 海外からの招聘人数の内訳は、上海博物館(中国)3人、上海市文化と旅游局(中国)3人、河南博物院(中国)2人、国立慶州博物館(韓国)3人、ロサンゼルスカウンティ美術館(アメリカ)1人。								
2) 当館から海外への派遣人数の内訳は、国立慶州博物館(韓国)2人、上海博物館(中国)9人、国家博物館ほか(中国)1人、南京博物館ほか(中国)1人、伊犁州博物館ほか(中国)1人、ウルムチ州立博物館ほか(中国)1人、保利芸術博物館ほか(中国)1人、木井寺ほか(中国)1人、クリーブランド美術館(アメリカ)10人、フリアギャラリー(アメリカ)1人、サンフランシスコアジア美術館(アメリカ)1人、ウィンザー城ほか(イギリス)3人、ライデン民族学博物館ほか(オランダ)1人。								
4) 上記のほか、COMCOLのオフサイトミーティングにも協力し、職員2人を派遣した。								
(奈良国立博物館)								
1) 学術交流協定に基づいて、以下の交流を実施した。								
・韓国国立慶州博物館から職員1人を3か月間招聘し、当館から職員2人を各々2週間と3週間、派遣した。								
・中国上海博物館へ当館から職員3人を10日間派遣した。先方から職員3人を10日間招聘する予定だったが、感染症流行のためキャンセルになった。								
・中国河南博物院から職員2人を15日間招聘した。当館から職員2人を14日間派遣する予定だったが、感染症流行のためキャンセルになった。								
このほか、以下のような海外研究機関からの依頼を受け入れた。								
・香港中文大学文物館が主催するワークショップ「展覧策画と典藏管理」の一行(31人)を受け入れ、「奈良国立博物館における文化財管理」と題して講義したほか、展示会場の設備について現地レクチャーした(4月8日)。								
・京畿道博物館協会(韓国)一行(14人)を受け入れ、当館の概要と歴史について講義した(4月16日)。								
								
香港中文大学主催のワークショップ 館職員による講義								
【定量的評価】項目	元年度実績	目標値	評価	経年変化	27	28	29	30
海外からの研究者招聘	12 人	—	—		13	9	17	12
海外への研究者派遣	33 人	—	—		20	16	22	20
国際シンポジウム開催数	—	—	—		—	—	—	—
国際シンポジウム参加者数	—	—	—		—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 元年度も、学術交流協定を結ぶ海外の機関との間では相互に研究者等を派遣し、交流を図ることができた。また、2件の海外展に全面的に協力し、クーリエや講演等で多数の研究者等を派遣し、現地での研究交流を実施できた。このように欧米や中国・韓国の博物館等との研究交流は堅調であるが、今後は他の地域の博物館など、さらに幅広く研究交流を展開することが学術的発展のために必要である。						
【中期計画記載事項】 我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。さらに、2019年ICOM京都大会の開催にあたり、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 元年度も海外の研究者等を多数招聘し、8月には国際研究集会も開催した。また、海外の博物館での招待講演に複数の職員を派遣し、充実した研究活動・交流を実施できた。ICOM京都大会では、国際委員会の一つであるCOMCOLの事業に全面的に協力し、世界各国の研究者等と交流することができた。海外の機関との交流は、何よりも継続性が肝要であるため、現在結んでいる学術交流協定を中心に、今後も各機関と密に連絡を取り合い、交流を図っていく。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学术交流等							
【年度計画】 (4館共通) 1) 海外の博物館・美術館等の研究者を招へいし、海外の研究者との交流を促進する。 2) 当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。 3) 国際的な講演・研究集会、シンポジウムを開催する。 4) ICOM(国際博物館会議) 京都大会2019に参加し、積極的に協力する。 (九州国立博物館) 1) 学術文化交流協定を締結している海外博物館等との交流を活発に行う。 2) 海外の文化財研究者や修理技術者を招へいし、文化財保存修復施設を活用した専門的な国際交流セミナーやワークショップを開催する。 3) 県内の美術館・博物館と連携し、「博物館に親しむ」ための共同企画を行う。								
担当部課	学芸部博物館科学課 交流課 総務課	事業責任者	課長 木川りか 課長 山野孝 課長 國谷勝伸					
【実績・成果】 (4館共通) 1) 海外の博物館・美術館等の研究者を3人招へいした。 2) 当機構職員2人を大韓民国国立扶餘博物館並びに国立公州博物館へ派遣し、研究交流、調査研究を行った。(10月7日～13日) 3) 特別展「三国志」に合わせ、曹操高陵の発掘調査を担当した潘偉斌氏(河南省文物考古研究院第一研究室副主任)を中国より招へいし、記念特別講演会を開催した。(12月14日開催) 4) ICOM(国際博物館会議) 京都大会2019へ19人が参加・協力した。 (九州国立博物館) 1) 大韓民国国立扶餘博物館及び韓国国立公州博物館の学芸研究士各1人を招へいし(5月23日～6月5日)、講演会を行った。(5月24日) 2) 5月21日～23日にストックホルムにて開催されたIPMの国際コンファレンス”Integrated Pest Management for Cultural Properties”に当館の研究員2人が成果発表と情報収集のため参加した。その内容は10月23日の当館開催のIPMセミナーにて、広く国内の関係者に紹介した。 3) 朝倉市において、福岡県立美術館・福岡市博物館・久留米市美術館・甘木歴史資料館とともに被災地支援及び博物館教育を目的とした合同ワークショップ「ミュージアムがやってきた! inあさくら」を実施し、約1,400人の方にワークショップを体験していただいた。(11月17日開催)								
 ストックホルムの IPM 国際コンファレンス  合同ワークショップの様子								
【補足事項】								
【定量的評価】 項目	元年度実績	目標値	評価	経年 変化	27	28	29	30
海外からの研究者招聘	3人	-	-		51	43	9	21
海外への研究者派遣	31人	-	-		77	67	47	45
国際シンポジウム開催数	1回	-	-		1	1	0	1
国際シンポジウム参加者数	306人	-	-	80	173	0	200	
【年度計画に対する総合評価】 評価: B		【判定根拠、課題と対応】 海外の博物館・美術館等から研究者を3人招へいし、また、学術文化交流協定館をはじめ、31人を海外へ派遣した。年度計画どおり、事業を実施できた。						
【中期計画記載事項】 我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。さらに、2019年ICOM京都大会の開催にあたり、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与する。								
【中期計画に対する評価】 評価: B		【判定根拠、課題と対応】 職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣するなど30年度に引き続き、中期計画に沿った事業を実施できた。 また、ICOM京都大会2019に職員19人が参加し、国内外の博物館・美術館等とのネットワークを構築できた。						

【書式A】

施設名

東京国立博物館

処理番号

1440A

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④調査研究成果の公表								
【年度計画】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1)文化財修理報告書を刊行する。 (東京国立博物館) 1)「東京国立博物館情報アーカイブズ」等を運用し、インターネットを活用した収蔵品・調査研究等に関する情報公開の充実を図る。 2)紀要・図版目録等を刊行する。 3)法隆寺献納宝物特別調査概報を刊行する。 4)研究誌『MUSEUM』を刊行する。(年6回)									
担当部課	学芸企画部企画課 学芸企画部博物館情報課			事業責任者	課長 浅見龍介 課長 今井敦				
【実績・成果】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1)『東京国立博物館文化財修理報告XX』を刊行した。 (東京国立博物館) 1)・「東京国立博物館研究情報アーカイブズ」の運用を継続し、インターネットを活用した収蔵品・調査研究等に関する情報公開の充実を図った。 ・特集印刷物リーフレット等5件のPDFファイル版を当館ウェブサイト上に全件公開することによって研究情報の普及を図った。 2)・『東京国立博物館紀要 55号』を刊行した。 3)『法隆寺献納宝物特別調査概報XL 文王呂尚・商山四皓図屏風 2』を刊行した。 4)研究誌『MUSEUM』679号～684号を刊行した。 ○『東京国立博物館セレクション 小袖』の日本語版と英語版を刊行した。 ○特別展図録8件、特別公開冊子1件、特集印刷物12件(リーフレット8件、冊子4件)を編集した。 ○東京国立博物館ハンドブック(日本語、英語)の改訂版を制作した。 ○出版企画委員会3回、『MUSEUM』『紀要』等編集委員会7回を開催し、博物館出版事業の拡充を図った。									
【補足事項】									
【定量的評価】項目		元年度実績	目標値	評価		27	28	29	30
定期刊行物		15件	16件	C	経 年 変 化	16	16	16	16
紀要等		3件	4件	C		4	4	4	4
『MUSEUM』		6件	6件	B		6	6	6	6
『東京国立博物館ニュース』		6件	6件	B		6	6	6	6
特別展の開催回数(海外展除く)		8回	-	-		6	8	5	8
テーマ別展示の開催件数		18件	-	-		31	33	28	28
講演会等の開催回数		97回	-	-		146	160	199	159
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 紀要、『MUSEUM』、『博物館ニュース』等の定期刊行物15件を刊行するとともに、文化財修理報告等を計画どおり刊行することができた。また、ハンドブック改訂版の制作や、特集展示の刊行物を増やすことで充実した情報を提供することができた。さらに、「東京国立博物館研究情報アーカイブズ」で研究員の調査研究活動等に関する情報を随時公開。加えて、特集印刷物リーフレットのPDFファイル版をウェブサイトに掲載することで、さらなる情報公開に努めた。							
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などを順調に刊行するとともに、展覧会に合わせて『東京国立博物館セレクション 小袖』の日本語版と英語版を出すことで、内外の来館者からの要望が高い出版物を刊行し、販売部数を伸ばすことができた。また、ウェブサイトでの公開等、インターネットを活用した調査研究成果の発信を行うことができた。また今後「東京国立博物館研究情報アーカイブズ」での発信をさらに拡充する。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④調査研究成果の公表							
【年度計画】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1) 文化財修理報告書を刊行する。 (京都国立博物館) 1) 研究紀要『学叢』を刊行するとともに、学術研究公開の一環として既刊分の概要を順次ウェブサイトで公開する。 2) 社寺調査報告書等を刊行する。								
担当部課	学芸部		事業責任者	企画室長 山川暁 連携協力室長 浅湊毅				
【実績・成果】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 『文化財保存修理所 修理報告』17号を刊行した。 (京都国立博物館) 1) 『学叢』41号を刊行した。 2) 社寺調査の報告として、科学研究費補助金〔基盤研究(A)〕報告書『河内地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究<金剛寺編>』と『河内地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究<観心寺編>』の計2冊を刊行した。								
【補足事項】 (京都国立博物館) ○定期刊行物の実績値には含まないが、特別展にて2件、特別企画にて1件の図録を刊行した。 ○『京都国立博物館寄託の名宝 美を守り、美を伝える』は、特別企画に関連した図録であると同時に、28年ぶりに寄託の名品を紹介する収蔵品目録でもある。当館研究員が編集及び執筆を行っていることに加え、日本語・英語・中国語・韓国語を併記した意欲的な図書となった。								
								
				『京博寄託の名宝』表紙				
【定量的評価】項目	元年度実績	目標値	評価	経 年 変 化	27	28	29	30
定期刊行物	11件	11件	B		11	10	11	11
紀要等	3件	3件	B		3	2	3	3
『博物館だより』	4件	4件	B		4	4	4	4
『Newsletter』	4件	4件	B		4	4	4	4
特別展の開催回数(海外展除く)	2回	-	-		3	2	2	2
テーマ別展示の開催件数	6件	-	-		7	9	8	9
講演会等の開催回数	28回	-	-		39	45	32	37
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 計画的に定期刊行物を発行し、博物館活動の周知に貢献した。 『学叢』には、館藏品、寄託品の調査に関する論文や作品解析などによる研究結果の紹介も含まれている。 特別企画の図録は、最新の研究成果を盛り込むとともに多言語対応をし、充実した内容となるよう心掛けた。							
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 『学叢』及び社寺調査報告書を継続的に刊行した。調査研究の成果を今後も着実に出しながら、WEB媒体を活用して広範囲に情報を発信できるように努めたい。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④調査研究成果の公表								
【年度計画】 (奈良国立博物館) 1) 研究紀要『鹿園雑集』を刊行するとともに、学術研究公開の一環としてウェブサイトで公開する。 2) 東京文化財研究所と共同で実施している絵画作品等の光学的調査について、報告書を刊行する。 3) 文化財修理に関する印刷物を刊行する。									
担当部課	学芸部			事業責任者	部長 内藤 栄				
【実績・成果】 1) 研究紀要『鹿園雑集』21号(4月30日刊行)を刊行し、併せて当館ウェブサイト及び奈良国立博物館リポジトリにPDF形式で掲載することで、研究成果を広く公表した。また、同22号(2年5月31日刊行予定)の編集作業を進めているところである。 2) 東京文化財研究所と共同で実施している絵画作品などの光学的調査に関する報告書『信貴山 朝護孫子寺蔵 国宝 信貴山縁起絵巻 調査研究報告書ー研究・資料編ー』を元年度末に刊行した。 3) 当館の文化財修理の報告として、『奈良国立博物館 文化財保存修理所 修理報告書』第1号を刊行(6月30日)した。引き続き第2号の刊行準備を行う。									
【補足事項】  研究紀要『鹿園雑集』21号 『文化財保存修理所 修理報告書』第1号  『信貴山 朝護孫子寺蔵 国宝 信貴山縁起絵巻 調査研究報告書ー研究・資料編ー』									
【定量的評価】項目		元年度実績	目標値	評価	経年変化	27	28	29	30
定期刊行物		6件	5件	A		4	6	6	6
紀要等		2件	1件	A		0	2	2	0
『博物館だより』		4件	4件	B		4	4	4	4
特別展の開催回数(海外展除く)		3件	-	-		3	3	3	3
テーマ別展示の開催件数		5件	-	-		4	4	4	4
講演会等の開催回数		25回	-	-		28	26	26	27
【年度計画に対する総合評価】 評価：A		【判定根拠、課題と対応】 『鹿園雑集』21号を刊行し、2年5月末刊行予定で現在編集作業中の22号によって、12月までの調査研究事業報告を完了できる見込みである。東京文化財研究所と共同で実施している絵画作品などの光学的調査に関する報告書についても、刊行に向けて順調に準備を進めている。また、30年度から編集・準備をしてきた『奈良国立博物館 文化財保存修理所 修理報告書』について、第1号を刊行、美術館・博物館・大学・研究機関等・教育委員会等に送付し、当館の文化財修理事業について広く伝えることができた。その他定期刊行物についても、例年以上に公開することができた。							
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。									
【中期計画に対する評価】 評価：A		【判定根拠、課題と対応】 調査・研究の成果は、図録など、展覧会に関わる刊行物を中心に発信できている。また、文化財研究の成果を研究紀要『鹿園雑集』として刊行、報告するとともに、ウェブサイト及びリポジトリでの公開を実施した。また、これまで『鹿園雑集』の一部として報告していた文化財修理事業について、『奈良国立博物館 文化財保存修理所 修理報告書』として単独で刊行するようになり、より充実した内容を報告できるようになった。定期刊行物等についても、目標値を大きく上回る件数を刊行、公開することができ、中期計画は順調に遂行しているといえる。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④ 調査研究成果の公表								
【年度計画】 (九州国立博物館) 1) 研究紀要『東風西声』を刊行する。 2) 博物館科学に関する印刷物を刊行する。									
担当部課	学芸部博物館科学課 学芸部企画課	事業責任者	課長 木川りか 課長 白井克也						
【実績・成果】 (九州国立博物館) 1) 研究紀要『東風西声』第15号を刊行した(部数950部)。 2) 『九州国立博物館 文化財修理報告』第2号(発行部数750部)を編集、刊行した。18年度から20年度までの当館経費による修理の報告書をまとめた。 ・特別展図録 『京都 大報恩寺 快慶・定慶のみほとけ』、『室町将軍一戦乱と美の足利十五代一』、『日中文化交流協定締結40周年 記念 三国志』、『ルネ・ユイグのまなざし フランス絵画の精華 大様式の形成と変容』 ・特集展示図録 『館蔵名品展 更紗 生命の花咲く布』、『住友財団修復助成30年記念 文化財よ永遠に』、『版経東漸～対馬がつなぐ 仏の教え～』、『縄文王国やまなし』									
【補足事項】 1) 『東風西声』第15号では14本の論文を掲載した(予定)。(うち当館職員執筆12本、外部研究者からの寄稿2本) 2) 『九州国立博物館 文化財修理報告』は、当館所蔵品、当館経費で修理を行った当館以外の国立博物館等所蔵文化財、当館文化財保存修復施設で修理を行った文化財について、修理に関する記録をまとめたものである。第2号では、18年度から20年度までの文化財修理を対象とした。対象文化財の基本的情報、施工会社、修理前後の写真、使用材料、修理で得られた知見等を掲載する。これらの情報を公開することで、次回の修理での参考となるだけでなく、美術史や歴史学等の学術研究、修理事業の普及啓発など、多方面での活用が期待される。2年度以降も順次刊行する計画である。									
【定量的評価】項目		元年度実績	目標値	評価	経年変化	27	28	29	30
定期刊行物		6件	5件	-		5	5	5	5
紀要等		2件	1件	-		1	1	1	1
季刊情報誌『アジアージュ』		4件	4件	-		4	4	4	4
特別展の開催回数(海外展除く)		4回	-	-		4	4	3	4
テーマ別展示の開催件数		8件	-	-		8	6	6	9
講演会等の開催回数		69回	-	-		87	77	84	80
【年度計画に対する総合評価】 評価: B		【判定根拠、課題と対応】 研究紀要や図録等を刊行し、調査研究の成果を報告できた。また、『九州国立博物館 文化財修理報告』第2号も予定通り刊行し、当館文化財保存修復施設で修理を行った文化財の修理に関する記録を公開することができた。							
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。									
【中期計画に対する評価】 評価: B		【判定根拠、課題と対応】 元年度も予定どおりに印刷物を刊行することができた。また、中期計画のとおり、調査研究の結果を広く公表することができた。中期計画の最終年度も引き続き印刷物を刊行できるよう準備を進めたい。							



東風西声第15号表紙



九州国立博物館文化財修理報告第2号表紙